

524

481



始



近世社會思想大略

(非賣品)

近世社會思想大略

第一篇 總論

第一節 社會主義概論(一)

社會主義の目標(擯取の撤廢)―社會主義の定義に於ける諸説―財産分有主義―集産主義―共產主義―新共產主義―「國家」社會主義と非「國家」社會主義

第二節 同上(二)

社會階級(貴族、小ブルジョワジイ、ブルジョワジイ、プロレタリア)―プロレタリアと社會主義―「空想的」社會主義と「科學的」社會主義

第三節 科學的社會主義

(マルクシズム)大要(一)

マルクス略傳及び著作―ヘゲル、フオイエルバツハの影響―其根本思想(唯物史觀)―意識と生活

第四節 同上(三)

階級闘争説―餘剩價值論―資本主義の下に於ける商品過剰と労働者の過剰との産出―資本主義の必然的倒壊―マルクスの國家論

第二篇 英吉利社會思想

大要

第一節 産業革命と社會思想

英吉利社會運動の三期―産業革命と労働者の窮困―ロバート・オエンと其門下

第二節 政治運動と労働組合運動

チャアチズムの終始と當時の經濟的背景―労働組合運動の沿革と其成績―

十九世紀中葉に於ける社會的平和時代

第三節 社會主義思想の復活

マルクス及びヘンリー・ジヤコビ―社會主義諸團體―新労働組合主義

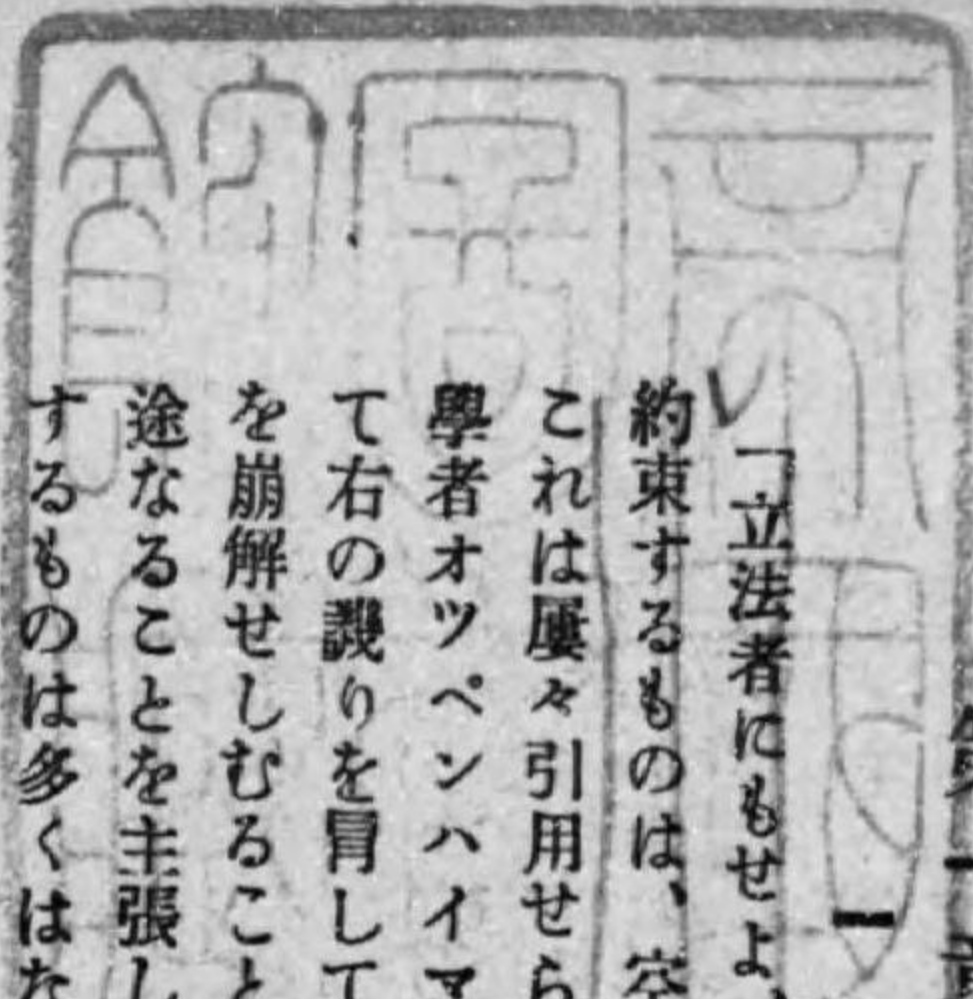
議會労働黨の出現―大戦と労働黨の新綱領―其勢力増進―労働黨内閣―反議會運動―ギルド社會主義の意義

第四節 佛蘭西社會思想

第三篇 佛蘭西社會思想

第一節 佛蘭西革命と社會思想

大革命とプロレタリア―大革命と所有權神聖論―バビヨフの陰謀―産業革命―ルイ・フィリップの金權政治



近世社會思想大略

小泉 信三

第一篇 總論

第一章 社會主義概論 (上)

「立法者にもせよ、革命家にもせよ、平等と自由とを並に約束するものは、空想家でないければ、いかさま師である。」これは屢々引用せらるゝギョオテの句である。獨逸の經濟學者オツベンハイマアは其著書に此句を引用したる後、敢て右の諷りを冒して、内地植民の方法に依つて大地主制度を崩解せしむることが自由と平等とを實現せしむる所以の途なることを主張して居る。此の所謂自由社會主義に賛同するものは多くはない。併し社會主義者の大多數はその平等と自由とを兩ながら實現せんと欲する點に於てはオツベンハイマアと志を同するものである。近世の無政府共產主義者はマルクスを評して自由を解せざるものとなして居るが、而かも其のマルクスも其の究局志す所は、各人が任

意その爲し得る所に應じて働き、その欲する所に従つて取るといふ原則を事實にすることであつた。今予は遽かにギョオテの言に賛成するものではないが、併し自由の實現を個人行動に對する拘束の撤去の意味に解するならば、平等と自由との併立困難なることは之を容認しなければならぬ。社會主義者中には此理を容認しようと思ふ者も多いが、又之を容認することを辭せぬ者も尠くない。然らば此理を容認する社會主義者は果して二者の何れを取つて何れを棄てるかと言ふに、彼等は決して自由の爲めに平等を犠牲にはしない、平等の爲めに自由を犠牲にするのが常であるやうに觀察される。即ち社會主義者が第一義とする所は平等であると言つて好いのである。

併し彼等が志す所の平等は法律の前に於ける形式上の「四民平等」ではなくて、實質的の、經濟的の平等である。吾々の社會に安逸にして富有なる者と勞苦して貧困なる者とのあることを除かんと欲するのである。而して此の兩極の對立することは、社會主義者の見る所では、相互に因果關係に立つて居る。社會成員の一小部分が安逸にして富有なるが爲めに他の(大)部分が勞苦して貧困ならざることを得ず、又一部分が勞苦して貧困なるが故に始めて他の部分が安逸にして富有なることを得るのである。換

第二節 著名なる佛蘭西

社會主義者

サンシモン及びサンシモン主義者
シヤアル・フリエール・ブラン
チエヌ・カベエーオオギユスト・ブ
ラン

第三節 二月六月革命と

バリコンミュン

二月革命六月革命とプロレタリア
バリコンミュンの社會思想史上に於ける意義

第四節 佛蘭西に於ける

政治的社會運動

マルクシズムの輸入—諸黨派の離合
—佛蘭西經濟組織の手工的特色より來る社會主義運動上の特色

第五節 革命的サンヂカ

リズム

政治的社會運動に對する不滿—純プロ
レタリア主義—サンヂカリズムの思

想特色(排理智主義、貴族主義)

第四篇 獨逸社會思想

第一節 社會運動の發端

フイヒテ、ロオドベルトスーラツサ
アルの運動—其政治的經濟的背景—ラ
ツサアルとマルクス

第二節 ビスマルクの社

會黨鎮壓

兩派社會黨の合同(ゴオタ綱領)—皇
帝狙撃事件—社會黨鎮壓令の發布と其
成績

第三節 マルクス主義と

マルクス修正主義

エルフルト綱領—社會民主黨内の右
翼と左翼—ベルンシュタインの修正主
義—黨の態度

第四節 大戦と露西亞革

命の影響

社會黨の分裂—獨立社會黨—共產黨
ギョルリツツ綱領—聯合社會民主黨

第五篇 露西亞社會思想

第一節 ポルシエギズム

の理論

露西亞社會主義の二潮流(社會革命
とマルクス黨)マルクス黨の分裂(ポ
ルシエギキとメンシエギキ)—レニ
ン著「國家と革命」—ラヂツクの斬新案

第二節 實行上のボルシ

エギズム

ソギエト制度—共產主義—土地問題
の困難—農民と共產黨との協和と衝突
—新經濟政策—勞農政府前途の困難
(生産力の不足と農民の覺醒)

結 論

社會思想上の改良主義と革命主義—
革命の條件—改良主義の困難と革命家
の錯覺—當面の要務 (以上)

言すれば、一方は社會主義の術語に所謂「搾取」し、他方は「搾取」せられて居るといふことになる。そこで社會主義者が第一義とする平等とは畢竟搾取の廢止に外ならぬのである。

「アダムが耕しエバが紡ぎし時
抑も誰れが紳士(貴族)なりしぞ」

「……彼等は天鷲絨を着け、アルミンと毛皮とを以て飾れる上衣を着け、吾等は粗き麻布を纏ふ。彼等は葡萄酒を有し香料を有し及び良き麵麩を有し、吾等は燕麥麵麩と屑肉と糞と水とを有する。彼等は邸宅と美麗なる莊園とを有し、吾等は困憊と勞働とを有し、又田野に雨風を冒かさなければならぬ。而かも彼等が其豪華の資を得るのは、吾等と吾等の勞働とからである……」

これは十四世紀英吉利の農民一揆を煽動し、囚へられて刑殺せられた革命僧ジョン・ポオルの言葉として傳へらるるものであるが、文句こそ異なれ此思想は何の時代の社會主義説にも之を窺ふことが出来る。而して搾取の廢止といふことは、即ち勞働せずして受ける所得、或は勞働に比例せぬ大所得の廢止に外ならぬ。不勞所得の存在を非とするの一事は何の社會主義説にも共通の要素であつて、此要素を缺く社會主義なるものは之を想像することが出来ぬので

ある。

二

然らば搾取の廢止は如何にして行はるべきかといふに、社會主義者は搾取の行はれることを自然又は人性の罪に歸せずして、之を制度殊に財産制度に歸する。然らば現行又は既往の財産制度に於て何故に搾取が行はれるかといへば、主としてそれは勞働力と生産用具とが同一人の手に存せぬ處から起る事である。例へば勞働力を有する農民が耕すべき土地を持つて居らぬ。そこで農民は其生産物の一(大)部分を提供する約束の下に土地所有者から耕作の許可を得なければならぬ。勞働力を有する工業勞働者が原料機械道具作業場を持つて居らぬ。そこで彼等は其生産物の價値よりも少ない(と社會主義者の認める)賃銀を甘んじて受けて資本家の工場で勞働しなければならぬ。そこで地主資本家の懐に不勞所得が收得せられる。要するに搾取は生産者と生産用具との分離に由て可能となるのであるから、搾取を廢する爲めには此の分離せる二のものを再び結合しなければならぬ。

此結合に先づ二つの方法が考へられる。それを個別的に行ふのと集合的に行ふのとである。土地を持たぬ農民に其の耕し得る丈の農圃、耕作用具等を與へて之を一個の獨

立自作農となし、或は工業勞働者に仕事場道具原料等を與へて獨立の手工業者たらしめることは、即ち右の結合を個別的に行ふ所以である。これは私有を廢止するのではなくて、何人をも或程度の財産所有者となすことに依つて搾取を不可能ならしめようとするもので、強いて名づけて言へば分有主義とも稱すべく、その主張者の最も著名なるものは佛蘭西のブルドン(後節参照)である。

併し此の分有主義は近世大規模經營の發達したところでは殆ど意味をなさざる場合がある。例へば鐵道、鑛山、大造船所等を各勞働者に分有せしめて以て個別的に生産者と生産用具とを結合するといふことは、既に技術的に不可能である。(例へば鐵道従業員に果して線路幾哩幾鎖、汽罐車貨車客車幾臺宛を所有せしむべきか)。そこで生産者と生産用具との結合は個別的に行はないで、之を集合的(collectively)に行ふの外なしとの主張が起り來る譯である。即ち現在私人の手に屬して居る生産用具を個人に分有せしめな

を始め近世社會主義者の重なるものは、國家をして生産用具を所有せしむべきことを主張して居るから、それだけの意味に於ては近世社會主義の主流をなすものは「國家」社會主義だと謂つても好い。(マルクス主義が果して眞に國家社會主義と稱し得べきものなるか否かは後に論ずる機會がある。)職業的團體の第一位に居るものは勞働組合であつて、勞働組合に生産用具を所有せしめて生産指揮の任に當らしめようとするものは、即ち革命的サンヂカリズムである。ルイ・ブラン、ラツサアル(何れも後節参照)等の勞働者生産組合の組織による社會改造案にも亦た是に類する一面がある。英吉利のギルド社會主義は一方生産用具は之を國家に所有せしめ、他方産業の監理は該産業従事者の勞働組合(ギルド)をして之に當らしめようとするものであるから、地域的社會主義と職業的社會主義との謂はゞ中間に位するものである。無政府共產主義に至つては其特色は其の否定的一面に於てのみ明確である。即ち此主義を奉ずるものは搾取に反對すると同時に集中的國家權力に反對する。然らば生産用具の所有者には如何なる團體がなるかといへば、成るべく其屬員を拘束することの少ないやうに組織せられた小規模の地方團體(コンミュン)を可とするものゝ如くである。無政府共產主義には明に前記分有主義に親近なる一面

がある。無政府主義者たるバクウニン、クロボトキン等がブルドンの影響を受けたことは蔽ふべからざる事實である。

分有主義に對しては集的に生産者より生産用具との結合を實現しようとするものは皆な之を集産主義 (collectivism) と稱して差支ない譯であるが、實際には此名稱は地域的社會主義 (或は狭く「國家」社會主義) の異名の如くに用ゐられて居る。

三

社會主義と共產主義との區別は二様の標準に由て行はれて居る。一は所有制度變革の及ぶ程度如何を標準とし、一は搾取なき社會を實現すべき方法如何を標準とするのである。

前の標準に由れば、生産用具 (土地鑛山工場機械等) のみを限つて其私有を廢止しようとするのが社會主義で、一切物の私有を (消費財の私有をも)、即ち全く我物汝物の別を廢止しようとするのが共產主義である。元來吾々は吾々の所得の許す範圍内に於て其社會の生産物を享受することを得る譯であるが、社會主義社會に於ては不勞所得は廢せられるから、一切の所得が労働に依つて贏ち得られることにはなるが、併し猶ほ兎に角所得なるものはある。而して

其所得を以て買ひ得たものは我物、然らざるものは他人の物であるから、兎に角所有の上に於ける自他の別は依然として存する。共產主義は此の所得の觀念を一掃し、一切自他の別を廢せんことを期するものである。プラトオが「ポリタイヤ」中に描きサア・トマス・モアが「ユウトピア」の中に描き、エチヌム・カベエが「イカリイ旅行記」中に描く所は何れも此状態である。(但しプラトオは治者と護國者との爲めにのみ共產を要求して、庶民には私有を許して居る。) 今日と雖も家庭内に於て食物に就いては共有に近き状態が行はれて、各員は其欲望に應じて消費することを許されて居る。共產主義は此状態を全社會に及ぼさんとするに外ならぬものである。

後の標準に由れば共產主義とは畢竟ボルシエキの主張に外ならぬものである。ボルシエキズムの特色は社會主義實現の爲めには必ず暴力革命の避くべからざること、暴力革命に依つて政權を掌握した労働者階級は必ず獨裁政治を行はねばならぬと主張する點に存する。今日此意味に於ける共產主義と對立せしめられてゐるのは社會民主主義であるが、此の兩者間の差異は後者が議會運動による労働者の政權獲得を必しも不可能としないのに對して、前者がその到底不可能なることを言明する一點に存すると謂つて好か

らう。以上二つの意味に於ける共產主義は必しも一致せぬ。

ボルシエキはマルタスの説くが如き、各人が其能力に應じて働き、各人に其欲望に應じて與へられる状態を最終の目標とするものだから、後の意味の共產主義者は又前の意味の共產主義者でもあると謂つて好いかも知れぬが、前の意味の共產主義者は必しも後の意味の共產主義者ではない。モアやカベエは労働者階級暴力革命の主張者ではないのである。

社會主義の定義に就いては諸説紛々であるが、社會主義とは財産制度の根本的變革に由て平等、即ち搾取の廢止なる目標に到達せんことを期する主張だといふ予の見解は、左程の反對に遭ふことがなからうと思ふ。予は搾取を不可能ならしむるが如き財産制度の變革を要求するものであれば、必しも形式上私有の廢止を要求しなくても社會主義たることを失はぬものと解する。例へばブルドン主義者は私有廢止論者ではないが、併し社會主義者によつて私有の廢止が要求せられるのは抑も何の爲めかといふ點を考へて見れば、私有廢止要求の條件を具備せぬからとて之を社會主義から除外することは、法律的形式に拘泥し過ぎるもの、やうに感ぜられる。社會主義の定義如何を問はず、實際に社會主義思想史でブルドンを省略してゐるものは殆どない

のである。

第二章 社會主義概論 (下)

前述の通り社會主義の目標は搾取の撤廢にある。然らば現社會に於て果して何人が搾取者で、何人が被搾取者であるか。此問題に答へれば自ら社會階級論になる。階級に關して學者の説く所は頗る區々に出で、居るが、始め佛蘭西に行はれ、次で弘く世に普及した階級別は、社會階級を分つて次の四つとして居る。

- ① 封建領主階級 (gentilhomme, aristocratie)
 - ② 獨立小營業者階級又は小ブルジョア階級 (petite bourgeoisie)
 - ③ 資本家階級又はブルジョワ階級 (bourgeoisie)
 - ④ 賃銀労働者階級又はプロレタリア (proletariat)
- 前に搾取は生産者と生産用具との分離を待つて始めて可能となるといふ事を述べたが、右の階級別も大體其點を標準にして説明することが出来る。(1)と(3)の階級は生産用具を所有して労働力を有せぬ階級であるに對して、(4)は労働力のみを有して生産用具を有せぬもの、形つくる集群

である。但しブルジョワジイのプロレタリアに對する關係は私法的契約關係であるに對し、**封建貴族**の其所領地耕転者に對する關係は權力壓制の關係である。併し佛蘭西革命が此の領主百姓間の權力的關係を撤廢し、他の諸國に於ても前後して同様の變革が行はれてから（最も晚き露西亞に於ては一九一七年）社交上傳統上は兎に角經濟上の意義に於ては(1)(3)兩階級の區別は漸次消滅しつつあるものと見てよからう。(日本では此の兩階級の區別は殊に稀薄のやうに見受けられる。日本には英蘭蘇格蘭の貴族の如き、又東部普魯西の郷紳(Junker)の如き階級は殆ど之を見るこゝとが出来ぬ。我邦封建諸侯の如く其所領の保有に冷淡で、之を速に動産化して顧みなかつたものは世界に稀であらう。)

此間にあつて(2)は勞働力と生産用具とを兩つながら有して、自己の勞働と自己の生産用具とを以て生産を營む階級である。予は嘗て**小ブルジョワジイ**とは親方職人と稱せらるゝものが形づくる階級だといつたことがある。獨立の大工左官指物師經師屋小商人等は皆な此に屬するものである。此階級に屬するものは、資本家に備はれず働く——生活の爲め勞働力其者を賣却せずして、勞働生産物を賣却する——といふ點がプロレタリアと異なり、又生活を

主として自己の肉體的勞働、熟練に頼るといふ點に於てブルジョワジイと區別せらるゝものである。此階級は直接には何人をも搾取せず、又何人にも搾取せられぬ位置に居る。併し近世の資本主義的大商工業の爲め小ブルジョワの存在が幾多の方面に脅される爲め其階級も屢々ブルジョワジイを敵視する。併し小ブルジョワジイは資本主義勃興以前の過去に其盛時を有したものであるから、従つて此階級が要求する社會改造は、大體に於て親方職人等の生活が安固を保障せられてゐた過去の狀態過去の制度の復活である。此潮流を代表する社會主義者の最も偉大なるものがブルドンである。

上記(1)と(2)とは俱に傳統を有する保守的階級である。現代文藝作家中にあつて好んで材を小ブルジョワジイの間に求める久保田萬太郎氏は、其作品中に此階級の保守的感情回顧的思想を最もよく描いて居る。小ブルジョワなる語は單に小資本家といふほどの意味にも用ゐられて居る。これは誤用だとは言はれぬが、併し例へばマルクスがブルドンを罵つて、小ブルジョワの理想以上に出でざるものと云つた場合などの此語の意味は上述の如く解釋しなければならぬのである。

二

ブルジョワジイ 又は資本家階級とは營利の目的を以て勞働者の勞働力を購入する者及び此の利害を同うするもの階級だと謂つて好からう。これが今日の「搾取」階級である。此意味に於ける資本家の最も典型的なものは、大工場主である。大工場主は其所有工場に數十幾百或は幾千人の勞働者を集めて、原則として大規模經營の下に生産を行はしめる。此場合生産指揮者たる工場主の行動は、一に利潤慾に由て左右せられ、一切の傳統慣習を無視して最短の途、最廉の方法を取る合理主義を守り、又生存競争上それを守ることを餘儀なくせられて居る。これが**資本主義**又は資本的生産方法の特徴である。

併し何人も好んで其勞働力を賣却して他人の使役に甘んずるものはない。されば資本家が勞働力を購入し得る爲めには、勞働力其者を賣却するより外に生活の途なき無産者がなければならぬ。これが**プロレタリア**（プロレタリアの階級がプロレタリア）である。資本主義以前に於ても、搾取といふことは殆ど如何なる時代にも行はれた。たゞ其等の搾取は奴隸制、農奴制、體僕制に於けるが如く、多く強制的權力に依つて行はれたのである。然るに今日のプロレタリアは、資本家の爲めに勞働することを、法律上では強制せられて居らぬ。彼等は任意契約に依つて其勞

働力を賣却するのである。これが今日の社會に行はるゝ搾取の特有の形態である。此のプロレタリアは如何にして發生したか。プロレタリアの中には資本主義的大工業の爲め獨立を奪はれた元の小ブルジョワもある。併し其大部分は、各種の事情の爲め耕すべき土地の得られぬ農民の、都市に流入したものである。故にプロレタリアの大多數は當初から其故郷と共に傳統から離れた、安定なき流浪の生活を營んでゐるものである。

プロレタリアの語は屢々貧民階級と同義に用ゐられる。併し社會主義の術語として用ゐらるゝ場合には、それはただ勞働力の賣却に由て生活する者を意味するに止まり、貧困は必しもプロレタリアの必要資格ではない。舊露西亞の農民、愛蘭の小作人の如きは貧困は則ち貧困であるが、プロレタリアでは無い。工場勞働者中の熟練あるものは多くの小ブルジョワよりも裕なる所得を收めて居るのである。

貧困は歴史あつて以來大多數民衆の常に免れざる運命であつた。近世プロレタリアに特有の不幸は彼等の**生存の不安**である。プロレタリアと雇主たる資本家との間には、奴隸と主人、百姓と領主との間に於けるほどの密接な固定的個人的關係がない。資本家は其の有利とする時に、

例へば原料を仕れでもするやうに労働者を雇傭し、景氣の變動の爲め生産の縮少が必要となれば何時でも之を解雇する。而して其の好景氣恐慌不景氣の循環は、何人の責にも歸すべからざる、一種の不可抗力たる事實があるのである。此不安に脅かされてゐる爲め彼等が享有する法律上の自由は毫も自由の實を備へない。彼等は資本家が命ずるところの労働條件を拒むことが出来ないのである。機械其他の設備が高價となるに従つて速に放下資本を回収する爲め、資本家に取つては労働者を長時間の労働に服せしめる必要が益々緊切となる。一方工場内の労働は分業と機械應用との爲め無趣味單純なる機械的動作の反覆に過ぎぬものとなる。而してプロレタリアの大多數は其故郷と共に一切の傳統を棄て、他郷に移住民の生活を営むものであることは、前述の通りである。彼等は親族故舊から離れて、他人所有の土地の上に、他人所有の家屋に生活する。而して資本主義は労働者の妻子を驅つて工場鑛山に労働せしめるから、彼等は又家庭に生活の支柱を求めることが出来ぬ。プロレタリアは殆ど有ゆる方面に於て安定なき生存を営むのである。社会的變革を欲するの情は勢ひ助長せられざるを得ぬ。プロレタリアの境遇には彼等を保守的ならしむる要素が全く缺けて居るといつて好いのである。

此のプロレタリアの數量は資本主義の發達と共に益々増加する。此の社会的變革を欲する階級をば自己の發達に連れて、發達せしめねばならぬところに資本主義其者の矛盾を見出したものは、即ちカアル・マルクスであつた。從來社會階級論から除外されてゐた形があるのは農民階級である。併し農民を直ちに一階級を成すものと見るべきか否かは議論を要する。極く大體を言へば、全然他人に傭はれて耕作に従事する農業労働者は、之をプロレタリアに編入すべきものであらう。中小小作人及び自作農の位置は小ブルジョワの位置に似て居る。英吉利に見るが如き資本的大經營を營む借地農業企業家は、ブルジョワジイに屬するものであらう。

プロレタリアの數量的勢力は人に由て必しも計算が一致せぬ。姑らくゾムバルトに由れば、英蘭に於ては全人口の七割強、革命前の獨逸に於ては五割八分乃至六割、北米合衆國では眞の工業プロレタリアが全人口の二割五分を占めて居る。(Der proletarische Sozialismus II, 105)

さて上の如く、社會階級の對立と階級的利害衝突の事實を認め、是と社會主義思想との關係に着目すると、茲に通

去の社會主義思想の發達に二階段を識別することが出来る。所謂「空想的」社會主義とマルクス、エンゲルスの「科學的」社會主義とがそれである。此問題には本章のマルクス論に於て再び觸れなければならぬが、空想的社會主義から科學的社會主義への進歩を一言に言へば、社會主義の基礎が自然的正義の彼岸から階級的利害の此岸に移されたものと謂つて宜からう。「空想的」社會主義者に數へらるゝゴドキン、オエン、サン・シモン、フリーエエ、カベエ(何れも後節参照)等が説く所は種々様々であるが、兎に角何れも資本主義の惡しきもの、不正なるものたるに對して善きもの正當なるものとして社會主義を要求し、而して此の資本主義の存續を人の無智無理解に歸して居る。之に反してマルクスの見る所に由れば、凡そ一の社會制度が發生し維持せらるゝのは之を維持せんと欲するものが之を維持する實力を有するからである。資本主義が維持せられて居るのは世人が眞理正義の何たるかを解せぬからではない。ブルジョワジイが之を利益とし、而して之を維持する實力を有するからである。假令説教に由て眞理正義の何たるかを知つても、ブルジョワジイの利害はその現在の位置特權を放棄することを許さないのである。故に社會主義は決して萬人に取つての眞理ではない。それは階級的利害に

基づくプロレタリアの要求であり、プロレタリアの理論的表現である。社會主義はたゞプロレタリアの實力に依てのみ實現せらるべきものである。而してそのプロレタリアの勢力は資本主義の發達と共に殆ど不可抗の必然を以て増進する。茲にマルクスが社會主義の到來は必然だといふ理由が存する。社會主義思想は斯くして始めて之を實現すべき實力に根を下ろしたのである。

第三章 科學的社會主義(マルクス) 大要(上)

佛蘭西革命の「人權宣言」(一七九三年)は自然權、自然的正義の思想を表明すること最も明確なるものであつた。それに曰く、「世界の不幸は自然的人權の忘却と閉却とにのみ起因することを確認して、佛蘭西國民は嚴肅なる宣言に於て、その神聖不可讓の權利を宣明せんことを決議する」(前文)。(凡ての人間は自然に依りて、且つ法律の前に平等なるものである) (第三條)。「權利は自然を其原理とし、法律を其規則とする」と(第六條)。

併し人爲の法制の外に眞に合理的にして眞に正義に適へる「自然」の秩序あることを認め、現實法制の當不當合理不合理をば判断すべき標準を「自然」に求める此の思想は、此時に始まるものではなくて、古代希臘羅馬から基督教會的中世を経て近世に及ぶ、社會哲學思想上の一大潮流をなすものである。併し此の自然的秩序其者が如何なるものたるべきやに就いては、社會哲學者の所見は必しも一致して居らぬ。右の「人權宣言」は、所有權を天賦不可侵なる權利の第一に數へるものであるが、これと反對に財産の共有經濟上の平等も亦た同じ自然法思想に基づいて之を要求し得べきものである。人權宣言の發布後二年にしてフランソワ・ノエル・パポヨフの平等主義陰謀が企てられたが、パポヨフ等の行動は實に「平等は自然の第一の心願」であり、自然は凡ての人間に一切の財を享受すべき平等の權利を與へ」といふ信念に出發するものである。然るに自然は此權利を自ら實現することが出来ぬ。そこで社會の目的は、自然狀態の下に就て強者悪者の爲め屢々侵害せらるる此平等を擁護し、且つ凡ての者の協力に依て凡ての者の共同享樂を増加せしむることに在るといふのであつた。パポヨフは獨創的思想家ではなくて、其信條は十八世紀の佛蘭西に於ける幾多の社會主義的思想家に之を得たものであるが、此等社

會主義思想家の中に在つて影響最も大なりしモレルリの著作は、實に「自然の法典」(Code de la nature, 1750)を標題とするものであつた。其主旨を一言にしていへば、共產主義又は社會主義は、自然の意志、自然の目的に適へるものだと謂ふのである。

社會主義思想は十九世紀に入つて著しい進歩を遂げた。併し乍ら社會主義の論據其者に於ては、人は猶ほ久しく自然法思想の支配を脱却することが出来なかつたのである。「十九世紀中葉に於ける佛蘭西社會主義は、之を精細に吟味すれば、結局みな自然的に打ち建てられて居る「ベルンシュタイン」)。フリーエは其中の最も卓越し、最も特色あるものである。嘗に佛蘭西のみではない。英吉利のロバート・オエン及び其追隨者、獨逸の「正義人同盟」(Bund der Gerechten)及び一時其首領たりしワイトリンクに就ては、略ほ同じ事を言つて好いのである。

一八四八年の始めブルユツセル數十頁の小冊子「共產黨宣言」が發表せられた。此小冊子が説く所は、畢竟今日の資本主義的生産方法が必然的に發達せしむる偉大なる生産力はやがてブルジョワ社會其者に加へらるゝ双となり、資本主義的生産防法が同じく必然的に發達せしむるプロレタ

リヤは、此の双を揮ふ人となる。此の事業遂行の爲めに「萬國のプロレタリアエルよ、團結せよ」といふに歸着する。社會主義は是に至つて**進化の思想**と結びいて、自然法思想から脱却した。社會主義が「自然」の意志目的に適ふか否かは、最早問題ではない。社會主義は資本主義其者の發達の結果として始めて必然となり可能となるのである。自然は永遠の自然である。資本主義にして若し「自然」に背反するものならば、それは何時如何なる處に於ても不當不合理、當否に排棄せらるべきものでなくてはならぬが、若し資本主義の發達が社會主義を必然ならしむるものならば、資本主義の發達は社會主義の前提であり、其の爲めの省略すべからざる豫備階段でなくてはならぬ。此意味に於て資本主義は社會主義者に取つても存在の意義あるものでなくてはならぬ。自然法的社會主義者の立場よりすれば、資本主義(又は營利主義)的社會秩序は人類の無智誤解又は墮落の爲め、自然に背いて造り出されたものであるから、社會主義は資本主義を根本的に一掃して、其跡に出直して新たに設計せられねばならぬが、右の新しい立場からいへば、社會主義は謂はゞ資本主義を基礎として、始めて其上に實現せらるべきものであるから、社會主義者は毫も資本主義をば人類の過失又は罪惡として悔むことを要せぬのである。「共產

黨宣言」がブルジョワ社會、ブルジョワ階級を罵る語句は峻酷を極めて居るが、而かもそれは決してブルジョワ社會を自然に反し、永遠の正義に反するものとして攻撃しては居らぬ。「宣言」の筆者は、ブルジョワジイが自ら己れの墓穴を掘りつゝあること、「その滅亡とプロレタリアの勝利とが俱に避くべからざるものたる」ことを指摘するに外ならぬのである。社會主義は斯くして「**空想より科學へ進化**」を遂げた。

三 「**共產黨宣言**」はその含蓄の豊富、文章の雄勁、後世に對する影響の著大なる點に於て、古今の宣傳小冊子中恐らく其の第一位に居るべきものであらう。而して此宣言を起草したものは、年未だ三十に満たざるカアル・マルクス、其の二歳年少の同志フリードリヒ・エンゲルズとであつた。

マルクスとエンゲルスとが深く相許し、相提携するに至つたのは、一八四四年前者が亡命客として巴里に滞在して居る時の事であつた。一八一八年獨逸トリエールに猶大人辯護士の子に生れたマルクスの背後には、ボン及び伯林兩大學の學生生活と一年に亘る萊茵新聞主筆としての關係があり、一八二〇年バルメンに商工業を營む富有なる

カルギン教徒の家に生れたエンゲルスには、一年志願兵の服役と、英吉利マンチエスタアに父が營む紡績工場に於ける業務見習との経験があつた。而かも境遇を殊にし経験を殊にする此の二人は、各々別の途から進んで同じ結論に到達してゐたのである。さうして茲に思想史上稀に見る交友關係が成立つて、嚴格執拗にして、新聞通信文を作るにも學位論文を草する時ほどの詮索と推敲とを重ねなければ満足出来ぬマルクスも、輕快敏捷にして、酒を好み遊技に長じ、殆んど有ゆる歐洲國語に通じ、筆を下せば文章立どころに成るといふ趣きのエンゲルスとの長所短所が相援け相補ふことになつた。二人の提携の最初の産物としてはブルノ・パウエル等を攻撃した「神聖家族」(一八四五年)がいで、第二の産物として「共產黨宣言」が公にせられたのである。

「共產黨宣言」發表の殆ど翌日、巴里に二月革命が起り、其波動は獨逸に及んで三月革命となつた。マルクスは亡命地ブルユツセルから巴里を経て獨逸に歸り、同志と共に新萊因新聞を起して革命に参加したが、反動襲來の爲め新聞紙は約一年にして廢刊を餘儀なくせられ、マルクス・エンゲルスは逃れて英國に渡り、終に此處を墳墓の地となした。倫敦に於けるマルクスの生活は、始めは殊に甚しい窮乏の

中に過ごされた。妻ジェニイが、病死した其子の爲めに、その生れた時に捕籠を備へず、その死にたる時に容易に棺を買ふことを得なかつたのを嘆いたのは、此頃の事である。エンゲルスは去つてマンチエスタアに赴き、忍んで父の紡績會社に社員となつた。マルクス一家の生活は紐育トリビュン紙への通信に對する少額の稿料とエンゲルスの仕送りとに依つて辛うじて支へられたのである。マルクスは倫敦に斯る困難なる生活を營むことが、一八四九年からその一八八三年の死に至るまで、三十四年間であつた。而して此の三十四年の亡命生活は、一八六〇年前後に亘る稍々晴やかな十年間を除けば、前は極度の窮迫の爲め、後は殆ど絶間なき病苦の爲め、俱に常に暗澹たるものであつた。彼れが心血を傾けて書いた「資本論」の公刊(一八六七年)と彼れが一時大に望を馳した「國際労働者協會」(第一インタナショナル)の指導(一八六四―七二年)とは、何れも此の間期に屬するものである。併し協會はやがてマルクスと無政府主義者バクウニン一派との衝突の爲めに崩解し、又其後に於けるマルクスの創作力は、不健康の爲めに甚しく衰へたので、「資本論」續巻の原稿は、纔に死後エンゲルスの整理を俟つて始めて公刊せらるゝことを得たのである。(次章附録年譜參看)

四

マルクスの人物に就いていへば、その孝子たり良夫たり慈父たるの一面と、其敵に對して辛辣毒惡厭ふべく憎むべき一面とが著しい對照をなして居る。其妻の埋葬に際して哀傷に堪へず、自ら墓穴に投ぜんとして纔に支へられたものはマルクスであつた。其愛兒を失つた時エンゲルスに訴へて、「事毎に如何に子供が思ひ出されるかは、筆には書けぬ。僕は既に有らゆる災厄に遭つて來て居るが、併し今にして始めて眞の不幸の何たるかを知つた。幸にして埋葬の日から酷い頭痛がして、考へることも、聽くことも、視ることも出来なくなつてゐる……」と書いたのも彼れであつた。而して其の同じマルクスは、其機關紙に惡意を以てバクウニン誹毀の記事を掲げ、ブルドンを評しては惡哲學者にして惡經濟學者たるもの、「經濟學と共產主義との間にあちこち彷徨する小ブルジョワ」と謂ひ、ラツサアルを嘲けつてはマルクス自身の説を「冗長極まる饒舌を以て世間に吹聴する中學六年生」といひ、嘗て雜誌發行の事を共にしたルウゲを「いかさま師」「老驢馬」「舊友エツカリウスを「賤民」、同じく舊友ユングを頭腦軟化症を患ふらしい「輕浮なる小僧」と罵ることを敢てして居る。而かもマルクスに於て、此の後の一面が前の一面を壓倒して居たことは、

争ふことが出来ぬ。彼れは愛する人を有すること最も少なくて、憎む人を有すること最も多き人物であつた。プロレタリアの解放は彼れが其の爲めに生涯を捧げた事業ではあつたが、彼れは民衆を愛するよりは寧ろ**虐主を憎む人**であつた。彼れは或機會に自ら或人の

「世に其敵を嘯むよりも快なる事なし」といふ詩句を引用して居る。バクウニンが彼れを評して「己れ自身と多分その最も近き者との外何人をも愛せざる」人物と言ひ、マツチイイがその「心の人類の愛よりも憤怒を以て満ちたる」人物と言つたのは、恐らく失當ではあるまい。マルクスに取つては、エンゲルスと外一二人を除くの外、前日の友人は皆な敵となつた。此性格の人物に歴史の進歩が階級闘争に依て行はるとの説あることは、決して偶然ではないのである。

五

科學的社會主義は前述の如く進化思想を其基礎にして居る。而して此の進化思想をマルクスは哲學者ヘゲルに得た。マルクスが柏林大學に學んだ時、ヘゲルは既に故人となつてゐたが、當年の獨逸思想界の空は、既に没した此の太陽の餘光に輝やいてゐたのである。マルクスがヘゲルに學んだものは、事物を固定不變のものとして見ずに、

變化運動成長するものとして見る、即ち事物を過程として見る、**辯證法** (Dialektik) 又は辯證的思考法であつた。本と辯證の語は對論を意味する。一人の一の立言(肯定)に對し第二の人が反對の立言(否定)をなして衝突が起れば、それが即ち辯證であつて、此衝突の爲めに人は更に一段高き眞理に到達する(綜合又は否定の否定)ことが出来る。ヘゲルは、一切事物のより高きものへの發展は、みな此の形式(肯定—否定—否定の否定)に従つて行はれるものと考へた。然るに肯定と否定との對抗は即ち矛盾であるから、「矛盾は一切の運動及び活力の根源である。或物は其自體の内に矛盾を有する限りに於てのみ運動し、衝動と活動とを有するものだといふ事になる。而して此發展は、ヘゲルに従へば、漸次の推移としてのみ行はれるものでなくて、飛躍的にも行はれる。例へば水が零度にて突然氷結するが如く、「量が質に變する」のである。

マルクスは此の辯證的思考法に依つて、資本主義社會も亦た、其内に有する矛盾の爲めに、更に一段高きもの(社會主義)に向つて發展すると考へた。だが唯心論者たるヘゲルは、一切萬物の發展を心、觀念、精神の發展に歸したのを、マルクスは反對に、精神の發展其者を物質的發展の爲めに起るものと考へた。故に曰く、「予の辯證的方法は普

に根本的にヘゲルのと異なる許りでなく、實に其正反對のものである。ヘゲルに取つては、思惟は—ヘゲルはそれを觀念なる名稱の下に一個自立の主體たらしめて居る—現實の創造主で、現實は單に其の外的表現たるに過ぎないが、予にあつては反對に、觀念が物質の人間頭腦中に轉置せられ、翻譯せられたものに外ならぬのである」と。これが所謂 **頭で逆立ちして居る辯證法を足で立たしめた**ものである。

マルクスをしてヘゲルの唯心論から脱却せしめたものは、**フオイエルバッハ**の唯物論であつたといつて好からう。フオイエルバッハは人間を人間に取つて最高の實在となし、「自然及び人類以外には何物も存在せぬ。吾人の宗教的空想が造りしところの人間以上の諸實在は、吾々自身の存有の空想上の反映に外ならぬ」ことを説いて、辯證法と唯心論との「矛盾」を粉碎したのである。そこでマルクスに取つては、資本主義社會を更に高きものに發展せしめる矛盾は、物質的矛盾でなくてはならぬ。而して彼れは此の矛盾を、資本主義的所有權制度と其制度の下に發展する物質的生産力との衝突と、それが別の形を取つて現れた、ブルジョワジイとプロレタリアとの階級利害の衝突とに見出したのである。此觀察を一般的に社會の進化に適用すれば、そ

れは即ち**唯物史觀**である。

マルクスは社會發達の段階として亞細亞的社會制度、古代的社會制度、封建的社會制度、資本主義的社會制度を擧げてゐるが、今唯物史觀は、此等各階段から次の階段へ進ませしむる動力を**物質的生産力**の發達に求めるものである。「社會的關係は生産力と密接に結び付けられて居る。新生産力の獲得と共に人はその生産方法を變更し、生産方法、即ち生活必要物獲得の方法の改善と共にそれは一切の社會的關係を變更する。手磨臼は封建諸侯を有する社會を生じ、蒸汽製粉機は工業資本家を有する社會を生ずる」のである。

生産力が發達して、今迄適合してゐた社會制度と抵觸不適合を來たすに至ると、茲に社會革命が開始される。然るに法律、政治、宗教、藝術、哲學、一言にして言へば、思想は時の經濟組織を其基礎とするものであるから、經濟組織と生産力とが衝突を來たすと、此衝突は人間の頭腦に反映して、革命思想となる。生産力と資本主義的社會制度との衝突が生んだ社會主義は、その一例たるものである。

唯物史觀は決して歴史を決定する思想の力を否認するものではない。たゞそれは更に進んで、其の思想其者は果して何に因て決せらるゝかの間に答へようとするものである。而してマルクスは容易に思想を決定するものは經濟的

關係だといふのである。曰く「人間はそれ自身の歴史を造る。併し人間はそれを自由なる材料から造らず、自ら撰擇した事情の下に造らずに直接目前に與へられたる、傳來の事情の下に之を造る」と。「又曰く人間の意識が人間生活を決定するのでなくて、反對に人間の「**社會的生活が其意識を決定する**」のであると。

第三章 科學的社會主義(マルクス)

クシズム)大要(下)

マルクス、エンゲルスに従へば「凡ての從來の社會の歴史は**階級闘争**の歴史である。」過去に於て相闘争したものは自由民と奴隸と、古羅馬の貴族と庶民と、中世貴族と體僱と、ギルド市民と職人と等であつたが、此等の闘争の結果は、常に全社會の革命的變革か、或は闘争諸階級の共倒れかの何れかであつた。此理は今日の社會に於ても變るものではない。たゞ今日に於ける階級闘争は、昔日のものに比して著しく單純化したことを其特色とする。「全社會は益々二個の大なる敵陣、二つの大なる相互に當面對立する階級、即ちブルジョワジイとプロレタリアとに分岐する」の

である。マルクスの謂ふ階級闘争とは、畢竟搾取者と被搾取者との闘争に外ならぬものであるが、さてその搾取は如何にして行はれるかといふに、今日のブルジョワ社會に於ける此の搾取の真相を説明せんが爲め打ち建てられたのが即ちマルクスの餘剰價值論である。

マルクスの餘剰價值論は、彼れの商品價值論の基礎の上に築かれて居る。彼れの商品價值論は、一商品の價值は、その商品を生産する爲め社會的に必要なる——即ち普通條件の下、普通の熟練及び普通の労働強度を以てして必要なる——労働時間に由て決せられるといふものである。元來商品の價值を決するものはそれに費された労働量であるとの説は、決して新奇の見解ではなくて、英吉利經濟學史上に於て、是より先き此説若しくは此説の萌芽と目すべきものを唱へてゐたものは——キリヤム・ベチイ(一六二二—一八七)、アダム・スミス(一七二三—一七九〇)、デギッド・リカルド(一七七二—一八二二)の如く——決して一二には止まらぬ。たゞ此の労働價值説は、マルクスに由つて獨特の發展を遂げて、労働搾取説の根據に採用せられたのである。さて右の商品價值論を労働力なる特殊の商品の價值に適用すると、茲に餘剰價值論が成り立つのである。

二

労働力は決して何時如何なる處に於ても商品たるものではない。若し労働者が奴隷であるならば、彼れは己れの労働力を自由に處分することを許されぬから、労働力は賣買せられず、従つて商品となることがない。併し又、縱令労働者は自己労働力に對する處分権を有するに至つても、労働者自ら生産用具を所有する場合には、彼れは自ら生産を營み、其の生産物たる商品を賣却することを利とすべき筈であるから、此場合にも亦た労働力其者は、商品として賣買せらるゝことがない。故に労働力が商品であるのは、労働者が法律上の自由人格者にして、且つ經濟上には生産用具を有せぬといふ、特殊の條件の具備する處に於てのみあることである。而して此の二條件が具備することは、即ち本稿第二章に述べた、プロレタリアに於てのみ之を見るのであるから、マルクスの餘剰價值論は、搾取一般ではなくて、近世プロレタリアの搾取を説明する理論に外ならぬものと承知しなければならぬ。

さて前記の如く、商品としての労働力の價值を決するものは、その生産上社會的に必要なる労働時間である。労働力の生産に必要な労働量とは、畢竟労働者自身及び其家族の生活に必要な資料を生産する上に於て要せらるゝ労働量の義に外ならざるものである。さて今資本家に雇傭せら

るゝ労働者が、其労働に依て、その労働力の價值に等しい丈けの價值を生産したならば、——即ち労働者及び家族の生活資料を生産する爲めには、 n 時間の労働を要する場合に、雇傭せられた労働者が n 時間丈け労働するに止まるならば——正に一方に於て消滅した丈けの價值が他方に於て造り出さるゝ譯であるから、其處に何等の價值増加は起らない。然るに労働力の價值は n 時間に相當するものであるのに、労働者を雇入れた——即ち労働力を購入した資本家が、労働者を $m+n$ 時間の労働に服せしむるものとすれば、茲に m 時間の労働に依つて、新なる價值が発生する。これが所謂餘剰價值であつて、やがて資本家の資本に對する利潤となるものである。此意味に於て、利潤は搾取の結果(支拂はれざる労働)であり、資本は搾取の手段だといふことになるのである。

三

餘剰價值は右述の如くにして發生するものであるが、假りに労働者が $m+n$ 時間の労働に服しても、労働者が賃銀として $m+n$ 丈けの價值を收得することを得たならば、餘剰價值は労働者の有に歸して、資本家は利潤を收得し得ぬ筈である。故に搾取が行はれる爲めには、労働者の賃銀(一)が n に等しいか、少くも $m+n$ 以下なることを保障

する法則がなくてはならぬ。マルクスの所説に由れば、此保障を説明するものは、所謂産業豫備軍の理論である。産業豫備軍とは、雇傭せられんことを求めて得ざる労働人口を指していふものであるが、マルクスに従へば、資本主義的生産方法は自ら生産上に使用し得る以上の相對的過剰人口を造り出す作用があるといふ。如何にして其事が行はれるか。

資本家が労働者を雇傭して生産を營む唯一の目的は、餘剰價值の獲得である。併し資本家は此事を他の資本家との競争場裡に行はなくてはならぬ。而してそれが爲めには、資本家は極力生産費の低減に努めなければならぬ。さて生産費を低減せしむるには、結局労働組織の改善、機械の採用に依る労働生産力増進の方法に出でなければならぬのである。資本家は其の搾取し得た利潤をば、再び資本として更に新なる労働搾取の爲めに用ゐるが、此の資本蓄積の進行と共に、上述の理由に由て資本家は資本の中の益々大なる部分を機械原料等の生産用具に投じ、賃銀として直接労働雇傭の爲めに支出せらるゝ資本部分は、相對的に益々減少することになる。略言すれば、機械が人間を不用ならしめるのである。そこで資本の蓄積せらるゝこと愈々大にして、雇傭せられざる労働者愈々多く、労働者の地位は愈

々不安なるものとなる。「此法則は資本蓄積に對應する貧困の蓄積を生ぜしめる。一方の極端に於ける富の蓄積は、同時に他の極端、即ち自己の生産物を資本として造り出す階級の側に於ける貧窮、勞苦、隸屬、無智、動物化、墮落となる」とマルクスは言ふのである。(勞働者貧窮説)

四

他面資本的生產方法に依つて異常の發展を遂げた生産力は、資本的所有制度の下に於ては購買し盡くされぬ**過剰商品**を産出する。「爾かく強大なる生産並に交易手段を喚起したブルジョワ的生產關係及び交易關係、ブルジョワ的所有關係、近世ブルジョワ社會は、自ら呪文を以て喚び出した地底の威力を最早支配し得ざるに至つた魔法使に類して居る」(共產黨宣言)。ブルジョワ社會が有する生産力は、「最早ブルジョワ的文明、ブルジョワ的所有關係の促進に役立たないで、反對に生産力は、此等諸關係に取つては強大に失ふこととなり。……ブルジョワ的諸關係は、それに依つて造られたる富を收容するには狹隘に失するものとなつて居る」のである。此矛盾は恐慌になつて現れる。**恐慌**は、左なきだに大經營との競争に於いて其存立を危うくせられて居る中小經營の滅亡を促して、茲に大經營集中の勢が進められ、同時に資本は極めて少數の資本豪族

の手に集中せられて、爾餘のものは悉くプロレタリアとなり、又會社企業が弘く行はれるので、生産經營上の職分は有給社員の手で擔當せられて、資本家はたゞ配當を收得するの外全く用なきものとなる。そこで資本家は終に國家權力を掌握したプロレタリアの爲めに其資本を剝奪せらるる時が來るといふのである。

資本集中から生ずる「一切の利益を寡奪し獨占する資本豪族の數が絶えず減少して行くと共に、勞働者階級の貧困、壓迫、隸屬、墮落は益々甚しきを加へるが、又之れと同時に絶えず膨脹、且つ資本的生產方法の機關其者に依つて訓練せられ、結合せられ、且つ組織せられた勞働者階級の資本家階級に對する憤恨は、益々深きを加へる。そこで資本の獨占は、その發達せしめたる生産力の桎梏となる。生産用具の集中と勞働と社會化とは、最早資本主義的外被とは兩立せぬ點に到達する。それは破裂する。資本主義的私利權の臨終の時が打つ。**剝奪者は剝奪せられる**」(資本論第一卷第廿三章)。自己の勞働に基づく個人的私有の否定が資本主義的生產方法なるは對して、右の「剝奪」は「否定の否定」たるものである。

五

最後に一言すべきはマルクス、エンゲルスの**國家觀**で

ある。彼等は資本主義發達の頂點に於て、プロレタリアが國家權力を掌握して有ゆる生産用具を資本家階級の手から國家の手に集中すべきことを、且つ主張し、且つ豫期するものであるから、此限りに於ては、彼等も亦た國家社會主義者に屬するといひ得べき筈であるが、併し此狀態は、決して彼等の最高目標とする所ではない。彼等が終局の志とする所は、國家が消滅して「各個人の自由なる發展が全員の自由なる發展の條件たる一の相互結社」が之に代ることであつた。併し此事は、マルクス等の所見に従へば、プロレタリア國家の資本家剝奪に依つて、謂はゞ自然に遂行せらるべきものである。といふのは、マルクスに従へば、國家なるものは本と一階級の他階級を抑壓して、以て其搾取條件に従はしめんが爲めの機關に外ならぬものであるから、苟も階級闘争、階級分岐のある所には、必ず國家なきことを得ないのである。然るに現社會の最下階層をなせるプロレタリアは(マルクス、エンゲルスに従へば)有ゆる階級別、有ゆる階級對抗を廢止することに依つて、始めて自己の解放を遂げ得るものであるから、プロレタリア國家がブルジョワジイを剝奪して、之をブルジョワジイたらしめるに至らしめ、同時にプロレタリア自身をしてプロレタリアたらしめるに至らしめた曉には、最早抑壓すべき階級、

抑壓せらるべき階級の別は存せぬこととなり、國家は其存立の理由と基礎とを喪失すべき筈である。國家は今日より明日へ撤廢せられずして死亡するとは、是を指して謂ふのである。而して此點に至れば、マルクスは無政府主義とは殆ど僅に一膜を距て、相接し、勞働者階級の解放を俟つて國家は始めて完成するといふ、ヘゲル、ラッサールの國家觀とは全く相反するものである。

此の將來の國家なき自由社會に就いては、マルクスは僅に數言を以て之に觸れるに止めて居るが、兎に角その記す所によれば、其曉に於ては、個人を分業の下に隸屬せしむることが廢せられ、精神勞働と肉體勞働との對立が廢せられ、勞働其自體が人の生活欲望となり、個人能力の不偏的發達に依つて生産力は著しき増進を遂げ「各人は其能力に應じて、各人は其欲望に應じて」の原則が其時始めて實現せられるのである。而してこれがエンゲルスの所謂「人間の必然の國から自由の國への飛躍」であつて、「人類の前途」は茲に終りを告げるといふ。

これがマルクス主義の**大要**である。

附録 マルクス年譜略

- 一八一八年 獨逸トリエルに生る(五月五日)。名はハイリシヒカアル。父ハイリヒ辯護士を業とす。母はノンリエツテ。プレスブルグ氏。共に猶太教を奉ず。
- 一八二〇年 フイリドリヒ・エンゲルスバルメンに生る(十一月廿八日)。
- 一八二四年 マルクス一家基督新教に改宗す。
- 一八三五年 中學の業を卒へ、ボン大學に學ぶ。
- 一八三六年 ジュニイ・ヨハンナ・ベルタ・フオン・エストフアアレンと結婚す。伯林大學に入り(十月)法學哲學史學を修む。
- 一八四一年 イエナ大學に於て學士の稱號を受く。ボン大學の私講師たらんと試む。
- 一八四二年 萊因新聞の寄稿家となり、次でキヨルンに移り、其主筆となる(十月)。
- 一八四三年 始めてエンゲルスに會ふ。萊因新聞主筆を辭す(三月)。結婚す(六月)。里巴に移る(十一月)。
- 一八四四年 アルノルド・ルウゲと共に「獨逸佛蘭西年報」を發行す。再びエンゲルスに會ひ、生涯の提携技に始まる。
- 一八四五年 巴里退去を命ぜられ、ブルニュセルに移る(三月)。エンゲルス「英吉利労働階級の狀態」(Die Lage der arbeitenden Klassen in England)を著す。
- 一八四七年 「共產主義者同盟」に加盟す。十一月「同盟」の會議に列せんが爲め倫敦に赴き、エンゲルスと共に宣言起草の依頼を受く。ブルドン駁論「哲學の窮乏」(Misère de la philosophie: Réponse à a philosophie de la misère de M. Proudhon)を公にす。
- 一八四八年 「共產黨宣言」(Manifest der Kommunistischen Partei)發表せらる(二月)。二月革命起る。ブルニュセル退去を命ぜられて巴里に移り、更にキヨルンに歸る(四月)。新萊因新聞を起し其主筆となる(六月)。始めて(ラッサアルを知る)。
- 一八四九年 新聞紙法違反及び武裝抵抗教唆の罪を以て告發せられ、無罪の宣告を受く(二月)。新萊因新聞廢刊す(五月)。巴里に移る(五月)。巴里退去を命ぜられ、倫敦に居を定む(八月)。エンゲルスバアテンの叛亂に参加す。
- 一八五〇年 エンゲルスマンチエスタアに赴き、其父の經營する紡績會社に請はる「共產主義者同盟」の中央委員會を退く(九月)。
- 一八五二年 紐育トリビニへの通信を始む。
- 一八五九年 「經濟學批評」(Zur Kritik der politischen Ökonomie)を著す。
- 一八六一年 伯林に赴きラッサアルと會見し、又郷里に母を省す。
- 一八六三年 ラッサアル獨逸全國労働者協會の運動を開始す。マルクス・エンゲルス沈黙して敢て聲援せず。
- 一八六四年 國際労働者協會(インタナショナル)倫敦に創立せられ、本部を倫敦に置く(九月)。マルクス其指導者となる。
- 一八六七年 資本論第一卷 (Das Kapital. Kritik der politischen Ökonomie)を公にす。
- 一八六八―九年 インタナショナルに於てベクワニ一派と争ふ。
- 一八七〇年 エンゲルス倫敦に移る(九月)。
- 一八七二年 インタナショナル本部紐育に移る(事實上の解散)。
- 一八七八年 エンゲルス「排デユウリク」(Herrn Eugen Dührings Umwälzung der Wissenschaft)を著す。
- 一八八二年 妻ジュニイ死す(十二月)。
- 一八八三年 マルクス死す(三月十四日)。倫敦ハイゲエト墓地に葬る。
- 一八八四年 エンゲルス「家族の起源」(Der Ursprung der Familie, des Privateigentums und des Staates)を著す。
- 一八八五年 資本論第二却エンゲルスの校訂に依つて公刊せらる。
- 一八九四年 資本論第三卷出づ。
- 一八九五年 エンゲルス倫敦に死す(八月五日)。遺言して遺骸、灰を海に投ぜしむ。
- 一九〇五年 以降資本論第四卷たるべかりし「餘剩價值學說論」(Theorien über den Mehrwert)カアル・カウツキイの校訂を得て公刊せらる。

第二篇 英吉利社會思想大略
第一章 十八世紀の産業革命

英吉利近世社會思想史は十八世紀の産業革命に筆を起すのが順序であらう。産業革命とは十八世紀後半から十九世紀前半にかけて行はれた、工場制度の出現確立に伴ふ經濟上社會上の變革を指していふのである。此變革は工業機械の發明採用に依つて惹き起こされたものであるが、工場工業の發生に先だつこと久しく英吉利工業の大部分は既に資本家の支配に從屬してゐたといふことが出来る。といふのは、工業労働に従ふ者は、自宅若しくは自宅附屬の仕事場で生産を行つてはゐたが、彼等は既に原料を資本家の供給に仰ぎ、又其生産物の販賣も亦た資本家に依つて行はれるやうになつてゐたからである。これが工場工業に對する家内工業である。當時英吉利の主要工業たりしものは毛織物業であつたが、此の毛織物業は農家の副業として家内工業の形態に於て營まれてゐたのである。但し同じ家内工業でも労働者の資本家に從屬する程度は一樣ではなかつた。大別すれば、資本家が工人に原料を供給し、其加工に對して

質銀を支拂ふ方法と、労働者自ら原料を買入れ、それに加工して生産物を資本家たる「元機屋」clothersに賣却する方法とがある。第二の方法はヨオクシヤアに於て行はれ、英蘭の西部及び南部の織物業に於ては十六七世紀を通じて第一の方法が行はれ、爾餘の重要工業に於ても十八世紀には既に資本家が原料を給して質銀を支拂ふ制度が行はれてゐたものゝ如くである。

以上の場合には生産者と生産用具とは未だ全然分離するには至らずして、例へば毛織物業に就いていへば、織機は猶ほ労働者の所有に屬してゐたのであるが、例へば莫大小製造業の編み枠に於けるが如く、資本家が其所有の道具を労働者に貸與するに至れば、資本家の労働者支配は更に一步を進めたものといふ事が出来る。それが更に今一步を進めて、比較的多數労働者が資本家所有の建物に於て分業組織の下に、同じく資本家所有の機械道具を用ゐて生産を行ふに至つたものが近世工場工業である。労働者は茲に至つて單に經濟上のみならず、技術上にも完全に資本家の支配に服することになつたのである。而して此の工場制の出現は機械の發明が之を促した。就中學ぐべきものは、ハアズライヴス、アアクライト、クロムプトンの紡績機械發明(一七六四―七五年)カアトライトの力織機發明(一七八六年)

ジエム・スワットの蒸汽機械發明(一七九〇年)である。而して新機械は先づ木棉工業に採用せられ、従つて木棉工業の行はるゝランカシャーは産業革命の本舞臺となつた。

工場工業は後述の如く、自ら工場労働者(プロレタリア)を造り出すの作用を爲すものである。併し工場工業が確立せられんが爲めには、先づ工場に雇傭せらるべき自由無資産労働者の群が存在しなくてはならぬ。之を供給したものは農村であつた。土地を失つた農民が都市に流入して工場に雇傭を求めたのである。農民を追ふて都市に走らしためたものは、圍繞(enclosure)と稱せらるゝ大地主の土地兼併である。圍繞は前には一度びチュウドル王朝時代羊毛の價格騰貴に促されて、耕地を變じて牧場たらしめんが爲めに行はれた。トオマス・モアが「ユウトピア」中に柔和小食なるを常とする英國の羊が狂暴貪食となつて人間其者を食ふに至つた云々と言つたのは之を指すものである。而して圍繞は二度び十八世後半以後、都市の資本が地主階級に流入し、一方農産物増収の必要痛切となるに促されて、新式の大農經營を實行せんが爲めに盛に行はれた。一七六〇年から一八五〇年迄の間に開圃及び共有地は殆ど其跡を留めなくなつたといはれて居る。此變革が英吉利農産物の收穫を激増せしめた利益は否認すべからざるものであつた。

が、小自作農の存立が爲めに危うくせられたことも亦た甚しいものであつた。小地主滅亡の大勢は、オックスフォードシャーの廿四寺區に於て、百エカア以下の所有地は一六〇〇年より一七八〇年迄の間に三分二減少し、グロスタシャーの十寺區に於ては五分四減少し、他の諸地に於ても略ほ之に準じたといふに徴して之を想像することが出来る(Ashley, Economic Organisation, 194)。労働力賣却の外生活の途なき浮浪無資産の労働者は斯くして造り出されたのである。

産業革命の結果としては、先づ之に依つて生じた生産力増進の惠澤を擧げなければならぬ。併し労働者は工場制度出現の爲め甚しい苦境に陥らざるを得なかつた。此影響は姑らく二つに分けて觀察することが出来る。第一は機械製品の手工業又は家内工業の方法に依て造られた製造品に對する競争である。此場合に手工業又は家内工業者が苦境に陥るべきことは言を俟たぬ。此競争に敗れたものは、多く無産労働者として工場に雇傭を求めざるを得ないのである。工場制の家内工業壓倒は紡績業に於ては比較的速かに行はれ、織物業に於ては稍々時を要した。即ち織物業者は苦しむことが長かつたのである。然らば工場労働者其者の

境涯は何うであるかといふに、工場及び機械の備付には資本を要する。普通労働者が被傭者の境遇を脱して雇主の地位に上る途は爲めに漸く遮断せられて、茲に生涯の賃銀労働者たるものゝ階級が成立した。工場主が労働者を雇傭するの營利の爲めである。而して「出来る限りを得得し、

出来る限りを貯蓄すること、即ち結局富裕となること」は常に當時の宗教の寛容する所たるのみならず、寧ろその進んで獎勵する所であつた。工場主の努力は第一に労働力を能ふ限り低廉に購入せんとする事に向はざるを得ぬ。同時に機械は(殊に織維工業に於て)生産作業の或者を甚だ簡單平易のものにしたから、女子及び小兒が或は男子に代り、或は男子と相並んで工場に雇傭せらるゝこととなり、労働者は家庭生活を楽しむことが出来なくなつた。高價なる機械に固定せられた資本を速に償却する爲めには、之を間断なく運轉することを要する。そこで女子小兒労働者の虐使が起る。一八四〇年代に於ける政府の調査報告に由れば、鑛山に於ける小兒の労働開始年齢は八九歳を普通とするも、猶ほ既に四歳にして就業せるものがあり、工場にあつては普通労働開始年齢は七八歳なるも、既に三四歳にして就業するものがあつた。而して殆ど到處に於て小兒は成人と同一時間の労働に服し、而してそれは往々にして十六又は十

八時間に及ぶことがあつたといふ。鑛坑内に於て殆ど裸體の男女労働者が相接し相混じて労働してゐた事實も亦た同じ報告書の記載する所である。

三

然らば労働者は如何にして此の新境遇に處したかといふに、彼等が先づ求めたものは産業革命以前の狀態の恢復であつた。此努力は一方ではエリザベス徒弟法の勵行要求となり、一方では工場機械破壊の暴行となつた。

エリザベス徒弟法(一五六三年)は手工業者に關する地方的制規を全國的に統一せんが爲め制定せられたもので徒弟年期を定め、職人に對する徒弟の數を制限すると同時に、労働時間を夏季は十二時間冬季は日出より日没迄と規定し、賃銀率は治安判事をして毎年の豊凶に應じて適宜之を決定せしむべきことを規定したのであるが、制定後久しからずして死文に歸してゐた。労働者はそれを復活せしめて其處に保護を求めようとしたのである。併し其努力は無効に終り、却つて此法は十九世紀の初頭(一八一三、四年)に公然廢止せられた。エリザベスの治世は光榮ある時代ではあつたが、健全なる商業原理の認められた時代ではなかつた」と廢止法案起草者の一人が云つたのは、此頃の自由契約思想を窺はしめるものである。

労働者が機械を敵視したのは異しむに足らぬ。彼等の努力は機械採用の妨害に向つた。而してそれが成功せぬと、彼等の憤恨は爆發して、工場の襲撃機械の破壊となつた。此種の暴行は既に十八世紀中から行はれてゐたが、十九世紀に入つて、殊に一八一一年乃至一五年の間毛織物業の中心地たる西ヨオクシャア、ノツチンガム、レスタア、ダアビシヤアに於て最も猖獗を極めたので、政府は遂に先づ十四年の追放を以て、更に次で死刑を以て暴行者を脅すに至つた。

労働者の過去の状態を恢復せんとする努力は何れも失敗に終つた。そこで彼等は前進して新たな方法を以て其運命を開拓しようとした。それが参政權獲得の努力(チャアチズム)と労働組合運動となつたのである。

第二章 リカルドオとロバア

ト・オエン

産業革命が労働者を苦境に陥らしめたことは、前述の通りである。未だ工場法の制定なく、労働組合なく、協同組合なき十九世紀初頭に於ては、労働者は資本家の壓迫に當

るべき何等の防衛手段を持つてゐなかつたのである。而して宛も當時新に確立せられた正統派經濟學は、此状態を自然の状態として是認するか、少くも已むを得ざる所として之を傍觀してゐたのである。アダム・スミスは労働者に同情ある人ではあつたが、而かも彼れは各人の労働がその神聖不可侵なる家産であつて、其行使は之を各人の自由に委せねばならぬことを力説した。即ち雇主と労働者との自由闘争に第三者は干渉すべからざるものとしたのである。人が其手の「力と熟練とを何等他人を害することなく、其の適宜と信ずる方法に於て行使することを防ぐるは、此の最も神聖なる所有權の明白なる蹂躪である。それは労働者並に偶々之を備はんと欲する者の正當なる自由に對する明白なる侵害だ」といふのである。マルサスは民衆の貧困は人間の増殖力と土地の食物産出力との失比例から起る必然の結果であるから、殆ど人力を以ては奈何ともすべからざるものだといふ。リカルドオは此のマルサスの説を奉じて、貧困救済の無効有害なることを説いた。曰く「貧民の安樂幸福は其増殖を調節し、彼等の間に於ける不謹慎なる早婚を少くする爲めの彼等自身の側に於ける若干の顧慮と政府の側に於ける或努力なくしては、永久に之を確保することは出来ぬ。救貧法制度の作用は正に之と相反する。救貧法

は抑制を無用ならしめ、慎重にして勤勉なるもの、賃銀の一部を提供することに依つて不謹慎を促した」と。

要するに正統派經濟學者は自由競争から生ずる結果を善きものとして歓迎せぬまでも、已むこと能はざるものとしてそれを甘受したのである。社會主義的社會改造案に對する正統派經濟學者全體の態度は、遺憾なくリカルドオのロバアト・オエンの貧困者救済策に對する批評に現れて居る。彼れは其一友に告げて言つた。「……予はオエン氏が開陳せる一切主要原理と所見を異にするものである。」「オエン其人は其得意の考案の爲め敢て大犠牲を拂ふことを辭せぬ仁慈なる熱情家である。彼れの大力支持者たるケント公爵も其仁志は賞讃に値する。然し彼れは救貧施設を支配すべき一切諸原理をば全く知らざるものゝ如くである——彼れはマルサスの學説を聞知して居り、其基礎となつて居る理由、若しくは如何にして彼れの困難が軽減せられ得べきかを知ることなしと、之に對して反感を抱いて居る。彼れ及び……オエン氏は生産と密集人口の幸福との爲めには、土地の外に必要なものなしと思惟するものゝ如くである。吾人は土地を有する。土地は之を更に生産的ならしむることを得るから、人口は過剰に陥ることがないといふのである。——苟も道理を辨へる人がオエン氏と共に、氏の提案するが如

き一社會の繁榮すべきこと、人々が私利の念に依つて動かされずに社會に對する念慮に依つて動かさるゝものとするれば、同數の人の前に生産したよりも更に多くを生産すべきことをば、果して信ずることが出来ようか。」

二

茲にリカルドオに批評せられたロバアト・オエン(一七七二—一八五八)は、其性格閱歷、其の同時人及び後世に對する影響の點に於て、十九世紀英吉利社會主義者中第一に傳ふべき人物であらう。一言にして言へば、彼れは實業家の慧眼と敏腕と豫言者の情熱とを一身に兼ねた人であつた。實業家としては目覚ましい成功者で、巨萬の富と模範工場主たる名聲とを贏ち得たが、斯くして得た富と名聲とを、彼れは其後半生(凡そ一八一七年以後)の社會主義的社會政策的運動、實驗、施設の爲めに悉く蕩盡して顧みなかつたのである。

人の性格を其環境の産物と解することは、一般に社會主義思想家の一特色をなすものであるが、オエンはネリヤム・ゴドキンと共に此説を信ずることの最も厚い人であつた。(殊に A New View of Society. 1812—3 を看よ)良好の境遇は善良の人を造り、不良の境遇は不良の人を造る。オエンは身を商家の徒弟に起して、年二十の時労働者五百

人を備ふ綿糸紡績工場の経営者となり、更に三十才にして蘇格蘭ニユウ・ラナルクの大紡績工場主となつた時、彼れは其所信を實際に試み、小兒教育の改善、小兒労働の制限、労働時間の短縮、賃銀の引上、清潔なる住宅、低廉なる食料の供給、酒店の閉鎖、勤勉者の奨励等に依つて其の雇傭労働者の状態を一新することに成功したので、ニユウ・ラナルクは労働者問題に志ある人の各地から視察に集まる巡禮地となつた。オエンは又自家の経験に基づいて労働時間の法的制限の必要を説いたが、一八一九年の工場法は僅に彼の主張の或部分を採用したに止まつた。

これ迄の處オエンは模範工場主たり、労働者保護立法の主張者たるに止まつてゐたが、一八一六年襲來の恐慌に處して、失業者救済の方法を考案するに及んで、彼れは漸く資本主義的經濟組織を排して、共同組合的組織を以て之に代へるの必要を認めるに至つた。オエンに従へば、恐慌は多數労働者の購買力が生産力の増進と歩調を共にすることが出来ぬ處から生ずる。之に處するには、失業者を雇傭して、現在失業者の競争の爲めに低落して居る労働の價値を昂騰せしめなければならぬ。其方法は千乃至千五百エカアの土地に五百乃至千五百人の人を以て一共同村落を組織し、先づ組合員自身の必要を満たす爲めの農工業生産を營

ませ、餘剰が生じたならば、之を投下資本の利拂及び償還に充てしめると云ふのであつた (Report for the Parliamentary Committee on Poor Laws, 1817)。此提案は最初は失業者救済の方法として提議せられたものであつたが、オエンはやがて進んで此原則に従つて全社會を改造せんと主張するに至つた。同時にオエンは労働貨幣の採用を提議した。其原則は一商品の生産者は其商品に投入せられた丈の労働量證明券の交付を受け、此紙券を以て、同量の労働を含有する他の諸商品を購入し得るやうにするのである。

三

オエンは單に新考案の提議だけに満足しないで、之を實現しようとして試みた。一八二四年北米インデヤナ州に於ける Rappist (獨逸渡來の一農民宗教團體) の村落ハアモニイを三萬磅を以て買収し、之を自家考案に基づき改造してニユウ・ハアモニイと命名し、オエンは約九百人の同志と共に此處に植民したが、此實驗は三年にして全然失敗に終り、オエンは私財を喪つて本國に歸つた。同様の實驗は其後メキシコにも、本國の Orbiston 及び Queenwood にも試みられたが、何れも同じく失敗に終つたのである。労働貨幣の考案も亦たオエンは實際に試みて失敗した。

一八三二年九月彼れは倫敦に労働交換銀行を設立した。其仕組を言ふと、生産者が其生産物を銀行に納入すると、係員が其の含有労働量を標準として之を評價して、それに相當する労働證明券を交付し、此證明券を以て該生産者は銀行附屬の商品貯藏所から任意の他の商品を購入し得るのである。然るに間もなく困難が起つた。生産者が銀行に提供する貨物は消費者が銀行に就いて購入せんと欲する貨物でないといふ困難である。銀行には殊に原料が缺乏した。それを吸収する方法として、特に原料だけは之に對して労働券ならぬ普通貨幣を交付するといふやうな窮策を講じたが、一八三四年五月に至つて銀行は閉鎖同様の状態に陥つた。銀行を失敗に終らしめた根本的困難は含有労働量を標準とする價格は需要供給の關係に依つて定まる價格とは一致せぬといふ點に存するのである。

オエンは其各種實驗の失敗を原則上の困難に歸せずして、一に資金の不足と世人の反對とに歸したから力を傾けて其の共同組織の福音宣傳に従つた自一八二六年至一八三七年の間に彼れが公開演説を行ふことは一千回、告辭を公にすることは五百回、新聞論説を草することは三百回に上つたといはれて居る (Reybaud)。併し此の努力は酬ひられないで、前に世の尊敬を一身に鍾めたオエンは、漸く非

難攻撃の的にせられた。これは彼れの宗教攻撃が教會の憎悪を買ひ、又彼れの主張と工場主の利害との相容れぬことが明になつて、此階級の敵視を招くに至つたのである。

四

前記の如く、リカルドオの所論は労働者に不利なるものであつた。併し彼れの價値論は人爲的に數量を増加し得る商品の價値は其生産に費される労働量が之を決すると教へ、利潤論は利潤が賃銀の高下と反對に高下すると説き、又其地代論は地代が不勞所得なることを説明したから、彼の説は取つて社會主義的理論の根據に利用せられた。價値が労働に由つて決せらるゝものならば、賃銀以外の所得即ち利潤及び地代は、労働者に依つて産出せられた價値の横領即ち「労働搾取」の結果に外ならぬとの結論に導いたのである。ロバート・オエン自身も其の労働貨幣の提案はリカルドオの影響を受けてしたものであつた。

リカルドオを根據とすると認むべき労働搾取説は、幾多の論客に依つて唱へられた。キリヤム・トムソン (一七八三—一八三三) は曰く「労働なくして富はない。……労働は富の唯一の母である。……生産用具の無爲なる所有者は、是に由つて常に實際生産者の最も勤勉、最も熟練なるものと等しき享樂を恣にするのならず、其蓄積の大小如何に由つて

(之を贏得する方法の如何は問はず)労働に由て造り出された富の中から、眞の労働者が極度の労働に依つて獲得し得るもの、十倍百倍否な一千倍を保有する」と。又曰く「原料建物機械賃銀は其自體の價值に何物をも附け加へることが出来ぬ。追加價值は労働からのみ生ずる」と。(Principles of the Distribution of Wealth most conducive to Human Happiness, 1824) 而してトムソンが同量の労働が機械若しくは他の資本利用の結果として産出する追加價值に對して餘剩價值 (surplus value) の語を用ゐたことは、アントン・メンガーをして速了してマルクスの餘剩價值論はトムソンの説の借用に外ならぬと斷せしめた。

猶ほ此外に擧げべきものに、トオマス・ホジスキム (Labour defended against the claims of Capital, etc. 1825) シモン・グナン (Lecture on Human Happiness, 1825) フランシス・ハナム (Labours' Wrongs and Labour's Remedy' 1838-9) シモン・マンタ・モオガン (Revolt of the Bees, 1826) トオマス・ロウ・ヒドキン (Practical, Moral and Political Economy most conducive to Individual Happiness and National Power, 1828) 等があつて、其の説く所は區々に

出で、居るが、本來労働者に依て生産せられ、従つて當然擧げて労働者に歸屬すべき富、若しくは價值の一部分が利潤利子又は地代として労働者以外の者に收得せらるゝことを不當とし此廉を以て現社會制度を攻撃する限りに於ては、彼等の所論は皆な略同軌に出で、居るのである。

第三章 チヤアチズムと労働組合運動

社會主義者の労働搾取説は、労働者の最も喜び傾聴する所となつた。始め其憤恨を機械、工場の破壊に依つて晴らさうとした労働者は、今漸く罪は社會制度其者に存することを感ずるに至つた。然るに現存社會制度は現在の政治的權力に依つて維持せられて居る。社會的秩序の改廢は政治的權力の獲得を第一歩としなければならぬ。労働者階級の運動はやがて普通選挙の實現に向けられた。これがチヤアチスト運動 (Chartist movement) である。これより先き選挙權擴張要求の輿論は、終に保守黨の反對を歴して、

一八三二年の選挙法改正を實現せしめた。然るに此成功は専ら下層中流階級と労働者階級の協力運動の力に負ふものであつたにも拘らず、新に選挙權を獲得したものは、價格十磅以上の家屋所有者のみに限られて、労働者は之に與かることを得なかつた。而かも新議會は救貧法に大改正を加へて、院外救助を廢し、殆ど被救助民を遇するに罪囚を以てするの苛酷なる新原則を採用し、又内相ジョン・ラッセル卿は、再度の選挙權擴張を行ふ意思なきことを言明し、議會は之に賛成の意を表した。固よりこれのみが原因ではないが、右の事件はチヤアチスト運動の刺戟にはなつたのである。

ロバート・オエンを始め、既記社會主義思想家の多くは、何れも政治運動を排斥し、又何れも階級協和に傾いてゐたにも拘らず、此思想に養はれた労働者及び其指導者等は、大に政治運動に力を、注ぎ又著しく階級闘争的態度を示すに至つたのである。「無智と無組織と不幸とに基づく厭ふべき現在から、開化せる、魅力あり組織ある幸福なる將來への轉過は、決して人類の或部分に對する暴力又は悪意と怨恨とに依つて實現せられ得るものではない」といふのが、前後一貫する、オエンの思想であつた、彼れは後述の如く、一時労働組合運動に参加して、總同盟罷工を主張したけれ

ミも、此時も彼れは階級的憎惡心を鼓吹することを許さず、其爲め終に有力なる組合幹部と袂を別つに至つたと言はれて居る。チヤアチスト運動の首領等に對するオエンの影響は、否認すべからざるものがあつたけれども、而かも實行運動上の手段に關しては、彼等は **オエンから離れた**のである。

チヤアチスト又はチヤアチズムの名稱が一八三八年に起草せられた「**人民憲章**」(Peoples' Charter) に起るなり、及び此憲章が (イ) 普通選挙 (ロ) 無記名投票 (ハ) 選挙區の公平分配 (ニ) 議會の毎年改選 (ホ) 議員たるに要する財産資格の撤廢 (ヘ) 議員歳費の支給、なる六個條から成つたことは、既に人の知る通りである。チヤアチスト運動の行はれた期間に就いては、多少異説があるやうだが、假に右の人民憲章が起草せられた時を起點とし、最後の大請願が失敗に歸した時を終點とすれば、此運動は一八三八年から同四九年まで行はれた大民衆運動だといふことが出来る。

チヤアチスト運動の經過は、此に詳述する邊はない。議會への請願書提出は、一八三九年と一八四二年と一八四八年とに三度行はれて、何れも否決に逢つた。始めは、主に倫敦の労働者間に地盤を有するキリヤム・ロゼットの、言論に依つて輿論を動かさんとする説が傾聴せられたが、後には

北部地方に人気あるフィアアガス・オオコンノルが率ゐた**暴力派**に壓倒せられて、チャアチストは即ち暴動騒擾を事とするものゝ如く解せらるゝに至つた。事實上暴動はバアミンガム、ニューボオト(南エエルス)に起り、又ラシカシャア地方には大同盟罷工が行はれて世間を脅したのである。エンゲルスの著「英吉利労働階級の狀態」の終りにある「革命は必ず来るに相違ない。問題の平和的解決法を講ずるには時が既に晚い」との文句は、此運動の印象の下に書かれたものである。

二

人民憲章に要求せらるゝ所は、單に議院法の改正に過ぎぬ。併し此の「六個條」は、チャアチストの終局の目的ではなくて、これが社會上經濟上の革新に對する手段として要求せられたに外ならぬことは、自他の共に認める所であつた。チャアチストの一首領が演説して「……此の普通選挙の問題は、ナイフとフォークとの問題である……畢竟麵包と干酪との問題である。若し人が普通選挙は何を意味するかを問ふならば、我輩は答へるであらう。國中に於ける労働者各人が、其背上に良衣を着け、自己と妻子とを快適なる家屋に住居せしめ、豊富なる食糧に向ひ、其健康を維持せんが爲め必要なる程度を超えては労働せず、而して其労働

に對しては、其生活を裕ならしめ、一切人生の快樂にして合理的人物の要求するが如きものを供するに足るが如き賃銀を受くるの權利あることが是れである。」といつたのは時々の引用する所である。たゞ普通選挙權獲得の後、右の狀態を實現するには如何にすべきやといふ點に至つては、チャアチストは統一的な綱領を有してゐなかつた。たゞその**反ブルジョワジイ階級運動たるの一事**は、夙く人の着目する所であつた。既に一八三九年の Annual Register は「此運動は實際中流階級(即ちブルジョワジイ)に對する叛亂である。チャアチストが政治的制度的激變を要求するのはより多くの權力和特權とを得んが爲めではなくて、……未だ會て存せざる、賃銀労働と資本との全くない社會狀態を造り出さんが爲めである」と記して居るのである。

要するにチャアチスト運動は、純社會主義運動たるべくして未だ其の爲めの或物を缺いたものであつた。此の或物は、即ち明確なる社會主義思想である。史眼あるゾムバルトが「近世社會運動を一の動物に喩えれば、プロレタリア大衆の階級的發現(Proletarianism)は其胴體、政治的革命的**努力(Jakobinismus)**は運其動機官(手足)、社會主義は其頭腦に相當するものであるといひ、チャアチズムは胴體と運動機官とを具へて、未だ頭腦を缺くものだといつたのは、

適切の批評である。曰く「英吉利のチャアチズムに於ては、プロレタリア的胴體と運動機官との結合は完成したが、猶ほ頭を缺くと云ふことが出来る。それ故に此怪物は盲目の Hodur (北方神話に現る、盲目の猛神)の如く闇中を摸索して、棒を揮つて雲霧の中を撃ち廻はり、而かも一個處を旋廻して、光明に達する途を見出さぬ」(Der proletarische Sozialismus, II, 316)

チャアチスト運動の最高頂に達したのは、一八四二年の事であつた。一八四八年の第三回請願書は、五百七十萬人の署名を有すると誇稱せられてゐたが、實は百九十七萬餘に過ぎず、而かも其の多くは同一手跡を以て署せられ、更に幾多の姓名は全然假作のものなることが暴露せられたので、此時以來チャアチズムは恐怖よりも寧ろ哄笑を以て迎へらるゝに至つたといはれて居る。やがてオオコンノルも狂死した。

チャアチズム衰滅の原因 としては組織の不統一、綱領の缺乏等を挙げ得るが、その最も重要なものは、十九世紀中葉以來の**經濟的繁榮**に之を求めなければならぬ。概して一八一五年乃至五〇年は不景氣の年が多かつたのに對して、一八五〇年以後二三十年は、英吉利商工業が未曾有の發展を遂げた時代であつた。試みに二三の數字

を摘記すれば、一八四二年には、聯合王國を通じて一八五七哩に過ぎなかつた鐵道線路が、一八八三年には、一八六六八哩に達し、一八四三年には全開港場に於ける出入船舶の九三五、〇〇〇噸であつたものが、一八八三年には六千五百萬噸に上り、一八四三年の輸出入價額一億三百萬磅が、一八八三年には約七億三千二百萬磅に上つたのである。而して一方海外の競争者は未だ現はれなかつたから、英吉利は全世界の工場として、其製造品の販路は生産力の増進と共に擴張せられ、従つて販路社絶労働者の失業といふ事は、比較的稀れにしか起らぬやうになつた。労働者階級は資本家と共に此繁榮の惠澤に與かり浴した。此事實は、暫く労働者をして其の資本主義及び資本家階級に對する反感を忘れるに至らしめたのである。

同時に労働者が漸く資本主義に慣熟し、又労働運動上の經驗を積んで、暴動的騒擾の奏功し難きを認めたことも、チャアチズムの衰滅を來たさしめた一原因である。コオルの曰はく、「一八三二年の労働者等は、そのピクトリヤ時代の後繼者よりも遙に印象を受け易い心を持つて居た。彼れは貧窮なることより甚しく、教育を受くることより少なく、日々の工場服役を人間自然の運命として甘受することにより、少くなく慣れてゐた。工場制度はより新しく、之に對

する叛逆は、其以後に於けるよりも、本能的であつた。新なる資本主義の爲め容赦なく押し潰された労働者は、絶望の餘り、救済を約束するの觀あるものには、如何なる新福音にも喜んで心を傾けたのである。メシヤアと狂信家と並に政治上産業上の救済家等は、容易く弟子を見出した。人々は今日よりも單純なる心を持つてゐたのである」と(Cole, Robert Owen, 1925, 220)。これは一八三〇年代の大規模な労働組合運動の失敗を叙するに就いて言はれたことであるが、又移してチャアチズムの興亡にも及ぼすことが出来る。

三

チャアチズム衰亡の後に代つたものは、平和着實なる熟練職工の労働組合運動で、其模範を示したものは、一八五一年一月一日を以て創立せられた機械職工合同組合(Amalgamated Society of Engineers)であつた。これより先き、一七九九年及び一八〇〇年に制定せられた**結禁止法**は、一八二四年に廢止せられ、翌年の法律に依つて之に制限は加へられたが、團結の自由其者は之を維持す

盟罷工を避け、團體協約の方法に依て労働條件の改善を求めることに主力を注ぎ、此努力は前述の經濟的好況の下に於て、他面一八四四年に端を發する消費組合の發達と相俟つて、其効を奏した。労働者殊に熟練職工の生活状態は、大に改善せられたのである。労働者の境遇は資本主義制度の下に於て猶ほ大に改善せらるゝ事實が示された。労働者階級と資本家階級とは利害相容れぬといふ意識は、勢ひ稀薄とならざるを得ない。同時に労働者は現前の利害に着目して、架空的なる**社會改造論に耳を傾けなくなつた。**

四

労働者が飽食暖衣、目前の實利害と安慰とのみを追求して、社會革新の熱情を忘れたかの觀ある此の状態は、革命家の目には必ずや痛嘆已み難き所として映じたに相違ない。老チャアチスト、トマス・クウパアの慨嘆は、よく此時代の英吉利労働者の状態を窺はしめるものである。彼れは一八六九―七〇年に牧師として英蘭北部を旅行して、此地方の労働者の物質的狀態が一八四〇―四五年に於けるよりも良好なると同時に、其「精神的状態は退化したことを見て苦痛

ることが出来た。次で一八三〇年代には、遠大の理想を以て極めて大規模なる労働組合が起り、又倒れた。その最も大なるものは、一八三四年に組織せられ、「煙突掃除人から洗濯婦まで、ベルファストの指物師からピアスシヤアの農夫に至るまで」有ゆる職業の労働者を包容せんとしたGrand National Consolidated Trades Unionであつた。Robert Owenが一時労働組合指導者となつたのも、此頃の事である。彼れは全王國の労働組合と協同組合とを結合統一し、各組合をして當該産業の管理に當らしめ、商業的競争を排除して、究局共產協同の社會を以て國家及び資本家に代らしめようとするのであつた。而して其手段となるものは、總同盟罷工であつた。然るに不用意なる數回の同盟罷工が失敗に歸すると、忽ち脱盟者が相踵いで、やがて解散を餘儀なくせられ、或者はチャアチスト運動に走つたけれども、これも失敗に終つたことは、前記の通りである。そこで労働組合運動に一轉機が來たのである。

労働者は政治運動に望を絶つた。彼等は労働組合の基金を豊富にして、疾病死亡失職等の災厄に備へ、又成るべく同

を感じた」ことを謂ひ、更に續けて斯う記して居る。「我が昔のチャアチスト時代には、成程ランカシヤアの労働者は、幾千人となく、糧糶を身に纏ふてゐた。彼等の多くは食物を缺いてゐた。然し彼等の智力は到處に發揮せられてゐた。彼等は仲間を作つて政治的正義の大理論を討論し、或は熱心に社會主義教理に關して議論を戦はすを常とした。今日君は、ランカシヤアに於て斯る労働者集團を見ないで、良衣を着けた労働者が、消費組合のこと、及び彼等の此組合又は建築組合の持株の事を語るのを聞くだらう。又君は或者が阿呆の様にグレイハウンドの小犬に着物を着せて伴ひ行くのを見るだらう。彼等は競馬に行かうとして居るのである。さうして行けば賭けをする。労働者は思考することを廢めた。さうして頭腦を悩ます話は、聴くことを欲しないのである。少くも彼等の大半はさうである。其生涯の大半を擧げて彼等の教化と向上とに努め、彼等の爲めに苦しみ、禁獄の苦をも忍んだ者に取つては、上記の事は、言葉に現はせぬ苦痛であつた。」(Beer, History of Socialism vol. II, 223)社會主義運動は一時全く其跡を絶つたのである。

併し此時代の社會的平和が經濟的好況に由て説明されるものとすれば、好況時代の終息は、また社會思想運動の上にも影響しなければならぬ。工業國としての英吉利の地位は、漸く獨米二國の競争の爲め脅され始めた。エンゲルスは曰く「英吉利の工業獨占が持續してゐる間は、英吉利労働者階級は或程度まで此の獨占の利益に参加した。此等の利益は、甚だ不均等に彼等の間に分配せられた。特權ある少數者は最大部分を懐にしたが、併し大衆と雖も、少くも時々一時的に其或部分を得たのである。而してそれが何故にオエニズムの消滅後英吉利に社會主義がなかつたかの理由である。獨占の崩壊と共に、英吉利労働者階級は此の特權的地位を失ふであらう。彼等は一般に——特權ある指導的少數者も其選に漏れず——何時か己れが外國労働者と同じ水準まで引下げられるのを見るであらう。而して是れが、其時何故に再び英吉利に社會主義があるべきかの理由である」(Neue Zeit, III. Jahrg. 245)。

これが一八八〇年代の英吉利に於ける 社會主義の復活を説明する。

附記。チャアチスト首領中、終始社會主義的主張を一貫して渝らなかつたのは、チャアチスト教師とせられたブロンタア・オブライエンである。彼れはオエン、オジルギイ、グレエ、ホジスキンの影響を受けることが多かつた。彼れはその究局志す所がオエンの考案に係るものと本質的に異ならぬことを明言して居る。又彼れは新社會は之を前途に求むべきもので、社會の改造とは決して産業革命以前の舊制度を復活せしむることではないといふ道理を充分理解してゐたので、オオコンノルの保守黨應援の政策に反対した爲め、終に之と相反目するに至つた。オオコンノルに至つては、土地社會主義から自作農主義に退却して、一八四七年には「自作農制度は社會最好の基礎である」と明言するに至つて居る。憲章の主なる起草者キリヤム・ロゼットは産業革命を既定の事實として承認し、労働者の智能上道徳上の再生を有ゆる進歩の第一着歩と認めて之に力を注がうとしたが、此人の意見が漸くオオコンノルの爲め壓倒せられたことは本文記載の通りである。

近世社會思想大略

第八講

小泉 信三

第一篇 英吉利社會思想

第四章 社會主義の復活

一八八〇年代に於ける社會主義の復活に就いては、特にマルクスとヘンリー・ジョージとの影響を挙げなければならぬ。

併し此の兩者の影響に先だつて、既にベンサム學徒や正統派亞流經濟學者等の自由放任主義、原子的社會觀には、漸く不満が感ぜられて居つた。一社會は幾多個々單位の合計以上の或物なること、——其構成要素の何れかの存在とは區別せらるべき別の存在を有することが發見(又は再發見)せられたのである。「共同社會は必然意識的又は無意識的にその共同社會としての存續に志さなければならぬ。……社會的有機體は、其自身個々人の結合から發展したものであるが、個人は今自ら其一部分を成せる社會的有機體に依

つて創造せられ、個人の生命はより大なる生命より生れ、個人の屬性は社會的壓力に依て形成せられ、個人の活動は他のものと交錯合體して、全體の活動に屬するものとなつて居る。社會的有機體の存續と健康となくしては、今日何人も生存し繁榮することは出来ぬ。故にこれが永存は彼れの最高の目的である」(Fabian Essays in Socialism, p. 56)。これが、モウリス、キングスレー等の基督教社會主義者、營利主義を憎むカアライル、ラスキン、最も己れを善くし得ることの意味に於ける眞の自由は、單に拘束を受けざることに存せずして、却つてより大なる制限に依つて進めらるゝことを教へた、トオマス・ヒル・グリーン等の影響の下に、**新に起りつ、あつた社會觀**である。

此の變遷は、當年思想界の最大人物たる**ジョン・スチュアート・ミル**の思想の發展に投影した。一八四八年に出た經濟原論では、ミルは社會主義の困難を力説し、此に對する論調は大體否定的であつたが、版を重ねるに従ひ其説は漸く改められて「一層進歩せる意見」が表白されるやうになつた。此の「進歩」は個人主義から社會主義への進歩であつた。自叙傳中の告白によれば、彼れは當初私有財産と相續とを以て「立法の最終語」となし、此制度から生ずる不公正は、長子相續制の廢止と教育の普及に俟つ任意的

人口制限の外に匡正の途なしと信じてゐたのである。然るに後年のミルが社會改善の理想は、遂に「デモクラシー以上に進み」彼れ自身己れの「社會主義者なる概稱の下に編入」せらるゝの至當なることを承認するに至つた。彼れは曰く、「一方吾々は、大多數の社會主義體系が包蔵すと認められてゐる、個人に對する社會の壓制を極力排斥しながら、吾々は猶且つ、社會の最早怠惰者と勤勉者とに分岐せず、働かざる者は食ふべからずとの規則が、貧民のみならず、公平に凡ての者に適用せられ、労働生産物の分配が、今日大に然るが如く、出生の偶然に依つて決せられずして、承認せられたる正義の原則に基づく合意に依て行はれ、又人類が己れ獨り専らにせずして、その屬する社會と共に分つべき利益の獲得の爲め奮勵努力することが、最早不可能ならず、若しくは不可能と思惟せられざる時の到來すべきを待望した。將來の社會問題は、個人行動の最大自由と、土地原産物の共同所有と、結合労働の利益に對する一切人の均等参加とを如何にして合一するかに在ると吾々は認めたと。」(自叙傳第七章)

二

英吉利の公衆に對するマルクシズムの宣傳は、ヘンリー・ハインドマンに依つて始めて行はれた。先づ「資本論」の佛譯を讀み、次で其著者を訪問して深く此に傾倒したハインドマンは、一八八一年「民主聯盟」を創立し、四年之を「社會民主聯盟」(Social Democratic Federation)と改稱して、マルクス主義を標榜したのである。「資本家階級は其地位を防護し、攻撃を撃退する爲め、國家權力を保有利用するが故に、階級闘争は必ず政治的性質を帯び、労働者の政治機關獲得の爲めの運動とならざるを得ぬ。」「労働階級の解放は、生産分配及び交換の社會化と、その組織せられたる社會に依て、全人民の爲めに管理せらるゝことに依てのみ遂げらるべし。」「プロレタリアは自由を得べき最終の階級なるが故に、其解放は人種國籍教體性の別なく、人類全體の解放を意味すべし」此解放の事業は、國民的國際的に組織せられて特別なる一政黨を成し、意識的に其理想實現の爲め努力する労働者階級自身のみ能く之に當るべし」云々は、何れもマルクスに於いたものと解すべきであらう。

ハインドマン等の運動は一時盛況を呈して、詩人工藝家のキリヤム・モリス「同盟罷工」の三王ジョン・パアンス、トム・マン、ベン・チレット等も之に加盟したが、間もなくモ

リス等は分れて「社會主義同盟」Socialist Leagueを起し(一八八五年)、次いでパアンス等も脱盟して黨勢不振に陥つた。不振の根本原因は、畢竟英國人のマルクシズム不理解不同意にある。此の社會民主連盟は、其後再三名稱を改めて今日に及んで居るが、(社會民主黨、武烈顯社會黨、國民社會黨、共產黨)此時以後常に社會主義労働者運動の本流と疎隔して一度も其中心を形成した事がない。而して實際運動上に於ける此聯盟の位置は、又英吉利社會思想上に於けるマルクシズムの勢力を示すものである。

三

ヘンリー・ジョージは、一八七九年、北米桑港及び附近一帯の急激な開發發展に促された、地價の暴騰及び投機熱の昂進を目撃して「進歩と貧困」を著した。彼れの土地國有論(土地單稅論)は、リカルドオの地代論を根據にして居る。或土地の地代は、其土地の收穫量と、同一量の資本労働を投じて現耕最劣等地から收め得べき收穫量との差額に由て決せられる。従つて資本及び労働は、之を如何に肥沃なる土地に投じても、その最劣等地に投下せられた場合の收益以上に報酬を受けることは出来ぬ。差額は悉く地主に收得せられてしまふ。これが「進歩と貧困」との相伴ふ所以である。これに處するには、私人の地代收得を廢止しな

ければならぬ。其方法は、所謂土地單稅に依つて、地代を悉く國家に徵收することにある。斯くすれば、名義上土地所有權は存続しても、實質的には從來地主階級に獨占せられてゐた利益が社會全體のものとなるといふのであつた。此説は理論上別段卓抜なものではない。併しヘンリー・ジョージの、大膽にして確信に充ちた論調には、人を動かし、社會改造の可能を信ぜしめる力があつた。一八八二年、彼れが主張宣傳の爲めに渡來した時、英吉利に於ける「進歩と貧困」の賣高は十萬部に達してゐたといふ事である。而して彼れが地代の收得に加へた論斷は、更に人に利子利潤の收得の當否に對する疑を起さしめた。當時の社會主義者の五分の四はヘンリー・ジョージを通過したものだといふものがある(M. Beer)。

四

社會民主聯盟と相對峙する形になつた社會主義團體は、フエヒヤン協會(Fabian Society 一八八三—四年創立)である。前者がマルクシズムを奉ずるに對して、後者は主としてヘンリー・ジョージに出發點を求めた。前者が政治運動に従事するに對して、後者は寧ろ研究團體、啓蒙運動の團體であつた。前者が革命主義を高唱するに對して、(佛蘭西大革命の百周年、即ち一八八九年に社會主義革

命の起るべきことが期待せられた。後者は明に改良主義を標榜したのである。シドニー・エツプ夫妻と劇作家ジョージ・バーナード・ショオとが其主腦であつた。

フエビアン協會は「土地及び工業資本を個人又は階級の支配より解放し、之を一般利益の爲め社會の有に移すことによつて社會を改造せんことを期す」るものである。而して其論據は、ヘンリー・ジョージに於けると同じく、リカルドオの地代論に求められた。ショオの曰く、

「社會主義の成就が經濟上に意味する所は、現在それを此得する階級から人民全體への地代の移轉である。土地の肥瘠がエカア毎に異なり、一時間内に店窓の前を通過する人の數が町に由て變り、隨つて二人の農夫又は二人の商人の、智能と勤勉との程度正しく相同じきものが、一年の勞働に依て收める收益相等しからざる限りは、一方の富裕なる農夫又は商人から、其同業者の利得を超過する餘剰の、天恵又は位置の便に由て得たるものを取つて、此餘剰又は地代を兩者間に分配するものが公平であらう。……社會主義の經濟上の目的は、勿論一對の農夫及、商人を均等ならしめることではなくて、一切の地代を徵收し、之を國庫に投ずることに依つて、此の原則を共同社會全體に亘つて遂行することにある」と (Fabian

Essays. p. 180)。

然るに、茲に地代に就いて言はれた事は、他の生産要素にも適用がある(資本レント、能力レント)。而して是等、有ゆる形に於ける經濟的レントは、個人を富ますべきものでなくして社會全體を富ますべきもの「だといふのである。併し社會主義は、歴史上の或瞬間に、一舉にして實現せらるゝものでない。社會主義社會と資本主義社會との境界は、截然一線を以て劃すべきものではなくて、部分的濟し崩

的改良の集積が漸次資本主義的色彩を稀薄にして、社會主義的色彩を濃厚ならしめるといふに外ならぬものだとエツプ等は解して居る。即ち彼等の立場から見れば、市營事業、國有事業の創設擴張は固より、工場法の制定改正、勞働組合消費組合の發達、資産家に對する累進課税、皆何れも社會主義に近づく一階梯一手段たるものである。彼等の運動方法は、全然平和的合法的である。「フエビアン協會は、センセエショナルな歴史的危機の到來を待つ社會主義者には、他の何れかの團體に加入せんことを乞ふ」ものである。資本主義から社會主義への轉化は購買力の新配分に應ずる爲めの生産の新調節を必要とする。これは一日にして行ひ得べき事ではない。再びショオの曰く、

「汝は何人にも、一日にして政府を顛覆するこの不可能を納得せしむることは出来ぬ。併し、一等車と三等車とを變じて二等車たらしめ、賤民窟と宮殿とを變じて快適なる住宅たらしめ、寶石商と裁縫師とを變じて麵包屋と建築工たらしむることが、單にマルセイエズの高唱に

依つて行はれるものでないことは、既に何人も疑はざる所である」と (Ibid p. 183)

彼等は「妥協が政治的進歩の「必要條件」なることを公言し、斯くして「悲壯なる失敗」(heroic defeat)の代りに「散文的なる成功」(prosaic success)を收めんことを期するものである。

一八八四年に始めて發刊せられたフエビアン冊子は、一九二三年に第百號を出し、發賣部數は一八九〇乃至一九二二年の間に二百七十萬餘に上つて居る。而して此等冊子の初期のものは、大部分其中に提議せられた改革案が既に實行せられたといふ「立派な理由」の爲めに全く時世遅れになつたとは、協會一役員の記事所である。

五

一八九三年ブラッドフォードに創立された**獨立労働黨**(Independent Labour Party) は、フエビアン協會と異つて主に労働者を黨員とした。併し此團體もマルクシズムは奉じなかつた。その革命主義階級闘争主義を排する點に於ては、二者の方針は略ほ一致してゐたのである。獨立労働黨の首領**ケア・ハアチ**は曰く、

「労働者階級は階級ではなくて、國民其者である。……吾々は階級的自覺ある社會主義者を要せぬ。吾々は自覺ある社會主義者を要する。……社會主義は一階級に向つて宣戦せず、一制度に向つて宣戦する。此闘争を有効に促進せんが爲めには、吾人は階級の別なく、一切の自覺あ

る社會主義者の加入を要する。予は更に階級闘争並に階級意識の存在は、社會主義運動の爲め不利なることを確信するものである。云々。」

獨立労働黨は謂はゞフエビアン協會と労働組合との間に架せられる橋梁となつて、労働組合を政治上自由黨から分離せしめることを其使命とし、これが爲めに例へば黨員は労働組合に加入するの義務ありとの原則を定めたりなどした。十九世紀末年々の労働組合大會に於て、社會主義に傾く**新労働組合主義**(New unionism) が漸く舊組合主義を壓倒するに至つたのは、獨立労働黨の運動に負ふ所が尠くない。

一八八九九年倫敦波止場入夫の同盟罷工が成功したことは、無熟練労働者の間に於ける労働組合運動の大刺激となつた。そこで従來高給熟練職工の専有物であつた労働組合界に、薄給の無熟練労働者なる新分子が輸入せられた。社會主義の宣傳と、此の新分子の輸入と、前記經濟的不振とが相俟つて、労働組合運動に第二の轉機が到來した。従來個人主義的自助自頼を主義としてゐた労働組合大會が、土地國有の決議案を可決し(一八八七、八八年)、八時間労働の法定を要求し(一八九〇年)、更に一般的に生産用具の社會化に賛成するに至つた(一八九四年)事實は、新組合主義の勢力を窺はしめるものである。而して舊組合主義の排撃に最も努力したものは、前記波止場罷工を指導した**ジョン・バ**

小泉 信三

第二篇 英吉利社會思想

第五章 勞働黨 (上)

十九世紀の末葉、年々の勞働組合大會に於て、新勞働組合主義の勢力が漸く舊組合主義を壓倒するやうになつたことは、前述の通りである。此の兩傾向の對抗は、大體に於て資本主義容認に對する資本主義否認、自助自頼主義に對する國家干渉要求主義の對抗であつた。而して後の傾向が優勢となるに従つて勞働組合が、其の政治超然主義を捨て、勞働階級獨立代表の必要を認めるに至つたのは、當然である。尤も勞働者が議會に其代表者を選出したのは、新しい事ではない。一八七四年の總選舉に二人の炭坑夫が當選した時以來、議會には常に數名乃至十數名の勞働者議員が選出されてゐたのである。併し是等の勞働者議員は、何れも自由黨に屬するか、少くも自由黨と行動を共にするもので、決して議會に勞働者階級の利害のみを代表する獨立

の政黨又は議員團を形づくつた譯ではない。勞働者階級の獨立代表といふことを標榜して始めて議會に選出せられたものは、ケヤア・ハアヂイで、これが一八九二年の事であつた。而してケヤア・ハアヂイ主宰の下に此の翌年獨立勞働黨の創立せられたことは、前述の通りである。併し獨立勞働黨の選舉成績は甚だ振はなかつたので、終に勞働社會と諸社會主義團體とが協力して選舉運動に従ふことが必要になつた。斯くして組織せられたのが勞働代表委員會 (L. R. C.) で、これが今の勞働黨の前身である。

一九〇〇年勞働代表委員會が組織せられた時、これに参加したものは、獨立勞働黨、フェビヤン協會、社會民主聯盟の三社會主義團體と、六十七の勞働組合とであつたが、マルクシズムを奉ずる社會民主聯盟は、L. R. C. が階級闘争を標榜せぬことを不満として、間もなく脱退し、(一九〇二年)、それ以來常に勞働黨に好感を抱いてゐないのである。

一九〇〇年の總選舉に勞働代表委員會公認候補者の當選したものは、僅か二名に過ぎなかつたが、一九〇六年の總選舉には、それが一躍廿九名に上り、更に坑夫代表議員十二人が來り加はるに及んで、茲に四十一名より成る一勢力が出來た。これと同時に L. R. C. は名稱を勞働黨 (La-

bour Party) と改めたのである。

勞働黨が此成功を博し得たには、理由がある。勞働組合が所謂 **タッフ・エエル判決** に依つて勞働組合運動に加へられた大障礙を、政治的活動に依つて撤去する必要を痛感したことがそれである。此判決はタッフ・エエル鐵道會社の鐵道従業員聯合組合に對する訴訟に下された(一九〇一年)もので、これによつて同盟罷工の際に於ける「見張り」は不法行為とせられ、又勞働組合は其役員が不法行為に對して損害賠償の責あることになつたのである。此判決の結果によつて諸勞働組合が支拂を命ぜられた賠償金は、一九〇五年迄に合計約廿五萬磅に上つたといふ事である。これは勞働組合運動は殆ど不可能になる。そこで勞働組合員は此判決を覆へす新法律の制定の爲め總選舉に力を用ひ、其結果が前記の成功となつたのである。タッフ・エエル判決は、一九〇六年の勞働争議法 (Trade Disputes Act) に依つて覆へされた。

勞働代表委員會から脱退した社會民主聯盟は、爾來常に勞働黨を嫉視し、例へば、一九〇七年スツットガルトに開かれた國際社會黨大會席上でも、聯盟の代表者クエルチは、勞働黨を攻撃して斯う言つて居る。「吾人は英吉利に於て、社會主義を奉ずるか否かを勞働黨に問ふたが、彼等は全く

それに答へない。……勞働黨は全く何等の綱領を持つてゐない。兎に角吾々はそれを知らぬ。勞働黨は僅に一の基礎を有する。彌縫手段の爲めの努力がそれである。それは立派な勞働黨ではある。併し社會黨ではない。」

誠にその通りであつた。勞働黨は出來ても、それは猶ほ久しく社會主義的プログラムを持たなかつたのである。勞働黨が社會主義團體と勞働組合との提携に成ること、數量的勢力上、後者に比して前者は殆ど言ふに足らぬものなること、而して勞働組合界に於て、新組合主義は漸く優勢を占めつゝあつたとは言へ、重厚なる英吉利勞働者が其の傳來の自由主義自助自頼主義を決して一朝にして放擲するものではないことを思へば、これは決して異しむに足らぬ事なのである。社會主義團體と勞働組合との數量的勢力は、一九〇六年總選舉の直後凡そ次の如きものであつた。(勞働黨首領 **トクドナルド** が Sozialistische Monatshefte, 1907, S. 830 に報告したものに據る)

勞働組合	獨立	フェビヤン	社會民主	社會主義
(1,300,000)	(80,000)	(1,100)	(47,000)	(100,000)
				其他
				(100,000)

勞働黨の出現と略ほ同時に組織せられた自由黨政府は、社會政策的立法を其使命として、其の爲めに力の大半を

割いた。労働争議法（一九〇六年）労働者賠償法（一九〇七年）養老年金法（一九〇八年）炭坑八時間法（同上）賃銀裁定局法（一九〇九年）国民保険（健康保険及び失業保険）法（一九一一年）炭坑法（一九一二年）議院法（一九一二年）労働組合法（一九一三年）。ロイド・ジョージを商務院總裁、後に大蔵大臣とするアスクイス内閣は、是丈けの立法事業を行つたのである。其間に處して、未だ社會主義的綱領を持たぬ労働黨は、勢ひたゞ自由黨政府の與黨としてその施設を支持する外に仕事がなかつたのである。茲にサンチカリストやマルクシストから批評を加へられる理由があつた。

四

労働黨が始めて社會主義的綱領を掲げたのは、一九一八年に至つての事であつた。而して労働黨を促して此に至らしめた事情としては、後に述べる佛米二國から輸入せられた革命的労働組合運動、及び露西亞革命の影響と、世界大戰の經驗とを擧げなければならぬ。外國革命運動の影響は後段に論ずるから、茲には世界大戰の影響丈けに就て一言する。

戰爭は、一方に於ては、資本主義的經濟秩序の弱點を暴露し、他方に於ては、労働者に戰爭遂行上に於ける己れの實力を自覺せしめた。戰爭は平時の需要供給體系を根本的に變へた。斯くして一九一八年に労働黨の改造が行はれた。

五

労働黨の改造は、其組織と綱領と兩方の上に行はれた。組織の上では、從來黨が労働組合と社會主義團體との結合より成るものとされてゐたのを改めて、個人の加入を許すことにしたのである。これは同時に行はるべき選挙權の大擴張をも考慮して行はれたことであつた、一九一八年の人民代表法（Representation of the People Act）に依つて事實上の男女普通選挙（但し女子に限り年齢資格を卅一歳とするといふ丈けの差別が置かれた）が實現せられ、選挙人の數が一舉に八百萬人（中女子六百萬人）を加へることになつた。労働黨組織の改造は、新たに投票權を獲得して、而かも労働組合又は社會主義團體の會員たらざるものゝ爲めに入黨の途を開く爲めに行はれたのである。

綱領の上では、労働黨は其目的が生産用具の公有による、搾取の廢止に在ることを公言した。曰く黨の目的は、……「生産用具の共有と各産業又は勤務の、及ぶ限り最良なる

に覆へした。産業労働に従事したものの、大なる部分が出征しなければならぬ。一國生産力の大半を擧げて、軍需品の製造に充てなければならぬ。比較的戰爭に不必要な公私の消費に制限を加へなければならぬ。是等の事は、國民各自の營利活動に委して置いては、到底満足に之を行ふことが出来ぬ。そこで交戦國政府は、何れも皆な食料切符其他、様々の形に於ける消費制限を行ひ、又幾多産業の經營權又は監理權を國家の手に移して所謂戰時社會主義を實行したのである。此の戰時社會主義を目して、資本主義から社會主義に進む爲めの一階段となすものは、當時から社會主義に近づくか否かと題する小冊子を著し、其中で此間に對して斷然否と答へたのは、當時にあつては、珍しい意見のやうに思はれた。それ程資本主義經濟の弱點は、世人に痛感せられたのである。此の當時の經驗は、たしかに英吉利労働黨を動かして、社會主義に傾かしめたといふことが好からう。

又労働者階級の協力なくしては戰爭の遂行が不可能なることは明白だったので、一方國防法軍需品法等に依つて幾多の重要な労働者の權利が停止せられるといふやうな事はあつたが、他面労働黨の政治的地位が重きを加へた事實もたしかに争はれぬ。一九一五年六月以來戰時聯立内閣は

民衆的經營監理を基礎として、手及び頭腦による生産者に、其労働の全収益と、その及ぶ限り公平なる分配とを保障すること、「一般に民衆、殊に直接手又は頭腦による己れの活動に依つて生活資料を求むる者の政治上、社會上、並に經濟上の解放を促進すること」に存すると。而して労働黨が近き將來に實行を期する施設は、「労働と新社會秩序」(Labour and the New Social Order, 1918)と題する小冊子の中に詳述せられて居る。此に由ると、綱領は、(一)國民の最低限度 (national minimum) の普遍的強制、(二)産業の民主的監理、(三)國家財政の根本的改造、(四)餘剰の富の公共的利用を四大支柱として居る。「國民的最低限度」とは、シド・ニー・エップ等に依つて鑄造せられた新術語で、最低賃銀、最長労働時間、其他の強制的規定を意味するものである。即ち最低賃銀法の制定に依つて賃銀の國民的最低限度を、工場法其他に依つて餘裕時間 (leisure) の國民的最低限度を、衛生法規に依つて健康の國民的最低限度を、教育施設に依つて教育の國民的最低限度を保障するといふのである。第二項の下では、鐵道、海運、運河、發電所の國有のみならず、進んでは石炭及び牛乳配給の公營をも主張し、第三項の下では、所得税に急峻な累進率を適用して、富豪に賦課する最高税率を七五、乃至八〇%に上らしむべきこと、又國民をして軍事公債利拂の負擔を免れしめんが

爲め、資本徴課を行ふべきことを主張し、而して第二第三の方法に依つて得た収入を、國家は宜しく老弱者の扶養、教育制度の改善、學藝の奨励に充つべしと主張して居るのである。

六

右の新綱領の起草者は、フェビヤン協會の主腦にして、今は入つて労働黨の主腦となつたシドニー・エツプであつた。エツプは其の「労働組合史」の新版（一九二〇年）に労働黨の發展、殊に其新綱領を自賛して斯う言つて居る。「終始本質的に社會主義的であつて、社會改造の理想と共に、當面實行し得べき改革細目をも含める斯る綱領の起草、並に此綱領の歡迎採用……は、英吉利労働黨を他の諸國のそれに先んぜしむる、注目すべき一事業であつた。且つ包括的なる社會的綱領と、開戦の理由として揚言せられた諸原則に基づく『講和條件』との言明は、労働黨を變じて、單に肉體労働者の階級的利害のみを代表する一集團から、國政の衝に當り、一定原則に基づいて内治外交を行ふの準備ある、完全に組織せられた一國民的政黨たらしめた。自由黨の思想的破産、及びその自國社會内に於ける富の再分配に關し、又大英帝國内外に於ける他民族に對する我邦の態度に關し、共に何等の積極的政策を立つる能力なきことの明白なる事實と相俟つて、労働黨綱領の出現は、輿論の上に此黨が、現在の聯立政府倒壞の時機が到來した曉には、その必然の交代者として立つたことを意味したもので

近世社會思想大略

第十講

小泉 信三

第二篇 英吉利社會思想

第六章 労働黨（下）

(一)

労働黨内閣出現に至るまでの労働者政治運動の經過は、大略上述の通りである。ところが労働黨の運動方針、更に一般的に、労働者の議會運動に對しては、早くから急進分子の反對運動が行はれた。佛蘭西のサンチカリズム、及び合衆國のIWWから影響を受けた革命的労働組合運動がその一、露西亞革命に刺戟された共產主義宣傳がその二である。

革命的労働組合運動が輸入されたのは、一九一〇年前後の事であつた。時宛も労働黨は、一九〇六年の成功の後の弛緩状態に陥つて居つて、此年行はれた二度の總選挙にも格別の勢力増加を示さず、其政綱は、自由黨政府の社會的立法を支持する外には何もないやうな有様で、労働者の間には、労働黨から再び労働組合運動へ還らうとする

ある（P. 698）。

エツプの言は、無根據の自慢ではなかつた。労働組合の左傾と黨則の改正と相俟つて、労働黨の勢力は、其頃から激増した。即ち一九一四年に一、六一一、一四七であつた黨員数が一九一八年には三、〇三三、一二九、更に一九二〇年には四、三三九、八〇七に上つたのである。（此増加は主として労働組合黨員の増加によるもので、其数は一九二〇年には、四、三二七、五三七に達して居る。之に反し社會主義團體黨員に至つては、ボルシェビズム賛否の分裂に由るものか、一九一八年の五二、七二〇が一九二二年には三二、七六〇に減少して居る。）而して此勢力の増加は又選挙の成績に現れて居る。即ち一九一八年休戦直後の總選挙には、當選者を出すこと僅に五十七で、甚だ期待に副はざるものであつたが、一九二二年には、それが一四二に上り、更に一九二三年には、一九一一年に達して、政府黨の議席は過半数に達しなくなつたので、時の統一黨内閣は辭職し、マクドナルドを首相とする労働黨内閣が之に代つた。實に一九二四年一月の事である。今一九〇〇年以來、總選挙に現れた労働黨の發達を表示する、と左の如し（A. Shadwell, Socialist Movement Pt. II, 132）

年	得票	當選者
一九〇〇	一、〇〇〇	一
一九〇一	一、〇〇〇	一
一九〇二	一、〇〇〇	一
一九〇三	一、〇〇〇	一
一九〇四	一、〇〇〇	一
一九〇五	一、〇〇〇	一
一九〇六	一、〇〇〇	一
一九〇七	一、〇〇〇	一
一九〇八	一、〇〇〇	一
一九〇九	一、〇〇〇	一
一九一〇	一、〇〇〇	一
一九一一年	一、〇〇〇	一
一九一二年	一、〇〇〇	一
一九一三年	一、〇〇〇	一
一九一四年	一、〇〇〇	一
一九一五年	一、〇〇〇	一
一九一六年	一、〇〇〇	一
一九一七年	一、〇〇〇	一
一九一八年	一、〇〇〇	一
一九一九	一、〇〇〇	一
一九二〇	一、〇〇〇	一
一九二一年	一、〇〇〇	一
一九二二年	一、〇〇〇	一
一九二三年	一、〇〇〇	一
一九二四年	一、〇〇〇	一

反動が起りかけて居つたから、サンチカリズム及びIWW主義の宣傳は何れも甚だ有效であつた。米國に起つたIWW (Industrial Workers of the World) 運動を輸入したのは、社會民主聯盟から分離獨立した（一九〇三年）蘇格蘭の社會主義労働黨、サンチカリズムを輸入したのは、トム・マン（前出）であつた。此の二つの運動に共通なる特色は、妥協なき階級闘争を第一要義とし、労働者の議會運動を排して、労働組合の直接行動を高唱する一事に在る。而して其影響は現れて、一九一〇—一一年以後の「労働不安」となつた。同盟罷工が著しく頻繁且つ大規模に行はれるやうになつたのである。

併し此の労働組合運動の復活は、たゞ舊く行はれたものが其儘復活したのではなくて、其處に労働者の新しい要求が現れて來た。労働者は、單に賃銀、労働時間等、労働條件の改善を求め許りでなく、更に進んで、労働組合に依つて、生産支配権を獲得しようとしたのである。其の最も極端なるものは、生産用具を國有にする代りに、炭坑を坑夫聯合會、鐵道を鐵道従業員組合に所有せしむべしと要求するサンチカリズムである。「産業監理」(control of industry) 又は「賃銀制度廢止」は、此の新運動と共に行はれた新標語であつた。在來の社會主義とサンチカリズムとの折衷とも見るべきギルド社會主義は、此の労働不

安を背景として唱へ出されたのである。

(二)

ギルド社会主義者は、近代社会の根本的弊害を「貧困」に求めずして、「隷屬」(slavery)に求めて居る。在來社会主義者——彼等が念頭に置いたのは、重にフェビヤニズムであるが——が主張するやうに、産業の國有(又は市有)といふことが行はれても、隷屬は依然として残る。傭主が資本家から國家又は自治體に代つたといふだけで、労働者が依然賃銀奴隷たることには變りがないからである。そこで彼等は、一産業の従事者全員を以て組織せる労働組合、即ちギルドを、産業監理の衝に當らしめようとする。此迄の、ギルド社会主義はサンチカリズムと一致する。たゞサンチカリズムは國家を不用となすに反し、ギルド社会主義者は、或は生産者の専制に對して消費者を保護する爲め(コオル等)、或は法律、衛生、軍備、警察、外交、教育等の要務を掌る爲めに(ホフソン)國家とギルドとの併立の必要を認めて居るのである。コオルは曰ふ、

「最廣義に於ける産業(industry)は、生産の問題たる

と同時に消費(使用)の問題である。生産物は之を造らなければならぬ。同時に何人がその消費権を有すべきかを決せねばならぬ。一方、生産物の性質と其使用との決定は、主に使用者に取つての問題たる事が明かであると

同時に、他方、如何なる條件に於て生産を行ふべきかは、生産者に取つても直接肝要の關係ある問題で、生産者は此等條件に關する支配権を、他人に委する譯には行かぬ。然るに古き集産主義者は、一切の問題を民衆化せられた國家又は自治體に決せしめようとし、新しきサンチカリストは、一切の問題を労働者の組合に決せしめようとする。今日の社会主義者に取つての問題は、此二者を調和せしめることに在る。二者其一を缺けば、高き理想の輪廓は造られぬ……集産主義とサンチカリズムとは、相反する勢力でなくて、相互不可缺なる、相補ふ思想たるであらう」(Cole, Self Government in Industry, 108)。

そこでコオル等は、産業の所有は之を國家に移し、其經營は之をギルドに任せ、而して國家は、ギルドから租税又は賃料を徴收し、又生産物價格は、ギルド大會(生産者議會)と議會(消費者議會)とを平等に代表する聯合委員會が之を決して、一方の偏輕偏重を防ぐといふ考案に到達したのである。

隷屬の廢止を高唱するギルド社会主義者は、製作衝動の自由發揮に最も重きを置くものであり、此點に於てキリヤム・モリスに深厚なる敬意を表するものである。モリスは現代製作物の醜惡を憎み、此の醜惡を、工人の製作の悦び

が資本主義の爲めに枯らされたことに歸し、此理由から社会主義者となつた人である。ギルド社会主義は、一面に於て**キリヤム・モリスの復活**である。而してモリスを奉ずること最も厚く、一九〇六年既に「ギルド制度の回復」を著したベンチイに於ては、モリスと同様の中世回顧の傾向が最も多く現れて居る。

(三)

ギルド社会主義の宣傳が實際労働者運動に或影響を與へたことは、争はれぬ。例へば、炭坑夫聯合會、鐵道従業員全國同盟、郵便局員聯合會が、何れも當該産業の國有と其經營上の自治とを併せ要求することを決議したのは、それを示すものである。否な、労働黨の政綱にも、ギルド社会主義の影響は現れて居る。産業の能ふ限り最良なる「民衆的經營並に管理の基礎の上に云々」がそれである。就中囑望せられたのは、建築ギルドの發達で、一九二二年の始めには、幾多のギルドが集まつて「全國建築ギルド」を組織し、その幾多の自治體と締結した建築請負契約は金額四百萬磅に達したが、一九二二―二三年の恐慌に堪え得ずして解散を餘儀なくされた。

略ぼ是れと同時に失敗に歸したのが、「三角同盟」の大罷業計劃であつた。坑夫、鐵道従業員及び交通労働者の三角同盟は、これも同じく、前記「労働不安」の産物で、

一九一三年に發議せられて、一九一五年に成立したものである。ところが戦後政府は、炭坑國有を可とする所謂**サンキイ報告書**(Sankey Report)の主義を採用せず、炭坑主は、炭價の下落と共に漸く攻勢に轉じて、賃銀引下又は解雇を以て坑夫を脅すやうになつたので、三角同盟は終に之に反抗し、一九二二年四月十五日を期して大同盟罷工を行ふ筈であつたが、首領者が最後の瞬間に意を翻したので、事なくして済んだ。是に引き續いて、全國的に賃銀の引下げ、工場閉鎖が行はれ、幾多の同盟罷工は失敗に終り、其結果は労働組合加入人員の激減に現れた。而してこれが又一面、労働黨の得票増加を説明するのである。一八三〇年代の労働組合運動の失敗は、人を驅つてチャアチズムに赴かした、タツフ・ゼエル判決は、労働者をして一九〇六年の總選舉に熱心ならしめたが、ギルド實驗の蹉跌、同盟罷工の失敗は、労働者に再び政治運動に頼るの念を強からしめたのである。

(四)

次に**露西亞革命の影響**に就いていへば、英吉利労働者も歡呼して露西亞革命を迎へた。一九一七年六月、露西亞三月革命祝賀の爲めリイズに會合した社会主義者等は、熱狂して、民衆に英國各地にも勞農會を組織せんことを求めたほどであつた。此形勢は大に労働黨に組織の改正、新

綱領の決定を促した。併し露西亞十一月（ボルシエキ）革命の影響を蒙ることが最も甚しかったものは、マルクス主義者の一團であった。社会民主聯盟は一度社会民主黨と改稱し、更に獨立労働黨の不平分子と合同して武烈顯社會黨（British Socialist Party）となつたが（一九一一年）、戰爭中ハインドマンが率ゐる愛國派と國際主義者とに分裂し、前者は國民社會黨（National Socialist Party）を起し（一九一六年）、後者は更に左傾してボルシエキズム標榜に到達した。時に曩にI.W.W.運動を輸入宣傳した社会主義労働黨は、十一月革命以來ボルシエキズム宣傳の一策源地となつてゐた。そこで、主として此の兩團體の合同によつて英國共產黨が組織せられたのである（一九二〇年八月）。その第三（共產主義）インタナショナルに加盟したことは言ふ迄もない。

労働黨も英國政府の勞農露西亞に對する武力干渉には斷乎として反對したが、併し共產主義（ボルシエキズム）贊否の問題に對しては、黨の大會は常に明確に「否」を決議して居る。フェビヤン協會の態度は特に記す迄もない。獨立労働黨は、第二インタナショナルからは脱退したが、（一九二〇年）第三インタナショナル加盟の提議は、一九二〇、二一年之を否決し（之が爲め脱黨者等を出す）、又一九一九年末、覺書を發表して、プロレタリアの革命的獨裁及びソキエト制度に反對したのである。

共產黨は再三労働黨に加入しようとして、拒絕されて居る。此の兩者現在の關係は、一九二四年の労働黨大會に於ける、左の興味ある票決に示されし居る。（A. Shadwell, Socialist Movement Pt. II p. 134）。

- (1) 共產黨の参加を許すの可否、
- 否 三、一八五、〇〇〇
 - 可 一九三、〇〇〇
- 否決多数 二、九九二、〇〇〇
- (2) 共產主義者を労働黨候補として公認するの可否、
- 否 二、四五六、〇〇〇
 - 可 六五四、〇〇〇
- 否決多数 一、八〇二、〇〇〇
- (3) 共產主義者を労働黨員とするの可否、
- 否 一、八〇四、〇〇〇
 - 可 一、五四〇、〇〇〇
- 否決多数 二、六四、〇〇〇
- 此數字に於て看過し難いのは、第一問に就いては反對者が非常な多数を占めて居るのに、第三問に就いては賛否殆ど相半ばせんとして居ることである。或者は是を解して、労働組合員中既に多数の共產主義者、又は共產主義同情者があることを示すものだといつて居る（Hill）。恐らく其通りであらう。蘇格蘭クライド河沿岸の機械職工は曩に職

争中急進的なる工場委員運動（shop stewards' movement）を起したが、今日も共產主義者は機械職工の間に多いといはれて居る。

(五)

労働黨内閣は、九ヶ月にして倒れた。而して労働黨は下院に僅か三分の一の議席を有するに止まり、自由黨の後援に依つて漸く位置を保つたのであるから、在職中殆ど一つも其政綱を實現し得なかつたのは、當然の數である。然るに、一九二四年十月の總選舉の結果には、甚しい反動が現れた。左表の如く、労働黨の議席の減少四十に對して、在野黨たる保守黨は、得票二百萬、議席百五十餘を加へたのである。

一九二二	一九二三	一九二四
得票	得票	得票
議席	議席	議席
保守黨 五、三六〇	五、三六〇	七、三六六
労働黨 四、二二七	四、二二八	五、五五五
自由黨 四、一八五	四、一五二	二、九九五
其他 三、三六	八	二、一六

此の著しい反動を喚起したものは、勞農露西亞、及び共產主義者に對する政府の措置が曖昧の嫌を免れなかつたことである。政府は八月五日、下院に英露條約交渉の不成立を報告し、翌六日其成立調印を報告した。政府は労働黨左翼分子に壓迫されて、其態度を一變したといふ、嫌疑

を免れなかつた。次いで間もなく、叛亂煽動記事の爲め、一共產主義者キヤメル某を告發して、直ぐ取消した事件が起つた。而かも政府は、此事件に關する調査を拒絕したので、終に下院の票決に敗れたのである。そこへ所謂「ジノキエフ」の「極秘」書簡が總選舉の數日前に發表されて、愈々世人の疑惑を深からしめた。若し此書簡が眞物ならば、第三インタナショナルの首腦ジノキエフは、英吉利共產黨に一層革命的なる行動に出づべきこと、英露條約の批准に關し、更に政府に壓迫を加ふべきことを促したのである。労働黨は、總選舉で保守黨には敗れたが、其得票は、右表の通り、減少しないで、却つて増加した。即ち保守黨の得票は、結局自由黨から奪はれたものである。其爲め自由黨の議席は、三十九といふ、一九〇六年當時の労働黨にも及ばぬ少數に引下げられた。これで、保守自由二黨の對立に代る、保守労働二黨の對立は、畧ほ確定の事實となつた。これが英吉利労働者の議會運動が、一九〇〇年労働代表委員會が組織されて以來、四半世紀にして到達し得た位置である。

(六)

労働黨内閣其自身の治績に特に記すべきものがないことは、前に述べた。併し労働黨の成績は、これだけでは盡きてゐない。一九〇六年以來、自由保守兩黨は、或は労働黨の支持を受けんが爲め、或は労働黨と得票を争ふ必要

上、頻りに社會政策的立法に努力して居る。これは労働者政治運動が擧げ得た間接の成績と目すべきものである。

此期間に於ける社會政策的立法の重なるものを記せば、**労働時間**に就いては、炭坑夫の労働時間が一九〇八年の炭坑取締法(Coal Mines Regulation Act)に依りて八時間に制限せられ、一九一九年の炭坑法によつて、七時間に短縮された。賃銀に就いては、濠洲の経験に學んで、一九〇九年に賃銀裁定局法(Trade Boards Act)が制定せられた。これは労働使の殊に甚し、内職的工業に就いて、従業者**賃銀の最低額公定**を目的とし、始めは紙函製造、鎖製造、糖菓製造等數種の職業に適用せられたのであるが、一九一八年更に擴張せられて、製麻、製網、製網、煙草製造等三十餘種の工業、約三百萬人の労働者に適用されることになった。而して此外に炭坑夫百餘萬人に就いては一九二一年の炭坑協定があるから、今日約四百萬人の労働者は、公権によつて其最低賃銀を保障されてゐる譯である。失業に就いては、**強制的失業保険**の制度がある。これは一九一一年の國民保險法第二部に依つて創始せられ、始めは、建築及び機械製造に屬する七種の工業約二百五十萬人の従業者に適用せられたが、一九二〇年の法律に依つて、農業労働者及び僕婢を除く、千百五十萬人の労働者が其適用を受けることになった。雇主、労働者及び國庫は、毎週十片、九片、五片の保險料を徴集せられ(保險

基金の恢復を待つて、六片、六片、五片に引下げる筈)、之に對して失業者は、毎週男子十八志、女子十五志、妻五志、子女二志宛の支給を受けるのである。失業保險と同時に**健康保險**の制度も創始改正せられて、今千五百萬人の人に適用せられて居る。此外に一九〇九年の**養老年金法**(Old Age Pensions Act)は、七十歳以上の貧困者に國家年金を支給すべきことを定めたが、年金額は當初の毎週五志は七志を経て十志に引上げられた。一九二〇年の盲人法(Blind Persons Act)は、盲人に限つて年金支給の年齢を五十歳に引下げた。

無論労働黨の力のみには依る譯ではないが、兎に角今後労働黨の勢力が増大すれば、他の政黨は自存の必要上、それだけ益々社會政策に力を注がざるを得ぬことは明白である。上記一九〇六年以降の社會政策的立法を指導する上に最も功勞があつたのは、實際的なフェビヤン協會の諸提案(S. B. Webb, The Abolition of the Poor Law, The Public Organisation of the Labour Market, 1909, The Prevention of Destitution, 1911)を看ぶであつた。パナアド・シヨオは嘗て言つた。フェビヤン協會の期する所は「サア・ロバート・ビイルが自由貿易主義に改宗したやうに、社會主義に改宗した宰相の爲め、其の政治的綱領を提供すること」であると。此抱負は或程度迄事實となつたのである。(「英國社會思想」終り)

近世社會思想大略 第十一講

小泉 信三

第三篇 佛蘭西社會思想

第一章 佛蘭西革命

(一)

佛蘭西大革命は、封建的特權階級であつた貴族僧侶に對する、特權なき第二階級(tiers état)の革命であつた。此時の第三階級なるものは、商工業者、學者、官吏、農民、労働者等種々様々の分子を包含したもので、特權階級無特權階級の對抗は、決して今日の資本家對労働者の對抗ではない。眞の資本對労働の對抗は、諸種の特權及びギルド制度の如き、資本主義の發展に對する封建的拘束が佛蘭西革命によつて一掃せられた其後に始めて起り來つたものである。即ち一言にしていへば、佛蘭西革命はブルジョワ革命である。而して此のブルジョワ革命たる面目は、革命政府の終始易らざる所有權の尊重に現れて居る。一七八九年の人權宣言第一條は、「人は自由と權利の平等とを享有して生れ且つ其享有に終始す」との大原則を宣布したが、所謂

權利の平等は、單に家世門地の高下差別を撤廢することを意味するに止まり、人は決して所有の差別に手を觸れようとはして居らぬ。所有權は不易不可侵なる天賦の人權として尊重せられたのみならず、ジャコバン黨支配の二年間を除けば、一七九一年の憲法も、同九五年の憲法も、俱に一定額の納税を選舉權享有に必要な資格條件と定めた位であつた一七九一年に憲法制定議會が、個人的契約自由の原則に基づいて、労働者團結禁止の法律(ル・シャブリエ法)を制定したことも、亦た佛蘭西革命の特色を示す一事實である。

佛蘭西革命の大原則たる「平等」は、結局法律の前に於ける權利の平等に過ぎなかつた。併し法律上の平等と、實質的、經濟的平等の要求との間には、素より相通する所がある。權利平等の論據は、之を擴充すれば、所有平等の論據となり得るのである。而して實際或時期の革命政府は「平等」を形式上の平等に終らしめることに満足しないで、之を一層實質的なものたらしめようと努力したのである。一七九三年にジロンド黨を倒して支配權を掌握したジャコバン黨の恐怖政治は、此の努力の發現である。

(二)

佛蘭西革命の所謂「平等」に二個の見解が行はれ、之を單純なる法律上の平等と解することに甘んぜぬ一派の見解

が一時他を排して行はれようとしたことに就いては、シュタイン (Lorenz von Stein) の名著「一七八九年より現時に至る佛蘭西社會運動史」の記す所が最も凱切である。(Geschichte der Socialen Bewegung in Frankreich von 1789 bis auf unsere Tage. Neu hrsg. von G. Salomon, 1921 Bd. I. 277 ff.) シュタインによれば、平等の觀念には消極的、積極的の二つがある。消極的見解に従へば「凡ての人は法律上平等であつて、平等の積極的内容は、たゞ各人に、其個人性を最も自由に自己の力を以て造上げる。法律上の能力が與へられることにのみ存する。故に消極的平等は、個人性の不平等を、少くも可能とする。兎に角それは、此の不平等が個人の自由發展から生じた場合には、その全然正常なることを承認しなければならぬ。即ち彼の消極的平等觀は、決して現實の不平等と撞着せず、「之に對抗せずして、却て之に服従するものである。反之積極的平等は、「個人性は平等であつて、人間の不平等といふものは、皆外界の事情から、殊に所有と教育とから、生ずるものだといふ原理から出發する。故に現實の、兎に角否認すべからざる不平等は、消極的平等に於ける如く、自然的有機的なるものではなくて、致では純然たる不自然である。故に人間の本務は、此の不自然を驅逐することとに在る。而して此の不自然は、主に所有と教育とから生

じて、人生の有ゆる財に存在するものであるから、彼の平等は、必然的に所有權の廢止と、所有と勞働との上に於ける一切差別の絶滅に到達しなければならぬ。而してジロンドは第一の見解を主張し、山黨は之に甘んじなす。第二の見解に進まうとするものであつた。然るに王政の顛覆は、全歐羅巴を驅つて革命佛蘭西の敵たらしめた。革命の存亡は即ち佛蘭西の存亡となつた。山黨は此危機に處し極度の高壓手段を以てジロンドを絶滅して、一七九三年の憲法を制定したのである。

「斯うして平等の原理は實際に一見其の最高の點に到達した。國家は今其公民の間に最早何等の不平等を認めない。國家は又、主權意思たる民意以外に特殊の國家意思の存在することを認めない。一七九三年の憲法は、歐羅巴の歴史上に於て、最初の徹底的にして、最も純粹なる民主的憲法である。而かもこれ程に平等原理に重きを置いた革命的憲法が、猶且つ所有權の尊重を明規してゐるのは、實に注目し値する事ではないか。一七九三年の「權利宣言」は、其の第二條に、自然不易の權利として、平等自由安全と共に所有權を擧げ、憲法第十六條は所有權を規定して「各公民に屬する、任意其資産を享樂し且つ之を處分し得るの權利」にして居るのである。山黨政治家の思想の未熟は、充分茲に現れて居る。恐怖政治は、或意味に於ては、此矛盾——積極

的平等原理と所有權尊重との矛盾——の爲めに倒れたといつても差支ない。ロベスピエールの死後反動が起つて、巴里の富裕なる階級は、再び貧民階級を克服した。此の富裕階級の勝利の成典の形を取つたものが、即ち一七九五年の憲法である。

(三)

山黨政治家の言説中には、時々社會主義的意見が表明せられたが、併し結局彼等の思想は、半途彷徨の域を脱してゐなかつた。ジャコバン黨中、所有階級に對する憎惡心の最も強かつたものは、マラーであるが、此人物に就いて吾々の認め得る所は、たゞ富者に對する惡意と毀傷慾とのみであつて、社會主義思想ではない。シュタインは彼れを評していふ、「マラーの全生涯は——革命が彼れを知る限りに於ては——凡てのより善きものに對する、嫉妬の權化である。彼れをよく描くことに於ては、ラマルチンの次の言葉に如くものはない。曰く、平等は彼れの熱情であつた、卓越は彼れの苦痛なりしが故にと。マラーは、より貴きものより高きものを絶滅して、凡庸を支配者たらしめるといふ理由で革命を愛する、凡ての人々を代表して居つた。……マラーは嫉妬の鋭き本能に依つて、公民社會に於ける有ゆる差別の根源を、有ゆる純民主的平等化の眞實の敵を、誰よりも先きに發見した。彼れは資産の差別を、その目的とする自

由の眞實の敵なりと稱した、最初の人であつた。然し彼れの思想は、遂に大衆による有産階級の純破壞以上には達しなかつた。彼れは富者の迫害せられ、其家屋の破壊せられんことを希つた。彼れは、何人もその所有するものゝ力に依つて何物かになることを欲しなかつた。憲法制定議會時代にも、彼れの新聞紙「民友」は、上流社會に對する民衆憤怒の機關であつた。……平等觀念の發展と共に、彼れは更に歩を進めた。有ゆる卓越せる人々を民衆に告發したものは、彼れである。人々は權利の平等を以て停止してはならぬ。「權利の平等は享樂の平等に導き、而して此基礎の上に始めて此思想は安定し得る」との思想を始めて勞働者に教へたものは、彼れである。ジロンドの逮捕を第一に催促したのは、彼れであつた。彼れは個人を滅ぼす丈けでは満足しなかつた。彼れは問ふた。「無情なる自由の敵五百人の處刑は、果して罪なき人々幾百萬人に取つて非常なる幸福ではないか何うか」と。人は此の罪なき人々に屬せぬものを誰れをも裏切者と罵ることを彼れに學んだ。而して殺人と流血との思想を普及することに於ては、何人も遂に其「民友」に於けるマラーに及ばなかつたのである。斯くてマラーは、嫉妬其者の然るが如く、純否定的であり、それも亦た個人に對してのみ否定的であつた。彼れは己れを共產主義の高處まで、所有權の否定までは高めなかつた。況や眞の社會的

23
158
1966
178

理念まで高めることに於てをや」云。(a. a. O. 296) 實に其通りである。

(四)
佛蘭西革命期中に於ける眞の共產主義運動は、山黨政府が倒れ、此に對する反動として成立した執政官政府の下に行はれた。グラツカス・バボエフ(Grachus Babeuf)の平等主義陰謀がそれである。これより先き十八世紀の佛蘭西は、自然法思想から出發した幾多の社會主義著作者を出して居る。其の重なる者と其著作の標題とは、左の如くである。

Jean Meslier, Le Testament de Jean Meslier.
Morelly, Naufrage des isles flottantes, 1753.
Code de la Nature, 1755.

Mably, De la legislation ou Principes de la loi.
Brissot, Sur la propriété et le vol. 1780.
Boissel, Le catechisme bu genre humain, 1789.
バボエフは是等著作の影響を受けた。彼れは一七九五年の暮、眞の共產主義者、即ち所謂平等人と、共和主義者及び山黨の餘類を糾合して一團體を組織した。其の標榜する目的は、(一)九三年の憲法の恢復と(二)眞正の平等の實現とであつた。採用せられた綱領の重なる個條を窺へば、それに曰く、「第一條、自然は各個人に人生の一切財を享受すべき

平等の權利を與へた。第二條、社會の目的は、自然狀態の下に於て強者悪者の爲め屢々侵害せらるゝ此の平等を擁護し、且つ凡ての者の共同享樂を増加せしめんとすることに在る。第三條、自然は各人に課するに労働の義務を以てした。第四條、労働と享樂とは、當さに共同でなくてはならぬ。第五條、一方の者が労働の爲めに困廢し、且つ有ゆるものに缺乏して居るのに、他方の者が無爲にして潤澤の裡に耽溺する處には、必ず壓制がある。第六條、何人も罪惡なくして自ら土地又は産業の財を獨占することは出来ぬ。第七條、眞正の社會に於ては富者も貧者もあつてはならぬ。第十條、佛蘭西革命の目的は、不平等を絶滅して共同の幸福を建設することである。第十一條、革命は終了せぬ。如何となれば、富者は一切の財を吸収して、獨り支配權を専らにし、一方貧者は奴隸の如く勞役に、貧困の中に憔悴し、而して國家に於て何等の意義を有せぬからである。第十二條、一七九三年の憲法は、眞正なる佛蘭西人の法律である。……第十四條、一七九五年の憲法に發する一切の權力は不法にして反革命的なるものである。」
然し此綱領は、共和主義者に讓歩して起草せられたものであるから、バボエフ等「平等人」の立場は、寧ろ前に一度び起草せられて、撤回せられた、文飾稍々過ぎたる、次の綱領案によつて窺ふべきものであらう。曰く、平等は自然

の第二心願、人間の第一欲望、有ゆる合法的社會の第一の基礎である。……吾等は平等人として生れたる如く自今平等人として生き、又死なんことを欲する。……吾等が欲するものは、眞の平等か然らずんば死である。而して吾等は之を、眞の平等を、如何なる代價を拂つても獲得するであらう。吾等と平等との間に介在するものに禍あれ。斯く公言せられたる祈願に逆らうものに禍あれ。佛蘭西革命は、最終の革命たるべき、更に遙に偉大なる一革命の先驅者に過ぎぬ。吾等は單に『人權宣言』に記された平等を欲するに止まらぬ。吾等は吾等の中央に、吾等の家の屋内に、それを得んと欲する。吾等は是が爲めに全然身を犠牲にし、之を保持する爲めに、一切現存のものを絶滅し、否定せんと欲する。土地に對する個人所有權を廢せよ。土地は何人にも屬するものではない。吾等は土地産物の共同享受を要求する。果實は凡ての人に屬するものである。一百万人の個人が二千万人以上の同胞に屬する所のものを占有することとは、既に久しきに過ぎた。憤るべき貧者富者の別、治者被治者の別は、消滅せよ。平等人の共和國を、此の凡ての人に開かるゝ大客館を、建設すべき時は來た。汝等苦しめる者は來れ、而して自然が凡ての自然の子の爲めに整へたる食卓に就け。佛蘭西の民衆よ、汝の幸福の成就に眼を開け、吾等と共に平等人の共和國を認め、且つ宣布せよ」と。バボエフは執政々府を武力を以て覆へさうとして秘かに

數千人の同志を糾合し得たが、準備殆ど成らんとする時謀が漏れて、一人の同志と共に死刑に處せられた。

(五)

併し此事件は革命の經過全體の上から見れば、僅に一挿話たるに過ぎず、佛蘭西革命が未だ所有否認の性質を帯びてゐなかつたといふ判断を動かすに足るものではない。而して當時の佛蘭西工業の發達程度を考察すれば、此事は少しも異しむには足らぬ。當時の佛蘭西に於ては、僅にリヨンの絹物工業に於ける少數の例外を除けば(ゾムバルトの記す所によれば、一七八八—九一年、リヨンの絹物工業は、四一〇人の元締、四二〇二人の親方、一七九六人の職人の外に猶四萬人の男女労働者の従業するものがあつた)。近世の賃銀労働者階級は、未だ發生してゐなかつたのである。山黨政治家の手足となつたサンキユロットも、今日のプロレタリアルでは無い。彼等の中には、固より大都市の沈澱物たる無頼暴民も加はつてゐたが、多數はギルドに屬せぬ手工業者、職人、小商人、即ち何れも小ブルジョワに屬するものであつた。小ブルジョワは、小額ながらも、兎に角財産を其生活の根據とするものであるから、此階級からは、所有權否認の大運動は起り得ないのが當り前である。マルクスが共產黨宣言中に批評するやうに、未だ大工業の發達なき當時の佛蘭西に於ては、バボエフの運動は、當然失敗に終るべくして失敗に終つたのである。

小泉 信三

第三篇 佛蘭西社會思想

第二章 プロレタリアの發達と

社會主義諸體系（上）

パボエフの陰謀鎮定後、約三十年は社會主義的革命的運動なくして過ぎた。其間に奈翁が佛蘭西の帝位に墜り、没落し、（一八一五年）ブルボン家のルイ十八世が王位に即いたが、次いで立つたシャルル十世は、大革命以前の舊制度に復歸しようとして、七月革命の破裂を促した（一八三〇年）。然るに此革命は王制を廢止しないで、オルレアン公（ルイ・フィリップ）の迎立に依つて局を結んだ。此結末は民衆の豫期しなかつた所である。然らばルイ・フィリップを擁立したものは誰れであつたか。それは佛蘭西代議院の中心勢力たりし大資本家であつた。當時の選舉制度に於ては「選舉人は小資本家、被選舉者は大資本家であつた。……され

ば形式的權利なく、委任なくして、王制を復活せしめ、革命を終局せしめ、憲法を決定したものは、資本若しくは資本家であつた。（シュタイン）。

大革命に由て發生した營利自由の社會は發展して、此時既に資本主義社會となつてゐたのである。奈翁帝制の下に於て總數十五を超えなかつた蒸汽機關据付工場が一八三〇年には六百三十五に上つてゐたといふ事實は、佛蘭西に於ける大工業發達の速度をトセしめるであらう。而して資本家に擁立せられたルイ・フィリップは、其思想其日常生活に於て屢々國王よりも一資本家たるの觀ある人物であつた。彼れの政治上の方針は、中庸（*juste milieu*）その臣民に告げる言葉は「儲け給へ」（*enrichissez vous*）であつた。彼れが「**株屋の王**」（*roi des agioteurs*）と稱せられたのは、異しむに足らぬ。政府の政策を左右するものは、金權豪族（*haute finance*）であつた。選舉法は、彼れの即位後間もなく改正せられたが、選舉權享有者（納税二百法以上のもの）は、佛蘭西全國を通じて總數二十萬を超えず、労働者の窮狀の如きは殆ど顧みられなかつた。トライチユケの言ふ通り、七月王朝の治世は實に**ブルジョワジイの黄金時代**だつたのである。

二

労働者階級の不平は、先づリヨン絹織物職人の暴動となつて破裂した。當時リヨンの絹織物業には、三萬乃至四萬の織子と八千乃至一萬の親方と八百の織元とがあつた。織元の仕事を親方が引受けて織子に織らせるのであるが、織子の賃銀は、織元と親方との二重の壓迫の爲め最低限まで引下げられた。リヨン絹織物業は久しく繁榮であつたが、外國競争者に新技術が採用せられた爲め、甚しい苦境に陥つて、織子は僅に一時間五サンチムしか支拂はれぬといふ有様になつたのである。そこで彼等は最低生活賃銀を要求した。それが拒絶されたので、遂に織子等は武器を執つてリヨンを襲ひ、ロオン縣知事及び軍隊指揮官は、一時市外に退去せざるを得なかつたのである。一八三一年十二月の事で、労働者が始めて有名な「労働しつゝ活きるか、戦つて死ぬか」の旗を翻へしたのも此時である。而して此暴動に依つて政治上の**共和主義とプロレタリア運動**とが結び付けられることになつた。

自由平等の原則から王政の復活に反對する共和主義者は、先づ普通選舉を要求した。彼等は當時の制限選舉法の下に於ては、到底代議院の多數を占める見込がなかつたからである。然るに、一八三一年三月九日激論の末下院を通過した選舉法は、上記の如く、彼等の要求とは遙に距離ある

ものであつた。そこで大革命の經驗を未だ忘れぬ共和主義者は、立憲的手段に望みを絶ち、秘密結社を組織して、市街戦に依つて其目的を成就しようとした。一部分カルボナリ結社から發生した「民友同盟」（*Société des amis du peuple*）が組織せられ、次「**人権同盟**」（*Société des droits de l'homme*）が起られた。之に對して代議院が秘密結社嚴禁の法案を可決するや否や、一八三四年の四月には巴里とリヨンとに殆ど同時に暴動が破裂した。

これより先き、労働者階級は七月革命に参加したが、それに依つて何物をも贏ち得なかつた。否な、失望しただけ其状態は、前に劣るものとなつたといつて好いのである。労働者は本能的に現存状態に對する反對者となつた。「然し乍ら、孤獨にして、自己の状態を判斷する力なき労働者は、指導者を得ようとして四圍を眺めて、之を上層階級に求めた。然るに茲に共和主義者が、これも同じく孤立してゐた。」そこで此の兩者の提携が成立つて、共和主義者は頭腦を、プロレタリアは體力を提供することになつたのである。然るに、此運動に於ける共和主義者と労働者との關係は、漸く變化して、始め指導者だつたものが、漸く被指導者に動かされるやうになつた。労働者は單に王政の廢止、形式上の平等に満足するものではなくて、其の求める所は實質的の

平等、所有制度の變革である。共和國其者が目的ではなくて、共和國は最終目的に達する爲め的手段に過ぎぬ。純粹なる共和主義者は、漸く此運動に留まることが出来なくなつた。一八三四年の暴動當時、單純なる共和主義は既に行き詰まつてゐたのである。

三

此局面を展開せしめたものは、バボエフ陰謀の回顧であつた。バボエフの同志フリツプ・ブオナロッツチは、七月革命前「バボエフ陰謀史」(Ph. Buonarroti, Histoire de la conspiration pour l'égalité dite de Babeuf) を著し、ブルユツセルで出版して殆ど人に顧みられなかつたが、上記一八三四年の事件に坐して禁獄せられた革命家等は、偶々獄中に此書を読み、平等原理の眞實最終の歸結は、完全なる所有の平等以外に存せぬことを痛感すると共に、深く此の殉教者の事蹟に動かされた。共和主義者として暴動に参加した人々は、バボエフ主義者として出獄したのである。此の**バボエフ主義**(babouvisme)の採用と共に、純粹の共和主義者は漸く速に此運動から脱退し、遂に *Société des familles* としむ結社の解散した一八三七年を以て、バブギズムは純プロレタリア運動となつたといはれて居る。斯くて七月革命以來第四の秘密結社たる「四季

同盟」(*Société des saisons*)が組織せられた。其機關紙は曰く、「吾等は正にバボエフが解したる如き、或は略ほその如き財の共有を要求する。……社會的狀態を後日新なる基礎の上に再建する爲め、之を根本的に破壊するは、吾等の義務を行ふ所以である」(『*l'Homme libre*』)。而して彼等は秘かに武器彈藥を購入して、市街戦の準備を整へた。一八三九年五月十二日の巴里に於ける擧兵は失敗に終つたが、僅か三四百より成る革命軍は、巴里市廳を占領して布告を發し、王宮に向つて進撃する勢を示して、一時は全市民を震撼せしめたのである。此暴動の鎮定後更に「平等労働者同盟」(*Société des travailleurs égaux*)が組織せられた。

これが佛蘭西社會運動の一特色たるバブギズム又は**フランキスム**である。後の名稱は、同盟の首領オオギユスト・ブランキ(L. Auguste Blanqui)から來たものである。

此のプロレタリア運動を背景にする佛蘭西社會主義思想は如何なるものであつたか。

四

十九世紀前半の佛蘭西は、社會主義思想の淵藪であつた。獨創的な社會主義思想家の輩出したこと、其體系の多種多

様なることに於て、如何なる國も佛蘭西には比肩できぬ。茲にはその最も著名なるものを選んで、サン・シモン、フリエエ、カベエ、ルイ・ブラン、ブルドンの思想の概略を記述する。

サン・シモン伯 Charles-Henri de Rouvroy,

Comte de St. Simon (1760—1825) は、シヤアルマン大帝に出づと稱せらるる舊家に生れ、亞米利加獨立戦争に参加し、土地の賣買に依つて資産を積み、百科の學を修め、破産し窮迫し、自殺を試みて遂げぬといふ、數奇を極めた生涯を送つた人である。其の臨終の語は、「大事を成すには熱情なかるべからず」であつた。彼れは歴史哲學に貢献大なる人であるが、姑らく其社會思想のみに就いていへば、彼れが説く所は、畢竟「産業主義」とも稱すべきものである。「社會は全然産業(Industrie)の上に安んずるものである。産業は其存在の唯一の保障、一切の富、一切の繁榮の唯一の泉源である。最も産業に有利なる事物の狀態は、最も社會に有利なる狀態である。併し彼れの所謂産業階級は労働者階級ではなくて、労働者と共に企業家商人等をも其中に包含するものである。彼れは問を發して曰く、今突然最大の學者、藝術家、技師、工業企業家、商人、銀行家合計三千人を失ふと、王族、貴族、高僧、高官、大地主三萬人を失

ふと、佛蘭西に取つて孰れが大なる損失であるかと。而して自ら答へて曰く、三萬人を失ふは悲しむべきことに違ひないが、其補充は容易である。佛蘭西の眞の生命はその精神的労働者に在る。故に産業者、即ち眞に働く者が支配者とならなければならぬ」(Parabole de St. Simon, 1819)。別の處で「予は廷臣と貴族に反對して産業の爲めに書く。雄蜂に反對して蜜蜂の爲めに書く」といつて居るのも(*Système des Industriels*, 1821)同じ意味である。

茲までのところサン・シモンの所説は、まだ不勞所得排斥の萌芽を示して居るに過ぎぬ。成程彼れは其「新基督教論」(一八一五年)に「宗教の任務は、最貧階級の運命を能ふ限り速かに改善するといふ大目的に社會を導くことに在る」といひ、別の處でも人類進歩の最高目的は、「其手の労働以外に生活の手段なきものゝ狀態を能ふ限り改善すること」に在るといつては居るが、而かも彼れは遂に資本私有の廢止要求にまでは到達して居らぬ。サン・シモンの現社會に對する批評を擴充推究して、當然社會主義的と稱し得べき結論に到らしめたのは、**バザール**(Bazard) **アンファンタ**(Enfantin)に率ゐられたサン・シモン主義者である。

五

「一切の社會制度は、最も多數、最も貧困なる階級の道德的、精神的、及び肉體的改善を目的としなければならぬ。」これがサン・シモン主義者の明言する所である。併し如何にして之を行ふべきかといふに、彼等は財産の共有又は均分を是認しない。彼等は人間の自然的不平等を信じ、此の不平等を基礎として新社會秩序を定めようとするものだからである。彼等の第一倫理法則となすものは、「各人は其能力に應じて位置に就き、其仕事に應じて報酬を受ける」と是れである。此法則を實現せんが爲め、彼等は「例外なく一切門地の特權廢止と、從つて有ゆる特權中の最大特權たる相續制度の絶滅と」を要求するものである。サン・シモン主義者は、「現在分割せられて個別財産となつてゐる、一切の勞働用具、土地及び資本が結合せられて一の社會的基礎をなし、而してそれが、社會組織と階等的秩序によつて、各個人の任務が其能力の表現となり、各個人の富が其仕事の表現となるやうに、利用せられんこと」を要求するものである。彼等は無條件に所有制度を否定するものではないが、所有制度が不勞所得の收得を可能ならしめること、即ち「或人々の爲めに無爲といふ背神の特權、他人の勞働に依つて生活する特權を神聖化する」ことを攻撃するものである。

サン・シモン主義者は又婦人解放を主張する。基督教の一夫一婦婚には反對せぬが、「妻が夫と平等の位置に立つべきことを要求するのである。曰くサン・シモンの宗教は、たゞ今日結婚の名の下に、献身と利己と、無智青春と無力との醜怪なる結合を爾かく屢々神聖化する、彼の破廉耻なる賣買、彼の合法的なる賣春を絶滅せんと欲するに過ぎぬ」と (Bazard-Enfantin, Lettre au président de la chambre des députés, 1830)。

バザールとアンファンタンとは始め行動を共にして、四千人の同志を集め、其教義に基づく共同「家族」、學校、講堂、更に進んで教會をも起こすに至つたが、間もなく沈着なるバザールと熱情的なるアンファンタンとの間に意見の衝突を來たし、殊に後者が極端なる自由戀愛を主張するに及んで、前者は脱盟し、アンファンタンは少數の忠實なる同志を率ゐて巴里郊外に隱退するの已むなきに至つたが、此の小宗派も、一八三二年八月裁判に依つて解散を命ぜられた。一時世の視聽を動かしたサン・シモン主義運動は、斯くして終りを告げたのである。併し此運動が當年の佛蘭西智識階級に與へた影響は看過すべからざるものであつて、オオギユスト・コント、オオギユスタン・チエリイ、ピユシエエ、ピエル・ルウ、ミシエル・シュヴリエエ、アドルフ・ブランキ等は、皆な一時サン・シモン主義者であつた。

近世社會思想大略

第十三講

小泉 信三

第三篇 佛蘭西社會思想

第三章 プロレタリアの發達

社會主義體系 (下)

所謂「空想的」社會主義者中此の名稱の最もよく當つたものは、蓋しフリエエであらう。フリエエの空想力の富麗は往々精神病の域に迫らうとするものがある。其の理想社會の實現される時は即ち北極の氷が解けて西比利亞に蜜柑が實り、海水の味が變じてリモナアドよりも甘美となり、危険なる鱈魚鮫鯨は死滅して鯉の如き有用魚は増殖し、獅子虎の如き猛獸が人間の奴僕となる時だといつたのはフリエエであつた。世界の年齢を幼少壯衰の四期合計八萬年と計算し、此の全年齡を更に三十二期に分ち、天體地球に起る變化をこれと照應せしめたものはフリエエであつた。而して此の端睨すべからざる空想力の持主は、其の又空想

とは反對に、最も平凡無事の生涯を送つた人であつた。シャル・フリエ Charles Fourier (1772—1837) はバザンソンの商家に生れて商家の手代として巴里に死んだ。其収入は年額一千乃至一千五百法であつたといふから、貧寒なる生活を營んだものといはなければならぬ。ところが、此の獨身で質素な生活を營んだフリエエが、其空想上には人間の欲情 (passions) の極端なる解放と満足との行はれる社會を描いて、例へば一人の女子は同時に三人の男子、即ち夫と生殖者 (genteur) と情夫 (favori) とを有し、猶ほ此外に法律の資格なき愛人を有することが出来るなどと説いたのである。

一切の生存するものが目的とする所は幸福であるが、幸福は欲情 (生物以外のものに就ては、引力) の満足に由て生ずる。欲情を満たさんとする所に運動が起る。此運動に四種がある。社會的、動物的、有機的及び社會的運動がそれであつて、フリエエの處女作標題 (Theorie des quatre mouvements, 1808) は此に由来する。フリエエは社會的運動の法則を發見せんが爲め、先づ人間欲情を分析して、「官能欲」五 (視聽觸味嗅)、「愛情欲」四 (友誼、戀愛、野心、家族感情)、「分配欲」三 (變化を欲するの情、偏執の情、統一を欲するの情) の十二とする。彼れは此の十二

の欲情の完全なる調和ある満足を求めるのである。フリエ
エは人類發生の樂園期から起算して、今日を其の第五に相
當する文明期と稱して居るが、今日此の欲情の満足を妨げ
てゐるものは何かといへば、富の不足である。「富は幸福の
第一の源泉である」。「有ゆる自由の第一のものは、物質的
自由である。」そこで生産の増加が第一の急務となる。それ
には所有の組織と労働の組織とを改めなければならぬ。そ
の新組織の原則としてフリエエが説くものは即ち農業的組
合 (Association agricole) と産業的引力 (Attraction
industrielle) とである。フリエエの「フアランジュ」は
此原則を實現すべき方法であつた。

Phalange は約方一哩の土地の上に千八百乃至二千
の人が組織する共同生活の組合である。組合員は皆な其土
地の中央部に建設される一棟の宏壯なる大建築内に起臥す
る。此の建物がフアランステル (Phalanstère) である。
フリエエが此のフアランステルの共同生活を主張する最
も重要な一理由は、大規模消費の經濟である。多數人を一
棟の大家屋内に生活せしめることに依りて調理、煖房、燈火、
沐浴等の設備を遙かに善美低廉ならしめ得ることは言を
俟たぬ。此れは消費上にも生産上にも大規模經營の利益を
信ずることが甚だ厚く、今日一方には各家族が個々別々の

which is righter?

經濟を營み、他方には農工業の經營を小規模にして、様々
の設備の重復に由つて夥しき力の浪費が行はれて居ること
を指摘する。フアランジュの屬員は、常に共同消費に依つ
て費用の節約を謀るのみならず、共同にフアランステル
附屬の農圃及び仕事場に於て、農耕を主とする各種の生産
に従事し、フアランジュは其生産物を以て、先づ無條件に
組合員の最低生活限度を保障し、餘剰は十二分五、十二分
四、十二分三の比例を以て、之を資本、労働及び才能 (經
營指揮の才能) に分配するのである。茲に資本に對して配
當の行はれることは異様に感ぜられるかも知れぬが、フリ
エエは私有制度の無條件廢止論者ではない。此れはロバア
ト・オエンの共有主義、サン・シモン主義者の相續廢止論
に明に反對の意を表して居る。フアランステル内でも、
組合員は宛も旅館に宿泊する場合のやうに、其趣味と資力
とに應じて、華美又は質素なる居室を選擇するのである。
而して此のフアランジュに於て人間慾情の完全なる満足が
行はれるのである。

併しフリエエの理想社會は、必しも受動的享樂者の樂園
ではない。フアランジュにも労働の生活はある。たゞ彼れ
は十二欲情の配合調和に由りて、労働を悉く快樂に變ずるこ
とが出来ると信じたのである。蜜蜂、蟻、海狸に取つて然

るが如く、人間に取つても労働は快樂となり得るものであ
る。彼れは今日労働を不快ならしめる諸事情を考察した上
左の如き「愉快なる労働」の七則を立てた。(イ)各労働者は
組合員となり、賃銀でなくて、配當を以て酬ひらるべきこ
と。(ロ)各人は(男、女、小兒)資本労働及び才能なる三つの
資格に應じて報酬を受くべきこと。(ハ)仕事は一日約八回變
更すべきこと。(ニ)任意に結合せる仲間と共に仕事を行ひ、
競争心に依りて之を刺戟すべきこと。(ホ)仕事場及び農圃を美
麗清潔にして労働者を吸引すべきこと。(ヘ)極度に分業を行
ひ、男女老幼をして己れに適する仕事に就かしむべきこ
と。(ト)人をして隨時其嗜好と能力とに應ずる労働に就くこ
とを許すべきこと。而して最後に最も肝要なる一個條とし
て「現在及び將來の爲め充分なる生活最低限を保障して人
に己れ自身と其家族に對する不安を忘れしむべきこと」
フアランジュの齋らす幸福は斯の如きものである。故に
フリエエは期待した。一度び最初のフアランジュが建設
されば、人々は争ひ之を模倣して、久しからずして全地
球面はフアランジュの網に蔽はれ、全世界一切フアランジ
ユの元首たるオムニアルク (omnarque) はコンスタンチ
ノオブルに都するであらうと。然し誰れが最初のフアラン
ジュを建設するか。フリエエは其生涯の最後の十年間一日

も缺かさず、必ず正午に歸宅して客を待たつた。これは試みに
最初のフアランジュの爲め出資の志ある資本家の爲め彼れ
が定めた會見時間だつたのである。客は遂に來なかつた。
資本家は來訪しなかつたが、併しフリエエは殊にサン・
シモン學派の解散後、漸く青年の間に崇拜者を得て、機關
雜誌 Le Phalanstère (後 La phalange) を起こすこ
とが出来た。其師の没後フリエエ主義の宣傳に力を傾けた
のは才能ある **パシフルン** Victor Considerant
(1808—92) であつた。ハイ・フィリップに賦せられたその
Destinée sociale (1845—44) は最も權威あるフリエエ
主義教科書である。彼れは又、失敗には終つたが、亞米利
加テキサスにフアランジュ建設を試みたこともある。(一八
五四年)。コンシデランの名と共に記憶すべきは、其の「勞
働權」の説である。彼れは人間が自然狀態の下に於て享
有してゐた漁撈、狩獵、果實聚集及び放牧の四原始權の代
償として、労働者は労働權を保障せらるべきものであると
説いた。労働權はフリエエも之を説いたが、コンシデラン
はフリエエのやうに未來社會に於てなく、現在直ちに之
を保障すべしと説いたのである。「労働權」は「労働の組織」
と共に最も人口に膾炙する標語となつた。

等が、利己利慾、名譽心、吝嗇、冷淡、不人情の如き富者の有ゆる惡徳と、嫉妬、羨望、憎惡の如き貧者の惡徳との根本原因である。故にカベエは「共産」を「最も自然なる制度」とするの結論に到達するのである。

人間の理智理性に信頼するカベエは、暴力手段を排し、道理の説教に由て其共産主義を實現しようとした。佛蘭西本國に於て其成功の期待し難きを認めてから、彼れは更に亞米利加に共産主義植民地を建設しようとして試みたが、結局皆な失敗に終つたのである。

四

ブルドン Pierre Joseph Proudhon (1809—1865)

は予の見所では、第十九世紀を通じて、佛蘭西では最も影響の大なる社會思想家であつた。其著作「所有とは何ぞや」一卷 *Qu'est ce que la Propriété*, 1840) は、サンソンの貧家に生れて、身を植字工に起つたブルドンを一躍有名の人物たらしめた。彼れが「所有とは何ぞや」の間に答へて「所有は盜なり」といつたことは、今日世間周知の事である。併し茲で彼が攻撃したのは、所有一般ではなくて、不勞所得或は收利財産である。勞働の客體たり、勞働の結果たるもの、私有は彼れの是認する所であつた。マルクスはブルドンを酷評して「資本と勞働と、經濟

學と共産主義者との中間にあちこち彷徨する小ブルジョワに過ぎぬ」といつたが、ブルドンは私有制度の廢止に反對して「凡ての人が多少の財産を有たん」ことを欲すると或機會に明言して居る。彼れは實に私有財産を普及せしめることに依つて、之を無害のものたらしめんと欲したのである。故に彼れは、現在の私有が強者の弱者搾取なるに對して、「弱者に依る強者の搾取である」といふ理由で**共産主義に反對**する。曰く「共産主義は抑壓と隷屬とである。……共産主義は本質上吾人の能力の自由行使、吾人の最も高尚なる欲求、吾人の最も深き感情に反するものである」

然らば不勞所得を廢止して、而かも「弱者に依る強者の搾取」に陥らしめぬ爲めには如何なる方法があるか。ブルドンは「交換銀行」(*la banque d'échange*) を以て之に答へるのである。

ブルドンの謂へらく、一切社會的害惡の根本原因は貨幣と貸附利子とである。第一に貨幣のみが交換手段と認められる處では、手工業者、製造家は、其勞働を遂行した後、猶ほ必要なる貨幣を所有する者に選返するのを待たなければならぬ。若しも生産物其者が直ちに交換用具となつて、凡ての財が人爲的貨幣價值に對してとなく、各財に含有せら

る、勞働量に應じて相交換されることになれば、事は遙に簡單便宜であらう。第二に人を壓迫するものは貸附利子である。幾多の勤勉なるものが生産を營まんことを欲しても、資本缺乏の爲めに之を營むことが出来ぬ。而して此の必要資本を借入れる爲めには、利子といふ貢納を資本所有者に捧げなければならぬのである。

そこで此の二害惡を除きさへすれば、私有財産制度は淨化せられて、其の社會に有利な一面だけが残るだらうと、ブルドンは考へた。而して紙幣(交換券)を發行して、それで生産者から生産物を購入し、又それで無利子貸附を行ふ交換銀行又は庶民銀行 (*la Banque du peuple*) を設立することを考案したのである。例へば、一靴工が靴を銀行に交換すれば、銀行は勞働と出費とに應じ(但し利潤は除いて)た價格に相當する交換券を交付し、靴工は此の交換券を以て銀行からその必要とする他の生産物を購入する。一方に銀行は貸附、手形買入其他の方法に依つて無利子融通を行ふ。斯くして各生産者に生産物販賣權と信用に對する權利とを保障することがブルドンの目的であつた。而して貨幣と貸附利子との廢止が行はれれば、元來無産者に對して有産者の特權を維持する爲めにのみ存在する政府といふものも不要となつて、一切の強制的法律が廢止せられて、任意

契約が之に代るであらうと考へた。これがブルドンの無政府主義史上重要な名たる所以である。此以前にも無政府主義者の有名なるものには、英吉利の**ゴドキン**(一七五六一—一八三六年)獨逸の**シュチルネル**(一八〇六一—一八五六年)があつたけれども、無政府主義の經濟的基礎を始めて確立したのはブルドンである。但し晩年には無政府の理想の實現し難きを認めて、彼れは成るべく多數の小地方團體に高度の自治權を認める**聯立主義**を採用すべしと説いた。

上述する所に由て明なる如く、ブルドンは決して社會其自身をして、統一的計劃的に生産分配を監視せしめようとするものではない。彼れの理想社會は、獨立の小自作農、獨立の手工業者が、勞働費用に應じて互に其生産物を交換し合ふ社會である。交換銀行は畢竟手工業者各自に仕事場、道具、原料を購入することを得しめ、又生産物を直ちに賣却して、生産續行を可能ならしめる爲めの手段に外ならぬ。ブルドンが重きを置く自由は、大經營と分業作業とを知らぬ手工業者又は自作農の自由である。それは凡て近世大工業以前のものである。交換銀行の助けによつて、各個鐵道従業員が自ら鐵道の所有者となり、坑夫が炭鑛所有者となるといふことは、何人も想像せぬ所であらう。マルク

スが評して、ブルドンの期する所は、人を、中世の手工業職人が、精々、**手工業親方に復歸せしめること**」に在るといつたのは、誣言ではない。而して其のブルドンが佛蘭西に於て最も影響大なる社會思想家であるといふのは、蓋し佛蘭西が文明諸國中、第一の小農小工業の國たる事情に因るものである。

五

ブルドンは近世無政府主義者殊に**バクウニン**に影響する所が大きかつた。**クロボトキン**の無政府共產主義も亦た、ブルドンと同様に、小規模工業の觀察に由て得られたものであつた。クロボトキンは其自叙傳に一八七二年始めて露西亞本國から瑞西に遊び、ジュラ地方の時計製造業を觀察して得る所が多かつたことを記して居る。クロボトキンに印象を與へたのは、「各自己の家で働らくことを許し、従つて自由に談話する機會を與へるところの時計職の組織其者」であつた。而して「時計職人達と一週間を共に暮らした後、私が此山を去つた時には、私の社會主義に對する考へは既に定まつてゐた。私は一個の無政府主義者だつたのである。」

茲に **小經營と無政府主義との密接なる關係** が窺はれる。

第四章 二月、六月革命及び 巴里コミューン

(一)

一八四八年の始めトックヴィル (Alexis de Tocqueville) は議會に於て、労働者の間に於ける社會主義思想の普及を指摘して言つた。「諸君は、嘗に一法律一内閣、否な此政府の撤廢を要求するに止まらないで、寧ろ今日の社會秩序の基礎掃蕩を意味する見解思想が彼等(労働者)の間に普及してゐるのを認めないか。……而して若しも此種の意見が根を地に下し、廣く一般に普及し、深く民衆の間に浸透したならば、早晚、私はその何日、如何にしてかは知らぬが、併し必ず早晚、最も怖るべき革命を招致するに相違ないといふことを、諸君は信ぜられないか」と。トックヴィルの豫想は其後約一月にして事實となつたのである。

二月革命の經過 を一言にして言へば、それは選舉法改正の要求に出發して王政廢止の要求となり、更に進んで社會的共和國建設の要求に到達したものだといつて好からう。當時ルイ・フィリップは既に民望を失うてはゐたが、議會内に於ける共和主義者の勢力は微弱であつて、革命の二日前までは、眞面目に王政廢止を考へてゐたものは極めて

少數であつた。然るに運動が議會の政治家から院外民衆に移ると、形勢急轉はして、國王は追はれ、共和國假政府が組織せられたのである(二月廿四日)。而してルイ・ブラン、アルベール(Albert)及びドルムエロラン(Ledru-Rollin)なる社會主義者準社會主義者が此の假政府に連なつたのは、此革命に於ける巴里労働者の勢力を表示するものであつた。労働者は勢に乗じ、假政府に迫つて「労働の組織」と「労働權」の保障とを要求し、後の要求は容れられた。ルイブラン自ら筆を執つて起草した宣言に曰はく、

「佛蘭西共和國假政府は、労働に依る労働者の生存を保障するの義務を負ふ。」

政府は凡ての市民に労働を保障するの義務を負ふ。

政府は労働者が其労働の正當なる報酬を收得せんが爲め相互に組合を組織することを必要と認む。

假政府は王室費より剩さるべき百萬法を、その本来これに屬すべき労働者に提供す」と。

次いで此宣言を事實にせんが爲め **國民工場** が設立された。又ルイ・ブランが要求した労働者の創設は實現されなかつたが、彼れを議長、アルベールを副議長とする労働委員會がルキサンブル宮に設置されて、各種の社會主義的提案が茲で討議された。皆なこれ巴里労働者の勢力を背景にして行はれたことである。

(二)

然るに革命後日を経るに従つて、漸くこれに對する反動が現れて來た。二月革命より六月暴動に至る數月間の歴史は、畢竟此の反動の歴史であつたと言つて好い。

元來二月革命に於て表面最も活動したものは巴里のプロレタリアであつたが、併し仔細に觀察すれば、實はプロレタリアは未だ單獨にブルジョワジイに當る迄には發達してゐなかつた。工業資本家に對する貨銀労働者の闘争が當時まだ「部分的事實」に過ぎなかつたことは、マルクスも明かに認めて居る。七月王朝の顛覆は、プロレタリアのブルジョワジイに對する勝利ではなくて、實はプロレタリアとブルジョワジイの下層分子とが上層ブルジョワジイたる金權貴族に對する勝利に過ぎなかつたのである。此の革命の眞相——即ち**二月革命の勝利者**はブルジョワジイに對するプロレタリアでなくて、寧ろブルジョワジイの或部分に對する其の他の部分であつたといふ眞相——は漸く時日の經過と共に明になつて來た。それが労働者の目には不當なる反動として映じる。此「反動」は最も明に國民議會の選舉に現れた。巴里の労働者が國民議會の選舉召集の妨害を試みたといふことが、既に當時彼等が劣勢なる少數者であつた事實を物語つて居る。選舉は一度延期せられて四月廿三——四日に行はれたが、其結果は全然プロレタリアの

希望に反するものであつた。八百四十人の議員の多数を占めたものは、ブルジョワ共和主義者で、巴里に於てさへもルイ・ブランの得票は遙にラマルチンに及ばず、其當選順位は第廿七以上には上らなかつた。加之正統主義者の當選するもの百三十名、七月王朝の支持者の當選するものが百名にさへ上つた。而して新たに國民議會に依つて指名せられた執行委員會には、ルイ・ブランもアルベールも最早連なることを得なかつたのである。

國民議會に於て巴里のプロレタリアは佛蘭西全國の裁斷を受ける形となつた。若し彼等が始めから當時に於ける自己の地位と七月王朝を倒した眞勢力が何であつたかを理解してゐたならば、困難はなかつたであらう。如何にせん、彼等は自家の實力を過信し、バルベ、ブランキ等の革命家は、此過信を奨励した。従つて彼等は、國民議會の裁斷に服従しようとはしない。現に失敗には終つたが、労働者は革命家に率ゐられて、一度暴動的に議會を解散し、別に新共和政府の基礎安定の爲めには、どうしても武力に依つて労働者に一撃を加へることが必要となつた。二月革命の時の如く、「ブルジョワと共に戦はないで、ブルジョワジイを敵として戦つたなら忽ち敗北することが彼等に示されなければならなかつた」(マルクス)のである。

からう。六月革命は何等の積極的プログラムを持つてゐない。それは絶望者の暴動であつた。労働者は絶望者の勇敢を以て、五日に亘つて官軍と戦ひ、双方の死傷は合計一萬六千に上つた。叛亂鎮定の後、其功勞者カヴェニヤツク將軍(Cavaignac)は一時獨裁権者となり、此に代つてルイボナルトが大統領に選舉せられ、而して二度のク・デ・タアを経て一八五二年十二月ルイボナルトは、佛蘭西皇帝奈翁三世となつた。此年レイボオ(Reybaud)は經濟學辭典の「社會主義」なる項目中に記して、「今にして社會主義を論ずるは悼辭を述べるに外ならぬ」と言つた。以て六月暴動後に於ける反動の形勢を窺ふべきである。

(四)

六月革命の鎮定後廿三年にして、巴里は再び慘憺たる市街戦の戰場となつた。巴里**コミューン**の亂(一八七一年)は、其規模の大きかつたことに於て六月革命とは同日の談でない。巴里はヴェルサイユの佛蘭西政府に對抗して、七十餘日間謂はゞ國中別に一國を建てたのである。然し苟も一國の中央政府に反抗して首都の人民が七十餘日間獨立を保つといふやうな事は、尋常普通の場合に行はれるものでは

(三)
政府は兵備を整へた。二月革命當時四散した正規兵は、漸く巴里に歸還する。遊動衛兵隊(garde mobile)は、新に市民の間から募集される。同時に政府及び議會の労働者に對する態度は、反動的挑戰的となる。労働者の感情は益々悪化する。宛も其時國民工場の部分閉鎖が行はれたので、これが導火となつて終に六月暴動が爆發したのである。

國民工場は、前記の如く、失職者に職を與へて労働權保障の宣言を事實にする爲め設立されたものであるが、實際に於ては屋外救貧を大規模に行ふに過ぎないものとなり、後には十數萬に上る失職者罷工者浮浪漢に土工労働を或は課し、或は課せずに救恤(仕事あるものは一日一法、仕事なきものは一法五十參を給す)を行つてゐたが、政府は終に費用と弊害とに堪へなくなつて、被働労働者の一部を或は解雇し、或は強制的に地方に送還し、或は入營を命じたので、遂に暴動を激發したのである。一八四八年六月廿二日の事である。國民工場は既に百弊の巢窟となつてゐたから資本家には勿論、労働者とても、その復讐を眞に望ましい事とは信じてゐなかつたであらう。既に不平に堪へなかつた労働者は、國民工場に關する政府の措置を、たゞ挑戰の手套と解して之に應じて起つたに過ぎなかつたといつて好

ない。それが出來たのは、普佛戦争の爲め偶々巴里市民が武装してゐたからである。一八七〇年の秋、セダン會議で奈翁三世が捕虜になると、巴里市民は帝制政府を覆へし、共和制を宣言し、老政治家チエールに、首腦となつて國防假政府を組織させた。是より先き巴里には、國防の爲めと一つには戦争に基づく困窮者救済の目的を以て國民衛生隊(Grade national)と稱する義勇兵が組織されてゐたが、普魯西軍の侵入と共に當然其兵數は増加して遂に三十萬に達したと記されて居る。而して此義勇兵の多數を占めるものが無職の徒、プロレタリア、小ブルジョワであつたことは、言を俟たぬ。さて一八七一年一月廿八日巴里は終に力盡きて開城降服の已むなきに至つたが、假政府の外相は特にビスマルクに説いて、市内の平安維持といふ理由の下に國民衛兵隊だけは武装を維持することを承認させた。此の武装市民が内亂を起こしたのである。

(五)

内亂が起つたのは、結局巴里市民と利害感情を異にする新政府が組織されたからであつた。二月八日普通投票による選挙が行はれ、同十二日國民議會はポルドオに召集され

たが、これは俗に「郷紳議會」(Assemblée des ruraux)と稱せらるゝほど、地方郷紳、即ち保守主義者反動主義者の勢力を占めた議會であつた。若し國王の人選其者に就いて意見の一致を缺くといふ事さへなかつたならば、彼等は王政の復活を決議したであらうと言はれて居る。帝政政府を覆へし、又チエルの國防政府をも喜ばなかつた巴里市民が、斯る議會に平かなることを得ないのは、勿論の事である。而かも又ポルドオ議會の措置は、一々巴里市民を憤激せしめる事のみであつた。議會は、先づ國民衛兵隊の縮少を欲して、衛兵にして失職及び貧困の證明書なきものは日當の支給を停止することを決議した。續いて正規軍及び國民衛兵司令官に市民に不人望なる將官を任命した。戰時市民の困窮を緩和する爲めに、前年來施行されてゐた手形及び家賃の支拂猶豫を兩つながら廢止した。首府を巴里からヴェルサイエに移す決議をした。此等の諸決議には縱令如何なる理由があつたにしても、その時機と方法の當を得なかつたことは、六月革命當時の國民工場閉鎖に比すべくして、實は更に一層甚しきものだつたと謂はなければならぬまい。斯くてポルドオと巴里との關係が極度に緊張して

ある時、チエルが機先を制する爲め、正規兵に命じて國民衛兵隊所屬の大砲を奪取せしめようとして失敗したのが機會となつて、**内亂が起つた**。チエル等は急遽ヴェルサイエに逃れ、巴里は國民衛兵の選舉した中央委會の支配に歸した。三月十八日の事である。

此時若し國民衛兵が直ちにチエル等の跡を追ふてヴェルサイエを衝き、進んで佛蘭西各地の都市と連絡を取ることを試みたならば、或は局面の展開を見たかも知れぬと謂ふものもある。然るに、巴里側の指揮者には其丈の智恵と果斷とがなかつたので、徒らに守勢を取つて日時を空費し、巴里市民は佛蘭西全國を敵にして戦ふやうな位置に陥つた。併し内亂の鎮定は中々容易くなかつたので、チエルも始めは妥協的の微温的態度を以て巴里に臨み、それが爲めに強硬論者の非難を蒙つた位であつたが、獨逸からの捕虜送還に依つて攻撃準備が整ふと、今度は少しも叛徒を假籍しなかつた。政府は終に五月廿一日、巴里西側から市中に侵入し、八日間互る慘虐未曾有の市街戦に依つて、内亂は漸く鎮定された。死者の數は或は六千五百と計上せられ、或は二萬に上ると主張されて居る。叛軍は退却するに

當つて放火し、又人質六十餘名を殺害した。

(六)

さて**巴里コミューン**に現れた**社會思想**は如何といふに、特定の明確なるものはなかつたと謂つて好い。元來コミューンといふ言葉其者にも、確定の意義はない。或者は、佛蘭西に於て殊に甚しい中央集權主義に反對して地方自治權を擴張を要求する標語として「コミューン」を口にし、或者は、聯立主義の意味に此語を用ひ、又ブランキ等は單に革命的顛覆の標語として之を唱へたやうな譯であつた。併し兎に角、事態が進むに従つて、「コミューン」は何時しか現狀に不平なる誰もが要求するものになつた。斯くて一八七一年三月廿八日、市民歡呼の裡にコミューン宣言は行はれたのである。さてコミューンの組織はといふと、巴里各區から普通投票に依つて議員を選出し、此のコミューン會が立法機關たると同時に執行機關たることが其の最も重なる特色とされて居る。**コミューン會を形成した分子**は、種々様々であつて、議員總數八十餘名は大別して一八六四年に創立された第一インタナショナルに屬する社會主義者、ブランキ主義者及び小ブルジョワ的急進主義者

の三つとなし得るが、インタナショナルの多數を占めたものは、ブルドン主義者で、コミューンの施設の上に現れた社會思想も強ひてある言へば、**ブルドン主義**であつた。四月十九日の佛蘭西國民に對する宣言書中に「……畢竟巴里の欲する所は農民に土地を、労働者に道具を、凡ての者に労働を、である」といひ、又その質屋業禁止の條例中に、労働者の労働用具及び金融に對する權利云々と云つて居るのは稍々それを示すものだといつて好からう。此外の施設では麵包焼職人の夜業及び賃銀割引の禁止、市に對する請負に於て私人よりも労働者の組合に優先を認める原則の確定、休業中の工場仕事を労働者生産組合に交附して經營せしめる方針を以て準備をしたこと等を擧げることが出来る。これは或は普通の社會政策と目すべきもの、或はルイ・ブラン流の思想の影響を示すと云はゞ云ふべきものである。併し要するにコミューンは未だ明確な社會的プログラムを樹てる迄に到らぬ中に倒れたのである。假すに時日を以てすれば、或はマルクスのいふ通り、コミューンの純プロレタリア分子が勢力を得て、それが其施設の上にも現れたかも知れないが、其の時日が與へられなかつた

のである。

其時日を與へられぬ中にコンミュンが倒れたのは、巴里が佛蘭西全國を敵としたからであつた。少くも巴里コンミュンと自餘の全國、殊に全人口の五割三歩を占めた農業階級との間に痛切な利害の一致が缺けてゐたからである。マルクスは佛蘭西農民は巴里コンミュンと利害を同じうするものだ力説して居る（「佛蘭西内亂」）が、此説は疑ふべき理由がある。假りに**農民と巴里のプロレタリア**とは本來利害の一致すべき筈のものであつたにしても、當時の農民はそれを自覺してゐなかつた。多數の郷紳は農民の投票によつて議會に選出されたのである。

(七)

一言**マルクスの對巴里コンミュン態度**に就いていへば、彼れは事前に於ては、明に之に反對であつた。彼れは私信中に「假政府を倒して『巴里コンミュン』を建設しようとするのを『馬鹿な事』と評し（「エンゲルス宛書簡」）、又インタナショナルの指導者として、公けにも「……………敵軍が巴里城門に迫つてゐる時に際して、新政府を顛覆しようとする一切の試みは、悉く自暴自棄の愚行である」と

戒しめたのであつたが、一度び内亂が起つた後には、極力之を應援讚美して、或は之を「六月革命以後に於ける我黨の最も光榮ある行業」だといひ（クウゲルマン宛書簡）、又「労働者の巴里と其のコンミュンとは新社會の光榮ある前驅である。其爲めに斃れた人々は労働者階級の偉大なる胸の中に祀られて居る」ともいつた（「佛蘭西内亂」）。併しこれは恐らく「革命的ヒロイズム」を讚美したるに止まり、單に事の成否といふ見地からいへば、彼れも恐らくその當初の判断を變へなかつたであらうと推察される。エンゲルスは後に至つて、一面コンミュンを讚美しながら、他面此の爲めに、社會主義の勝利に到達すべき「正常の進化は妨害せられ、決定が遅延し、長引き、又より重き犠牲を伴ふ」たことを間接ながら承認した（「佛蘭西に於ける階級闘争」緒言）。それも其筈である。コンミュン鎮定後、軍法會議に附せられて有罪の判決を受けたものは一萬三千人、追放に處せられたものが七千五百人であつた。社會主義運動は其爲め佛蘭西に於て一時全く跡を絶つに至つたのである。

近世社會思想大略

第十五講

第三篇 佛蘭西社會思想

小泉 信三

第五章 政治的社會主義と

サンザカリズム

(一)

コンミュン内亂の鎮定と共に一時跡を絶つた社會主義運動は漸く一八七〇年代の終りに至つて復活した。此の社會主義復活に就いて特筆すべきは、**マルクシズム輸入**である。これより先き、労働者の努力は専ら生産組合主義及びブルドン主義に傾いてゐて、政治的權力の獲得による資本家の剝奪といふことは、歓迎されてゐなかつたが、一八七八年リヨンに召集された労働者大會には稍々新風潮が現れ、更に其翌年マルセイユに開かれた大會では、前年の少數者が多數者となつて、政治的社會主義、即ち集産主義が勝利を得た。其決議に曰はく、「社會問題は、人間各自が其欲望の完全なる充足と、其能力の完全なる發展とを遂ぐる

時始めて之を解決し得るものなることを考慮して、本大會は、財産私有が此の満足の物的並に精神的不平等の原因にして、此發展を保障し得ざるものなることを宣言し、且つ人間社會の爲めに、土地鑛山機械交通機關建物及び資本財産を集産化せんことを要求する」と。大勢を動かし、此に至らしめたのは、重にマルクス主義者ゲド（Jules Guesde）の功に歸すべきものである。同じ大會の決議に基づいて、ゲドはマルクスの女婿ラファルグ（Paul Lafargue）等と共に労働黨（Le parti-ouvrier）を組織した。而して巴里の大會（一八八〇年）で可決せられた黨の綱領案は、マルクス、エンゲルスと協議の上定められたもので、それには、生産階級の解放は即ち一切人間の解放を意味し、生産階級の解放はその生産用具を所有する程度に於てのみ遂行せらるゝものであり、而して生産者が生産用具を所有するの形態は、個別所有と集合所有との二つであるが、前者は「事實上未だ會て普遍的に存在したることなく、又工業の進歩の爲め益々排除される」ものたるに反し、後者に至つては、「其の物的並に精神的要素が正に資本主義社會の進化其者に依つて造り出される」と説いてある。併し所有の社會化實現の爲めには社會黨の發達がなくてはならぬ。「此の集合所有は、特別の政黨に

組織せられた生産階級、即ちプロレタリアの革命的行動よりのみ生じ得る」のである。

(II)

労働黨の創立後間もなく分裂が行はれたことは、後述の通りであるが、それよりも注目すべきは、黨が存立の必要上、純粹マルクシズムに修正を加へて、所謂「農業綱領」を採用するの已むなきに至つたことである。

既述の如く、マルクシズムは産業上の大経営、殊に大工業の發達と、従つて無産賃銀労働者階級の發達とを豫想し前提する社會主義である。佛蘭西にも、其北部及び東部地方には、マルクシズムの輸入を可能ならしめる丈の大工業の發達はあつた。然し全體から見れば、佛蘭西は小農小工業の國である。「……佛蘭西固有の工業の大部分は、仕事場に於ける特有の組織の爲めに、猶ほ依然として半手工業的、小經營的性質を帯びてゐる。……それは屢々美術工業である。リヨンの絹物工業がさうである。巴里の奢侈工業の幾多のものがさうである。例へば、英吉利の石炭、鐵、及び木棉に於ける主要大工業とは全く正反對である。……著しく小ブルジョワ的色彩を帯びた工業の組織に對應するものは、佛蘭西農業の小ブルジョワ的性質である」(ゾムバルト)。二十世紀初頭の調査によれば、農村人口は佛蘭

タリヤ化を俟つて始めて社會主義の實現が可能となるものならば、農業綱領は此形勢に逆行するものだと謂はなくてはならぬ。これは矢張り現實運動の必要上マルクシズムの修正が行はれたのだと解すべきものである。

(III)

労働黨が此の對農民讓歩を決する前に、既に偏マルクス主義政綱に懐らぬ一部黨員は脱黨して、別に一黨を組織した。(一八八二年)ブルッス(Paul Brousse)に率ゐられた**社會主義労働者聯盟**(Federation des Travailleurs socialistes) 俗に所謂「可能派」(possibilistes)がそれである。然るに此一派の餘りに現實主義的なる運動方針に懐らずして、今度はアルマン(Allemane)一派が別れて**革命的社會主義労働黨**(Parti ouvrier socialiste révolutionnaire)を創立した。(一八九〇年)ブルッス黨は漸次に重要企業の國有市有の歩を進めることを集産主義實現の最良法となし、又従つて市町村政治に重きを置き、アルマン黨は労働組合運動に同情を有つて、總同盟罷工に重きを置くのを特色とした。更にアルマン黨からフアイエヌ一派が脱黨して**革命的共産主義同盟**(Alliance communiste révolutionnaire)を組織した。

此外にブランキ黨と獨立社會主義者とがある。**ブラン**

西全人口の六割強を占め、農業經營總數五百七十餘萬中四百八十餘萬は小經營、耕地面積十ヘクタール以下)に屬し、農業従事者毎百人中の五十四人は獨立農民であるといふ(Diehl, Sozialismus u. s. w. 4, Aufl. 243)。斯る事情の下に於て、農工業の中小經營は必ず大經營に壓倒されて滅亡し、又其の壓倒滅亡は一日も速かならんことが望ましいといふ學説が歓迎を受けないのは、當然の事である。そこで労働黨は、マルクス黨としては頗る價値の疑はしい**農業綱領**を定めて、(一八九二・九四年)農民の離背を防がうとした。即ち舊に農業労働者を大地主に對して保護する丈けでなくて、新に小自作農を設定し、又其境遇を安固ならしめることを謀つたのである。賃銀労働者の雇入れを禁ずるといふ條件の下に、自治體が土地を有せぬ家族に土地を分配し(第四條)、又國家補助の下に自治體が農業機械を購入して、之を小農に無料貸下ぐべきこと(第八條)を要求したのなどがそれである。

此の農業綱領の採用に就ては、それがマルクシズムと抵觸するものではないといふ辯解(例へばラファルグの綱領註解)がある。併し辯解の論據は薄弱である。若し果してマルクスのいふ如く、農工業生産力の増進は大經營の中小經營壓倒を意味し、而して生産力の増進と國民大衆のプロレ

キ黨はヴィヤン(Edouard Vaillant)等を首領として、一八八一年に中央革命委員會(Comité révolutionnaire central)を起し、後に之を革命社會黨(Parti socialiste révolutionnaire)とした。此一派は政治革命を其生命とするものであるから、純經濟的改造を主張するブルドン主義者とは無論相容れぬ。其の政治革命の方法は本と秘密結社と市街戦とであつたが、第三共和制の下では漸く政治的事情が變つたので、一個の社會黨として政治舞臺に現れたのである。同時にブランキ主義者も、殊にブランキの死後(一八八一年)、漸く經濟的變革の重要なことに着目し始めた。元來マルクシズムはブランキズムプラス歴史哲學プラス經濟學とも謂ふべきものであるから、斯うなると、ブランキ黨の主張はマルクシズムに接近して來る筈である。ヴィヤンも「予は最早彼の、革命は自由意思を以て起こし得るものと信ずるか如き人々を解することが出来ぬ。」といふやうになつた。即ち革命は歴史的發展によつて必然的に齎されるものだと認めるやうになつたのである。ブランキ黨は又暴力主義を奉ずる點に於て無政府主義者とも共通點を持つてゐる。然しブランキ黨は無政府主義者の個人的兇行(所謂「實行宣傳」)を是認しない。「吾々は民衆に依つて青天白日の下に遂行される革命を愛する。……然し吾々

は爆弾を投ずる秘密の専制政治を憎む。吾々の上に其手先と兵士と憲兵とを投ずる公然たる専制政治を憎むやうに。
獨立社會主義者 は一八九八年に至つて獨立社會主義者聯合 (Fédération des socialistes indépendants) を組織した。其會員は多く智識階級か小ブルジョワ階級かに屬するものであつた。後の共和國大統領ミラン (Arsti-de Millerand) 及びジャン・ジョオニス (Jean Jaures) は其の最も著名なるものである。

(四)

上述の次第で、十九世紀の末年の佛蘭西には

- (イ) 勞働黨(ゲエド一派)
- (ロ) 革命社會黨(ブランキ黨)
- (ハ) 社會主義労働者聯合(ブルツス一派)
- (ニ) 革命的社會主義労働黨(アルマン一派)
- (ホ) 革命的共產主義同盟(ファイエエ一派)
- (ヘ) 獨立社會黨

なる六の社會黨があつた。而して其の代議院選舉に現れた勢力は、一八八一年の得票六萬、八五年同七萬から上つて、一八九三年には得票六十萬、議席五十に達し下院内に社會

る處に於ては革命に依る政權略取も共產主義を實現せしめ得るものではないこと、又資本主義的秩序は經濟的行詰まりの爲め一日突如として崩壊するものではないことを説くのである。プロレタリアはデモクラシー及び普通選舉法の下に其力を秩序的合理的に組織することに依つて始めて最高權力を獲得し得るものだといふのである。

此の兩社會黨の對立は一九〇五年まで續いたが、此年に到つて了解が出来て**合同社會黨**(Parti socialiste unifié) が成立した。それには其前年アムステルダムに開かれた國際社會黨大會の調停も與かつて力あるものであつたのである。歐洲大戰前に於ける合同社會黨の選舉に於ける成績を記せば、一九〇六年が得票八十八萬、議席五十二、一九一〇年が得票百十萬、議席七十六、一九一四年が後票百四十萬、議席百三である。

(五)

さて社會黨の發達は上記の如くであるが、此間に於て、社會黨が漸く改良主義化せられて、ブルジョワ急進黨と大差なきものになつた事實は、争ふことが出来ぬ。合同社會黨中にもマルクス主義者、ブランキ主義者が居り、又其決議には、此黨が「階級闘争及び革命の黨なることを標榜し」(合同條件)ては居るが、實際行動の上に於ては、領袖ジョ

黨團が作られた。獨立社會黨のミランとジョオレスとは殊に社會黨諸派の融合提携の爲めに奔走し、又ドレイフェス事件は、軍閥反共和主義者に對抗する必要から社會黨諸派を相接近せしむる効果があつた。然るに社會黨合同の爲め最も盡力したミラン其人が却つて之を二派に分裂反目せしめる行動に出た。彼れが一八九九年ワルデックルツソ内閣に入つて商務大臣となつたことがそれである。社會主義者が所謂「ブルジョワ内閣」に入閣することが既に問題である上に、同じ内閣の陸軍大臣は、コンミュン鎮定者にして社會主義者の讐敵たるガリフェエ將軍である。ミラン行動是非の論は喧しくなつた。さうして社會黨はミランを非難する**佛蘭西國社會黨**(Parti socialiste de France)と之を寛假せんとする**佛蘭西社會黨**(Parti socialiste francais)との二黨に岐れた。上記のイロホ等が前者を組織してゲエド、グイヤンが之を率ゐ、(イ) (ロ) (ハ) (ニ) (ホ) (ヘ) 其他が後者を形成して、ジョオレスが之を率ゐた。ジョオレスの立場は、其の「共產黨宣言」に對する批評に現れてゐる。被れの批評は大體後に述べる獨逸修正主義者の意見に近いものである、即ち「宣言」中にマルクスの説くやうな革命戰略は、プロレタリアの勢力薄弱なる處に於てのみ、其必要あるものであるが、併しプロレタリアの勢力薄弱た

オレスの意見が重きをなしてゐたし、合同前のマルクス黨と雖も、總選舉に投票を集めること、此目的の爲め當面の改良政策を打ら立てることに腐心したことは、前にも述べた通りである。此の**社會主義の「俗化」散文化**に對して革命主義的反動が起るのは當然である。大革命、二月六月革命、コンミュン暴動の記憶を傳へる佛蘭西人、質實平俗を厭ひ、昂奮感激を喜ぶ佛蘭西人に於ては、殊に然りである。此の社會主義革新運動は、消極的には、議會運動、或は一般的に政治運動の否認として現れた。

大體斯う謂ふのである。苟も議會運動に従事する以上は、成るべく多數の投票を集めなければならぬから、何うしても選舉人に讓歩して、社會黨の綱領に手加減を加へる必要が起つて来る。又議院内に於ても、實勢力を収める爲には、社會黨は勢ひ單純な革命主義を棄て、他黨との妥協互讓を甘んじなければならぬ。修正主義、可能主義、ミラン主義は、議會運動の必然的產物である。のみならず、議會運動に従事するものは、労働者自身ではないから、茲に自ら別に社會主義政客といふものが發生し、其政客等は漸く労働者と接觸しなくなつて、労働者の眞の感情欲求を理解することを得ず、又それを欲しなくなる。即ち社會黨運動は漸く労働者自身の運動でないものになる。此の俗化した

社會主義を再び生命あるものたらしめんが爲めには、之を再びプロレタリアのものたらしめなければならぬ、それには何うすれば好いか。プロレタリアは政黨を棄て、労働組合(syndicats)に頼らなければならぬ。労働組合は純然たるプロレタリアの組織である。社會黨は政見を同うするもの、結社で、黨員たるものは必しも自ら労働者でないことを妨げぬが、労働組合に至つては賃銀労働者のみに依つて組織されるといふ特色を持つてゐる。労働組合に依つて、始めて眞の階級闘争が行はれる。そこでサンチカリズム或は革命的サンチカリズムの名稱があるのである。

(六)

然らば労働者は労働組合に依つて、如何にして其の求める所のものを獲得するか。サンチカリストは議會、立法といふ迂廻路を経ずして、直に労働組合の實力行使に訴へることを主張する。此の實力行使の方法たるものは、同盟罷工、サボタージュ、ボイコット等で、これが所謂直接行動(l'action directe)である。同盟罷工は、サンチカリストに取つては戦闘手段たると同時に、又教育手段である。同盟罷工に依つて労働者は階級闘争の眞實を始めて痛切に體驗することが出来る。同盟罷工に依つて一定の要求を貫徹することが出来れば、それは無論成功であるが、其事に失

敗してもサンチカリストは必しも悔まぬ。それによつて労働者の階級的自覺を痛切にし、革命精神を熾烈にすることが出来れば、それで彼等は満足するのである。斯くプロレタリアの闘志の振作といふことが、彼等の最も重きを措く所であるから、革命精神を滅殺するの惧あることは一切之を避けなければならぬ。労働組合の基金を豊富にすることは、此理由からしてサンチカリストの忌む所である。

労働組合は労働者の闘争機關たるのみならず、又將來社會の組織單位をなすものである。サンチカリストは多數社會主義者の如く、生産用具の國有又は市有を以ては満足するものではない。國家又は自治體が私人に代つて企業主となるといふ丈で、資本主義生産方法は決して根絶されるものではない。經營内に於ける階級制度は依然として保存せられ、労働者は依然として他人に使役される賃銀労働者たることを免れぬであらう。サンチカリストは精密な理論を好まないから、將來の社會組織に就て詳しいことは言つて居らぬが要するに、生産用具を労働組合の所有に移し(炭坑を坑夫組合、鐵道を鐵道従業員組合といふやうに)、労働組合の一地方的全國的聯絡によつて、生産分配の調節を行はしめ、國家は全然廢止せぬ迄も、之を有つてなきが如きものによつていふのである。

サンチカリズムを他の社會主義體系と比較すれば、サンチカリズムとマルクスシズムとの間には確かに重要な共通要素がある。第一に其の階級闘争を力説し、労働者の解放は労働者自身の事業でなければならぬことを力説するのがそれである。併し明かにマルクスシズムと相容れぬものも含まれてゐる。サンチカリストはマルクスシズムにある必然論的傾向を是認せぬ。又マルクスシズムは明かに政治的社會主義で、無産階級解放の爲めには必ず無産者の政權掌握になければならぬことを力説し、其の一方法としての議會行動もたしかに否認しては居らぬ。政治行動の否認、將來社會に於ける國家否認の點に於ては寧ろサンチカリズムと無政府主義との間に共通點がある。又現に無政府主義から出てサンチカリズムに到達したのも尠くない。予はサンチカリズムの全部を無政府主義の中に見出すものである(イヅトオ)

七

サンチカリズムの理論はソレル(George Sorel)ラガルド(Lagarde)ベルト(Edouard Berth)等に依つて説かれたが、素とサンチカリズムは、特定の思想家が創唱した理論體系ではなくて、佛蘭西労働組合の實際運動の中から自ら生れたイズムに外ならぬ。一九〇二年労働

取引所聯合會(Federation des Bourses du Travail)が労働總同盟(Confédération générale du Travail)に加入して、佛蘭西労働組合は茲に單一の中央組織を有することになつた。サンチカリズムは畢竟此のCGTの思想的表現で、上記の理論家等は、此の實際運動の「解釋者、翻譯者、註解者」たるに過ぎないのである。これより先き、對峙反目せる社會黨が、各々労働組合に自黨の勢力を扶植しようとなつた爲めに、労働組合の間にも黨派的反目が輸入された。大體に於て労働組合聯合會(一八八六年成立)はゲド黨の支配に屬し、労働取引所聯合會(一八九二年成立)はアルマン黨の指導を受けたのである。然るに一八八〇年代末以降労働組合の間には漸く革命手段としての總同盟罷工が歓迎されて來たのに、獨りゲド黨は政治的權力獲得を重しとする立場から之に反對したので、労働組合聯合會の多數者は、ゲド黨と絶縁して労働總同盟を組織した(一八九五年)。一方労働取引所は其名の如く職業紹介を行ふと共に、労働組合の地方的聯絡の中心機關となつた。その全國的の提携が前記聯合會となり、次いで聯合會が總同盟に加入して二者の合同が行はれたのである。此時既にCGT内には總同盟罷工而かも暴力を伴ふ同盟罷工を社會革命の手段となし、労働組合労働取引所を以て將來

の生活配給の組織となすべしといふ説は既に熟してゐたのである。CGT内にも温和分子はなかつたのではないが、年々の大會に革命主義者は益々優勢を示し、遂に一九〇六年に至つて所謂「アミアン憲章」を可決した。それに曰はく、

「CGTは全く政派と離れて、賃銀制度消滅の爲めに行はるべき、争闘を自覚せる凡ての労働者を糾合す。

「本大會は此宣言を以て經濟的基礎の上に於て資本家階級が労働者階級に加へたる物質的精神的有ゆる形態の搾取並に抑壓に對して労働者を叛逆せしむる階級闘争の承認なることを認む。

サンヂカリズムは、資本家の剝奪に依てのみ實現せらるべき全き解放の準備をなすものなり。そは此目的に對する手段として總同盟罷工を薦め、且つ今は抵抗の團體たる労働組合が將來に於ては生産及び分配の團體たり、社會の基礎たるべきものなることを認む。……

組織に關しては、本大會はサンヂカリズムをして最大の效力を發揮せしめんが爲め、經濟的行動は直接雇主階級に對して行はるべく、本同盟所屬の團體は、労働組合團體としては政黨政派に拘泥すべからざることを決議す……」

なく脱黨者被除名者が出て、統一共產黨(Parti Communiste unitaire)及び聯立社會主義同盟(L'Union dérivative socialiste)を作り、更に此の兩團體が合同して、社會主義共產主義同盟(L'Union socialiste communiste)となつた。今日迄のところ、共產黨は巴里のプロレタリア以外には多く勢力を扶植して居らぬ。最近の總選舉(一九二四年五月)に於ける成績は、下院議席五八四の中、社會黨が百三、共產黨が廿七を占めた。共產黨は獨立して總選舉に臨み、社會黨は勝利を得た左翼諸黨連盟に参加したのである。

CGTの分裂も經過は略ぼ同様であつた。一九一四年八月獨逸兵が白耳義に侵入すると、CGTは、拳の權に對し獨逸のミリタリズムに對して佛蘭西の民主主義及び革命の傳説を救はねばならぬ」と絶叫して國防の事に従つた。それはCGT平生の主張に反するものであるから、開戦後間もなく、和戦の問題に就いて幹部の政策に反對するものが現れたが、其間に露西亞革命が起つたので、今度は共產主義賛否が多數派少數派の争點となつた。一九一九年アムステルダムの大會で國際聯盟、國際労働會議と協動する労働組合インタナショナルが再建され(アムステルダムインタナショナル)、これに對して一九二一年七月莫斯科の大會で赤色労働組合インタナショナルが組織された。

(八)

政治的社會主義と非政治社會主義との發展の大勢は略ぼ上述の如きものであつた。然るに世界大戰と露西亞革命とは佛蘭西社會主義運動にも大衝撃を與へて、合同社會黨は社會黨と共產黨とに分裂し、CGTも亦た其處から分離したCGTUと相對立することになつた。

社會黨と共產黨との分裂は、一九二〇年十二月(ツウル大會)の事であるが、これより先き既に戦争中合同社會黨内一部の少數者は、諸國の急進社會主義者と相呼應して國際主義の運動を起こしたが、それが發達して「共產主義インタナショナル委員會」となり、又別にボルシェヴィズムを謳歌するカツシヤン(Cachin) フロツサル(Frossard)の一派に現れて、黨員の意見を動かした。そこで、トラスブウルの大會(一九二〇年)は第二インタナショナル脱盟を決議し、更に翌年、第三インタナショナル参加條件廿一個條を承認するや否やの問題の爲めに黨は分裂したのである。條件を全部承認すべしといふものが三二五二票、それを非とするものが一〇八二票、棄権者が三九七で、此時の多數者がCachin指導の下に共產黨を組織した。

併し共產黨員の歩調も必しも一致して居らぬ。殊に多くの者が黨に對する莫斯科の指導に平かでない。やがて間も

後者はプロレタリア獨裁の主義を奉じ、互に執行委員を交換する等の形に於て共產主義(第三)インタナショナルと有機的關係を保つものである。即ちCGT幹部と反對派とが争つたのは、アムステルダムか莫斯科かの問題であつた。ところが反對派の勢力は速に増加して(一九二〇年のオルレアン大會に於ては一四八二對六九一、一九二一年のクイル大會に於ては一五五六對一三四八、結局一九二一年十二月にCGTは分裂して、反對派は「統一労働總同盟」CGTU(Confédération générale du travail unitaire)を組織した。さて分裂は行はれたが、CGTに屬する組合が皆歩調を一にする譯ではない。これに屬するものには、共產主義者、「純」サンヂカリスト及び無政府主義者等があつて、共產主義者以外のものは、喜んで共產黨共產主義インタナショナルの指導に服するものでない。サンテチエンヌの大會(一九二二年六月)ではCGTの自由權を保留するといふ條件付きで此條件は翌年の赤色インタナショナル大會で充たされた赤色労働組合インタナショナルに加入するの議が可決せられたが、其時にも賛成七七七に對して猶ほ三九一の反對投票があつた。但し次年のブルジュユ大會には、赤色インタナショナルへの加盟繼續に反對するものがかなり増加した(加盟繼續九七八、條件附加盟一四七、脱退二二二票)。(佛蘭西社會思想終り)

524

481

終